

No.14

March 2014

HIRAIZUMI BUNKA KENKYU NENPO

Annual Report of the Hiraizumi Studies

Contents

Articles

Features of The Hiraizumi culture about Buddhism architecture

SHIMIZU Hiroshi

Relation of The Hiraizumi culture and Hokkaido

KOSHIDA Ken-ichiro

「HEISEN」 thought of FUJIWRA Kiyohira

Ito Hiroyuki

Gastronomic culture of Hiraizumi

MEKAWA Kayo

Literature date study of historical character of Hiraizumi Buddhism

HONDA Yoshinobu

Fundamental research about Hiraizumi Fujiwara's power base, part1

NANAMI Masato

Urban Landscape of Hiraizumi by examination of forth eaves buiding

ARAKI Shinobu

Report of the 14th Hiraizumi Culture Forum

Iwate Board of Education

10-1 Uchimaru, Morioka City, Iwate Prefecture 020-8570, Japan

平泉文化研究年報

第14号

平成二十六年三月

岩手県教育委員会

平泉文化研究年報

第14号

平成26年3月

岩手県教育委員会

序

岩手県では、世界遺産に登録された遺産を含む平泉の文化遺産を周辺の歴史遺産も含めて総合的に調査研究し、その成果を広く公開し活用していくため、研究機関の整備を検討しています。そのための一環として、平泉遺跡群の中核遺跡である国指定史跡「柳之御所遺跡」の発掘調査を進めるとともに、「平泉文化研究機関整備推進事業」により、平泉文化研究に必要な人材の発掘と育成、研究者相互の連携や多角的・学際的な研究の推進を図るための共同研究など、研究基盤の整備と拡充に取り組んでいます。また、「平泉の文化遺産」について、「平泉文化フォーラム」などの機会を通して、県民の学習と理解の場を提供するよう努めているところです。

岩手県教育委員会は平泉文化研究体制整備の観点から、柳之御所遺跡を含めた平泉遺跡群の調査、および研究の拠点として「平泉遺跡群調査事務所」を設置するとともに、「平泉文化フォーラム」を共同で開催するいわて高等教育コンソーシアムと、平泉文化の総合的研究体制について協議を進めながら、共同研究を行っています。

この平泉文化研究年報は、毎年度の平泉文化共同研究の成果をまとめたものです。今後も、多くの研究者の方々からご意見ご指導をいただき、本年報が平泉文化研究の進展の一助となるよう努めて参りたいと考えております。

最後に、共同研究に参画された諸先生方をはじめとする関係機関各位のご協力に厚く感謝申し上げます。

平成26年3月

岩手県教育委員会
教育長 菅野洋樹

目 次

【基調講演】

仏教建築にみる平泉文化の特質 清水 擴（東京工芸大学名誉教授）	1
------------------------------------	---

【研究報告】

平泉文化と北海道 越田 賢一郎	13
「平泉」思想と藤原清衡 伊藤 博幸	25
平泉の食文化 前川 佳代	31
平泉仏教の歴史的 성격に関する文献資料学的考察 誉田 慶信	43
平泉藤原氏の権力基盤に関する基礎的研究（その1） 七海 雅人	55
四面廂建物からみた平泉の都市景観 荒木 志伸	67
第14回平泉文化フォーラム実施報告	71

例 言

1. 本書は、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と、いわて高等教育コンソーシアムが行っている、平成25年度「平泉文化研究機関整備推進事業」の成果を含むものである。
2. 本書には、いわて高等教育コンソーシアムと共同で開催した、第14回平泉文化研究フォーラムでの基調講演、研究発表を掲載した。
3. 本書に収録した第14回平泉文化フォーラムの講演・発表者は以下のとおりである。
清水 擴（東京工芸大学名誉教授：基調講演）
荒木志伸（山形大学）
伊藤博幸（岩手大学平泉文化研究センター）
七海雅人（東北学院大学）
前川佳代（奈良女子大学）
越田賢一郎（札幌国際大学）
誉田慶信（岩手県立大学）
4. 本書の編集は、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課が行った。

基調講演

仏教建築にみる平泉文化の特質

清水 擴

はじめに

今回は、主催者からできるだけ一般にわかりやすい話をしてほしいというような要請がございましたので、たぶん専門家の方には物足りない内容になるかと思いますが、そのあたりはご容赦いただきたいと思います。今日の演題は『仏教建築にみる平泉文化の特質』ということですが、「特質」というのは比較するものがないとわかりにくい。平泉の仏教建築が栄えた時期は、平安時代の末期頃ですので、その頃の京都での仏教建築を比較の対象にしたいと思います。

1. 法成寺伽藍にみる平安貴族の仏教観

平安時代中期の京都における仏教建築について。まず最初に法成寺というお寺について少しお話をしたいと思います。この寺院を作った藤原道長は平安時代中期の最大の権力者でした。「御堂関白」とも称されますが、この場合の「御堂」は、実は法成寺の御堂、特に阿弥陀堂を指しています。このように藤原道長と法成寺は切っても切れない関係で、法成寺が道長の代名詞とあってよいぐらいの位置を占めたお寺でありました。道長の時代は紫式部や清少納言と重なります。道長は『源氏物語』の主人公である光源氏のモデルともいわれています。「この世をばわが世とぞ思ふ望月の欠けたることのなしと思えば」、これは歴史の教科書にも載る有名な歌ですが、この世は私のものだ、満月が欠けることがないように、という非常に驕った歌で、それぐらい絶対的な権力をもった人でした。その人が造ったのが法成寺です。

法成寺は東京極大路のすぐ東側に建てられました（図1）。洛中ではなく、洛外です。当時の京都は、洛中での寺院造営は禁止されていたので、道長も洛中を避けて、洛外である東京極大路に接する東にその敷地を選びました。規模は方2町、約240m四方の広大な敷地です。この大路をはさんで西に位置するのは京極殿または土御門殿と呼ばれた道長の屋敷です。この位置関係は重要ですので、ご記憶頂きたいと思います。

法成寺の伽藍は中央に大きな池があり（図2）、それを取り囲むように多くの仏堂が配置されました。私の復原案をもとに描かれた鳥瞰図をご覧ください（図3）。池の正面中央に建っているのが金堂、池の西側に東面して建つのが阿弥陀堂です。寛仁4年（1020）にこの阿弥陀堂が造られますが、最初は阿弥陀堂と鐘楼と寝殿、この3つの建物から出発しています。この段階では無量寿院と呼ばれていました。その後、金堂その他の建物が次々と建てられて大伽藍に成長し、法成寺という名前に改められます。道長は万寿4年（1027年）に逝去しますからこの間わずか7年間です。法成寺は道長最晩年の寺院でした。

2. 末法思想と浄土教の隆盛

道長の無量寿院造営には二つの背景が考えられます。ひとつは末法思想です。平安時代の中期ぐらいから盛んになる思想で、末法の時代には仏法が衰えて社会が乱れると考える思想です。お釈迦様の入滅を起点にして、正法と像法と末法という3つの時期に分かれます。正法はお釈迦様が入滅した後の500年間、あるいは1000年間で、この時期は仏法が正しく伝えられ、穏やかで安定した時代です。次の像法は正法のあとの500年間または1000年間で、教法は正法時と同様に存在するけれども、修行は形式に流

れて悟りを得る者はなく、造寺造仏が流行するという時代、つまり仏法が衰える時代です。そして最後の末法ですが、像法後の1万年間で、教法のみあって、それを実践する行も証もなくなった時代、救いのない時代ということになります。わが国では永承7年が末法の第1年と認識されました。これに符合するかのよう、この時期には天変地異が続発します。例えば1030年には疫病が流行して、京都の町なかには死体のごろごろ転がっていた、あるいは六条川原では死体を焼く煙が絶えなかったといひます。また、その2年後には富士山が噴火する。そしてさらに2年後には大風が吹いて、有名な寺院とか神社の建物が転倒する。また天皇の住まいである内裏も風で倒壊する、というようなことがありました。

もうひとつの不安な要素として武家の台頭があります。源氏や平氏が次第に力を蓄えて、やがて貴族政権に取って代わるのではという不安感が貴族の間に広がります。こうした背景があつて、この世はいやな世だから早く来世に、極楽浄土に行きたいものだという、いわゆる浄土教の思想が広がっていったと考えられています。

末法思想の、あるいは厭離穢土・欣求浄土の裏づけになったのが、寛和元年に恵心僧都源信が著した『往生要集』です。これは当時の貴族の座右の書ともいえるものでした。内容をつづめれば、まず地獄がいかに恐ろしい場所であるか、それに対して極楽がどれほどすばらしい世界なのかが説かれています。誰もが極楽に行きたいと願うように導いていく。そして極楽に行くにはどうしたら良いのかを説きます。当然中心になるのは念仏ですが、諸行往生、つまり仏道修行や善行を重ねることも往生浄土のための助縁になるとしています。お寺を造ったり、仏像を作ったりということも善行になると当時の貴族たちは考えたようです。そして、これを契機にして造寺造仏の機運が高まっていった。こうした思想的な背景、時代的な背景がありました。

無量寿院造営のもう一つの背景には、道長にとっての個人的な事情にありました。晩年の道長は病気に悩まされます。ひとつは飲水病、今の糖尿病にあたります。それから胸病。これは心臓疾患だろうと言われています。寛仁2年(1018年)に道長は胸病の発作を起こします。かなりひどかったらしく、翌年には出家をします。さらにその翌年にはまた胸病が悪化し、このときは死を覚悟したというような記述もあります。晩年を苦しめた病が、道長にさらに往生浄土を求める気持ちを強くさせたと考えられます。

3. 九体阿弥陀堂について

道長が作った法成寺の阿弥陀堂は九体阿弥陀堂と呼ばれるものです。現在、九体阿弥陀堂は1つしか残っていません。浄瑠璃寺の本堂です(図5・6)。京都からはだいぶ離れたところに位置します。中央に中尊の丈六の阿弥陀像を安置し、その両側に半丈六の阿弥陀を四体ずつ、計九体の阿弥陀仏を安置する形式です。浄瑠璃寺の阿弥陀堂は地方の豪族が作った寺院だったために質素なお堂で、当時の阿弥陀堂を代表する建築とは言えませんが、唯一の現存例として大変貴重な存在です。

九体阿弥陀堂造立の背景に『観無量寿経』というお経があります。そこには「九品往生思想」が説かれています。これは、人間は生前の行いによって上品、中品、下品の3品に分かれ、さらにそれぞれの品が上生、中生、下生に分かれますので全部で9つのランクになります。最上位が上品上生、最下位が下品下生となります。それぞれのランクによって往生の仕方は異なり、最上位の上品上生の人は、阿弥陀様がたくさんのお供を連れて雲に乗って迎えにくる。そして往生する人は玉の台に乗せられて瞬間に極楽浄土に生まれ変わると書かれています。それに対して最下位の下品下生の人には迎えが来ません。代わりに蓮の花のような日輪が現れて、蓮の花の中に包まれて気の遠くなるような時間を経た後にやっと極楽に生まれると書かれています。この上品上生から下品下生の9品に対応して作られたのが九体阿

弥陀堂ということになります。それでは道長のランクはどうだったのか。道長は非常に熱心な仏教の信徒でしたし、寺院や仏像を作ったり、あるいは多くの善行を施したりしていますから、上品上生かなとも考えられます。一方で、頂点に上り詰める段階でいろんな悪いことをしています。例えば、有力な対抗馬であった自分の甥を罪に落とし入れて政界から追放するというようなこともやっていますし、そういう意味では必ずしも聖人君子ではないわけです。すると下品下生にあたるというような判断もあったかも知れません。いずれにしても自分がどの品に位置するのかというのはなかなか判断が難しい。それで、上品上生から下品下生に対応する九体の阿弥陀仏を用意しておけば、いずれかの阿弥陀仏が自分を浄土に連れていってくれるだろうと考えたのではないかと思います。実際に道長が死ぬときには、阿弥陀堂の中尊の前に寝床を敷いて、九体の阿弥陀仏の手に村濃の紐を通して、それを中尊の手に集め、それを握りしめながら死んでいったということが『栄花物語』に書かれています。これはやはり九体の阿弥陀仏のいずれかが自分を極楽に導いてくれるだろうということだったと思われる。九体阿弥陀堂は文献によって確認できるのは全部で30棟くらいあります。ただこれは非常に規模の大きなお堂ですから相当な財力のある人間でないとできません。最初に造ったのは道長ですが、次の造営者は白河天皇で、法成寺から50年くらいたってからです。そして平泉の大長寿院二階大堂の九体阿弥陀堂は嘉承2年の造営で、史上6番目の九体阿弥陀堂ということになります。九体阿弥陀堂の造営者は白河天皇、堀河天皇、鳥羽天皇などで、臣下が造った阿弥陀堂としては道長、藤原顕季に続いて3番目にあたります。

4. 邸内仏堂と一間四面堂

末法思想の流布に伴って、阿弥陀堂の造営が隆盛を極めるようになります。例えば藤原道長の子供の頼通は宇治に平等院を造営します。平等院ができたのは永承7年でまさに末法の第1年にあたります。このあたりを契機として一般の貴族の間にも阿弥陀堂造営が広がり、ブームともいえるような現象が起こります。ただ、九体阿弥陀堂のような大規模なものは一般の貴族には高嶺の花でした。彼らが造ったのは邸内仏堂、つまり自分の屋敷内での小さな仏堂の造営です。一般に「一間四面堂」と呼ばれるものでした(図7)。文献によれば平安時代中期から末期にかけての阿弥陀堂の造営数は150件程度が確認できますから、実際にはもっと多くが造られたはず。その中で、もっとも多いのがこの一間四面堂でした。中尊寺金色堂もこの形式です。平面で見ると正面、側面とも3間で、母屋は1間四方、その四面を庇が囲むという形式です。仏堂はこの母屋と庇で造られるのが原則で、母屋だけの仏堂は基本的にはありません。ですから母屋と庇で作られる正式な仏堂としては、一間四面堂は最小規模の形式になります。中小の貴族はそれほど財力がないので、自分の屋敷に造営するのはこの一間四面堂が圧倒的に多くなります。中尊寺金色堂も、京都で流行していた一間四面堂を平泉に移植したものと考えられます(図8)。

再び法成寺の話に戻ります。法成寺は多くの仏堂で構成されていました。最初に出来たのが阿弥陀堂です。続いて中心の建築である金堂が造られます。金堂の両側には十齋堂と五大堂、そして阿弥陀堂の池をはさんだ対岸には七仏薬師を安置した薬師堂。そして釈迦堂があります。講堂は道長の息子の頼通によって造られました。最終的に大伽藍として完成しますが、これを奈良時代のお寺と比較すると違いが鮮明になると思います。例えば、奈良の薬師寺の伽藍では、回廊に囲まれた内部にあるのは、金堂と2基の塔、そして講堂しかありません(図9)。基本的に奈良時代のお寺は金堂と講堂と塔によって構成されていました。これに比較すると法成寺はずいぶん様相が変わっていることがわかると思います(図10)。平安時代になってうみだされた伽藍形式と言ってよいと思います。

緑色の瓦を葺いた中心の金堂には中尊の大日如来の他に釈迦三尊などたくさんの仏像が安置されてい

ました。池の周囲には九体阿弥陀堂、薬師堂、十斎堂、五大堂が配置されます。そして檜皮葺きの屋根が釈迦堂です。ほかは瓦葺きの屋根ですが、釈迦堂は檜皮葺きです。九体阿弥陀堂の前には花壇が作られ、唐撫子や薔薇などの色鮮やかな花々が植えられました。極楽浄土を思わせるようにしつらえたのでしょう。それぞれのお堂に安置された仏像ですが、金堂は大日如来が中心になります。阿弥陀堂には丈六の九体阿弥陀仏が、薬師堂には丈六の七仏薬師、釈迦堂には丈六の釈迦と等身の百体の釈迦像が安置されました。中心の部分に本尊の丈六釈迦が安置され、左右の廊状の建物に50体ずつ、合わせて100体の釈迦像が安置されていました。そして五大堂は不動明王をはじめとした五大明王を安置したお堂です。十斎堂は薬師や釈迦など十斎仏と言われる十体の仏像が安置されています。法華堂は内容が不明です。

当時の貴族たちの仏教信仰は、法華信仰と浄土信仰と密教信仰が三本柱と言ってよいと思います。法成寺の仏堂を三本柱に即して分類しますと、まず浄土信仰に関しては阿弥陀堂が対応しています。密教信仰に関しては大日如来を安置した金堂、五大明王を安置した五大堂、七仏薬師を安置した薬師堂が対応します。法華信仰に関しては釈迦堂、法華堂が対応します。道長は法華経の「持経者」と言われ、常に法華経を身近において、法華経を念ずるという生活を送っておりましたし、自らを法華経の守護者だという自負を持っていました。

これらのお堂に道長が実際にこめた目的は多様です。まず「現世利益」。現実の世界で自分に利益を与えてくれる、これが現世利益です。五大堂、薬師堂、十斎堂がこれに対応します。例えば五大堂は五大明王が安置されており、道長に害を及ぼす怨霊を調伏する、あるいは自分の娘の立后を実現する、といった目的で、不動明王の前で修法を行う。薬師堂は文字どおり病氣平癒を祈願するものです。十斎堂は、十斎日というのがあって、月の30日のうちの定められた10日間にそれぞれ仏像が充てられていて、例えば14日は普賢菩薩、18日は観世音菩薩を拜めば罪を滅ぼし福を招くというものです。日常生活が安穩に送れるようにということで十斎堂が造られたわけです。

もう一つは「来世希求」。これは阿弥陀堂が対応します。現世ではなく、死んだあとの世界、来世で安穩に暮らせますようにという祈願。

そしてもうひとつは、やや曖昧ですが「鎮護国家」も含まれていたかもしれません。金堂に安置されている大日如来は仏教世界を統べる中心仏ですから、大日如来によって国を護っていくというような思いもあったのかもしれません。

道長の仏教信仰は次のようにまとめられるかも知れません。まず法華信仰。法華経の守護者を任じていましたし、法華経という經典自体がお釈迦様の教えを一番正しく伝えている經典だと信じられておりましたから、法華経を信仰することは仏教徒としての正嫡であることを表明することと同じになります。これはいわば「タテマエ」であったかも知れません。それに対して現世利益とか、浄土希求というのは「ホンネ」です。こういうことがあって欲しいということを、仏教を通して願うわけですから、それがホンネとしてあったことは間違いない。後ほど述べますが清衡の中尊寺と比較した場合に、道長の法成寺は個人的な祈願が主であって、自分以外の人間、ひいては衆生を済度するという考え方はほとんど見られないというのが特徴ではないかと思えます。

先ほど三本柱と言いましたが、当時の貴族に「雑信仰」は共通してみられましたし、自分にとって都合の良いものであれば何でも取り入れてしまうというようなどん欲な考えが共通してありました。その中でも最も優先したのが来世希求であり、それによって邸内の阿弥陀堂の造営が盛んに行われるようになります。誰も法成寺のような立派なお寺を造りたいという願望はあったのでしようが、それは財政的に無理だったということです。

道長の次の時代の覇者、白河天皇が造営したお寺に法勝寺があります。これは道長の法成寺に匹敵す

る大規模なお寺でした。承暦元年に供養された、平安後期最大の寺院と言ってよいと思います。法成寺と同じように中央に池があり、中島に八角九重塔が建てられました。その正面に金堂があり、金堂の両側には二階の翼廊が付属します。池の西側には阿弥陀堂があります。阿弥陀堂は西方浄土を背にして東向に建てられるのが原則です。そして薬師堂、五大堂、法華堂は法成寺に共通します。つまりこれも当時の雑信仰を表現した形です。金堂が名目上は中心の建築ですが、付属するお坊さんの数は金堂よりも阿弥陀堂のほうが多かったことから分かるように、白河天皇にとって最も重要な仏堂は阿弥陀堂でした。白河天皇自らの極楽浄土が、最も重要な造寺の目的だったのです。

5. 中尊寺

それでは平泉の場合に移ります。まず簡単に中尊寺の仏堂建立の経緯をたどってみます。中尊寺の造営は、清衡が奥六郡を平定した後に開始されたと考えられます。長治2年(1105)に、当国の中心を計って山頂上に建てられた「一基塔」と、寺院中央に位置する「多宝寺」。これは「最初院」ともあります。この「一基塔」と「多宝寺」から中尊寺が始まります。そしてその2年後には大長寿院の二階大堂(九体阿弥陀堂)が造られます。そしてさらにその翌年には、百体釈迦堂が建立される。先ほどお話しした道長の法成寺にも同じ百体釈迦堂がありました。そして、年次はわかりませんが両界堂が造られます。年代的には釈迦堂などとはほぼ同じ時期だったと推測されます。この時期が中尊寺造立の前期にあたります。その約20年後の天治元年には金色堂が、そしてその2年後に新釈迦堂が建立されます。これは「中尊寺供養願文」に書かれたお堂で、同時に三重塔三基と二階経蔵・鐘樓ができて、中尊寺の伽藍が完成する。これが後期ということになります。そういう経過を辿ったと思われます。

それぞれのお堂はどういう意味を持っていたのか。まず前期に建てられた多宝寺と一基塔、百体釈迦堂、両界堂についてお話をします。

多宝寺は、『吾妻鏡』には「寺院の中央に多宝寺あり、釈迦・多宝像を左右に安置す」と書かれています。また「中尊寺経蔵文書」には「出羽・陸奥領国の大主・藤原朝臣清衡、最初院を造立す、本尊は釈迦・多宝並座」とあります。釈迦と多宝が並んだお堂というのは、京都では存在が確認されておりません。お堂ではなくて「多宝塔」というのが実はこの釈迦像と多宝像の並座像を安置するものでした。多宝塔の起源についてですが、法華経の見宝塔品には「釈迦が八万人の求法者たちに、教を説いていると地中から美しい七宝の塔が現れて空中に浮かび、過去仏である多宝如来が釈迦の説法を賛嘆した。(中略)釈迦は宝塔の扉を開いて、多宝仏の勧めに従って塔中の獅子座に多宝仏と並んで座った」とあります。これが先ほどの多宝堂の釈迦多宝の並座にぴったり合います。これは『法華経絵巻』に描かれた、宝塔に釈迦と多宝が並んで座っている光景を想起すればよろしかろうと思います。これが後の天台宗の多宝塔の原点になりますが、あくまでも塔であって堂ではありません。そのあたりが中尊寺の場合には異なりますが、基本は同じだったと思います。現存する多宝塔は鎌倉時代以降のものしかありません。例えば石山寺の多宝塔をみますと、『法華経絵巻』の宝塔のように饅頭のような丸い部分が残されていることが分かります(図12)。饅頭形が雨で崩れないように裳層屋根をつけていますが、おそらく原形は宝塔の形式だったろうと推測されます。

次に一基塔です。どういう塔だったのか不明ですが、2通りが考えられます。1つは、中尊寺は天台宗ですが、天台宗には「六処宝塔院」があります。これは千部法華経を安置した塔で最澄によって計画されました。もう一つは、同じ時代の真言宗で大日如来を安置する塔が造られています。これらはいずれも目的は鎮護国家、国を護るための塔という意味合いがあります。

最澄による六処宝塔院は塔の中に千部法華経を安置して、国家の安全を図るとというのが目的でした。

最澄が活着ている間には全部は実現しませんでした。「六処」というのは群馬県の安東上野宝塔院、大分県の安南豊前宝塔院、福岡県の安西筑前宝塔院、そして栃木県の安北下野宝塔院、京都の安中山城宝塔院、それから滋賀県の安国近江宝塔院。これは比叡山上の近江側に建てられました。要になったのは比叡山上の近江宝塔院です。安東、安南というように、東の鎮め、南の鎮め、西の鎮め、北の鎮め、国の真ん中の鎮めというような位置づけがあって、北の鎮めは下野、現在の栃木県までしかありません。それより北は六処宝塔院の範囲からはずれています。時代が遅れるのでやや飛躍はありますが、あるいは清衡は、最澄の構想に含まれなかった東北の鎮めとしての宝塔院を関山の地に計画したとも考えられます。それを裏付けるのは供養願文の中にある「千部法華経の安置」で、これは千部法華経を安置するという六処宝塔院に合致するわけです。この六処宝塔院の建物は、下野の塔は『法華経絵巻』に描かれた塔の形態だったかと思われませんが、後に円仁によって造立された近江宝塔院の塔（東塔、惣持院の塔）は根来寺の大塔のような形だったと推測されます。

次に2番目に考えられるのは、空海による高野山の大塔あるいは西塔と呼ばれるものです（図14）。もともとは「毘盧遮那法界体性塔」と呼ばれていました。毘盧遮那というのは大日如来です。大日如来の体、性格を表す塔であるという意味だと思います。大塔には胎蔵界の五仏、西塔には金剛界の五仏が安置されました。いずれも中尊は大日如来です。この大塔・西塔も空海の生前には完成しませんでした。空海が構想したのはこの塔によって鎮護国家を図ることです。高野山に再建された大塔は、さきほどの根来寺とほとんど同じような形態をとった、やはり饅頭形が残る形式の塔です。

次に百体積迦堂は先ほど言いましたように、前例は法成寺以外ありません。中尊寺の百体積迦堂は史上2番目の百体積迦堂だったこととなります。形態については不明ですが、法成寺の積迦堂と似た形態だったかもしれません。

次に両界堂です。これは両界曼荼羅を安置する堂です。金剛界曼荼羅と胎蔵界曼荼羅を合わせた両界曼荼羅を安置するのが両界堂と呼ばれるものです。両界曼荼羅は一般的には絵像で、密教の世界観を表現したものです。胎蔵界の曼荼羅は中台八葉院が中心で、中央に大日如来が描かれ、ほかにたくさんの仏像が描かれています。金剛界は9つに分かれ、大日如来とこれも同じようにたくさんの仏像が描かれています。大阪の観心寺の金堂には両界曼荼羅が現在もあります。平面をみると2つの壁があります。西側の壁に金剛界曼荼羅、東の壁に胎蔵界曼荼羅が描かれています。両界曼荼羅安置堂は、観心寺のように壁に曼荼羅を描く例もありますが、掛け軸形式の曼荼羅を向かい合わせの壁に掛けるという形が一般的でした。それに対して、中尊寺の両界曼荼羅が絵ではなく、皆金色の木像とあります。これは文献を調べても例がなく、特異な例です。両界曼荼羅安置堂の多くは灌頂堂と呼ばれるものでした。結縁灌頂という儀式を行うための仏堂です。結縁灌頂は俗人が密教教団に入信する際の手続きで、「投華得仏」という儀式をとまいます。目隠しをされて手に花を持ち、僧侶に導かれた信徒は、お堂の床に敷かれた曼荼羅に向かって花を投げます。その花が落ちてあつた仏が終生の念持仏になります。これが結縁灌頂の中心の儀式ですが、こうした一連の儀式を行うのが灌頂堂でしたから、お寺にとってはたいへん重要なお堂でした。中尊寺の両界堂も灌頂堂の機能を持った仏堂だったと考えられます。

次に大長寿院二階大堂です。中尊は四丈でその左右に4体ずつ、計8体の丈六の阿弥陀仏が安置されていました。4丈もあるような阿弥陀仏像は例がありません。道長の法成寺も、白河天皇の法勝寺も丈六です。ですから4丈というのはその倍以上の巨大な仏像だった。なぜこのような仏像を造られたのでしょうか。まず、大長寿院の立地に注目します。それは関山の山中でした。先ほど、道長の法成寺は自分の屋敷のすぐ隣だと言いましたが、日常的に仏様を拝むためにはそれが身近にあった方が便利でしたから、居所の近くにお堂を作るのが一般的でした。しかし、なぜか大長寿院の場合は日常の礼拝には不

便な山の中に建てられます。このことは大長寿院が清衡自身の個人往生を祈るためのものではなく、たくさんの衆生の済度、極楽往生を僧侶に祈らせるためのお堂だったと考えるのが妥当と思われます。

次に金色堂ですが、これはご存知のように一間四面堂です。かわいらしいお堂で3つの壇に清衡、基衡、秀衡のご遺体が安置されている。外観、内部ともに非常にきらびやかなお堂です。中尊寺金色堂に関していくつかの特徴を挙げると、まず1つは他に例を見ない堂内荘厳であるということ。2番目に、内部に遺体を安置するということ。3番目に六地藏が安置されていること。4番目に柱絵に「胎蔵界曼荼羅」が描かれていること。5番目に関山の山中に建立したこと。6番目が平泉館の関係で、「金色堂の正方」にその平泉館が作られたということ。これらについてお話ししたいと思います。

最初に「例を見ない堂内荘厳」について。全体に金箔を張る、あるいは螺鈿細工がふんだんに施してある、そして柱には蒔絵を施す。こうした建築は当時の京都にも例がありません。金色堂は「光堂」とも呼ばれますが、「光堂」は文献でもいくつか確認されます。ただこれは金箔を張ったという意味ではなくて、「光仏」を安置したという意味で「光堂」と呼ばれたようです。光仏というのは無量光仏、これは阿弥陀仏の別名です。ですから広く言えば阿弥陀さんを安置したものはみんな「光堂」というようなことになってしまいます。いずれにしての金色堂のように、堂全体に金箔を張ったお堂は全く確認されておりません。そして部分的に螺鈿や蒔絵を施すものはあっても、金色堂のように内部全面に施す例は全く確認されていません。まさしく「他に例を見ない」ものでした。

2番目に、阿弥陀堂内に遺体を安置するということ。こうした例は文献で確認する限り、京都の郊外の勤修寺の阿弥陀堂が唯一です。阿弥陀堂の堂内は「浄土」です。浄土は清らかな世界という意味です。それに対して死体は「穢れ」の極値でした。現代の我々には想像しにくいですが、当時の貴族たちにとって穢れの思想はたいへん強いものでした。例えば、朝廷への出仕途中に、道端に犬が死んでいたりすると、とたんに家に引き返してしまう。それは犬の死体が放つ穢れを受けた身で出仕することによって、朝廷全体が穢れてしまうことを恐れたからです。犬の死体でもかくのごとくですから、人間の死体というのは穢れの極みのようなものでした。ですからこの穢れと清浄な世界というのは相容れない、そのように認識されたのでしょう。その結果として、阿弥陀堂に遺体を安置することは行われなかったと結論づけられます。

3番目に六地藏の安置について。文献上、阿弥陀堂に六地藏を安置した例は確認できません。地藏信仰は平安時代の中期頃から盛んになりますが、これは貴族ではなく庶民の間に流布しました。お地藏さんはいったん地獄に落ちた人間を地獄から引きあげてくれると信じられていたのです。ですから、貴族たちは阿弥陀堂を造ったり、阿弥陀さんにお祈りしたりして、自分は極楽に行くと思っているわけですから、地獄に落ちるということは想定していません。ですから地藏を作る必要は感じなかったのです。そういう意味で見ると、清衡の場合には奥州の戦役などでたくさんの人を死なせているわけですから、地獄に落ちるという事も当然考えられた。ですから地獄に落ちた場合にはそのお地藏さんによってまず引き上げてもらって、そのあとで阿弥陀さんによって極楽に導いてもらうという考えがあったのではないかと思います。これは京都の中央の貴族たちにはなかった発想です。六地藏安置の背景はこのようなものだったのではないかと思います。

4番目に、柱絵に「胎蔵界曼荼羅」が描かれること。柱絵の図様についてはさまざまな議論がありますが、結論的には胎蔵界曼荼羅でよいと思います。墓所堂の先例、つまり金色堂のようにお堂の中に遺体あるいは遺骨を安置するという例は、阿弥陀堂以外ならばいくつかあります。白河天皇の皇女の郁芳門院媯子の遺骨を安置した醍醐寺円光院の本尊は両界曼荼羅でした。死者と両界曼荼羅の結びつきがここに見られますが、実は10世紀の末頃から、死者往生の祈願、あるいは追善供養の場に両界曼荼羅を使

用する例はかなり頻繁に見られます。両界曼荼羅と死者とのつながりというのはかなり強く意識されていたということがこのあたりからわかりますし、金色堂の胎蔵界曼荼羅の柱絵も、こういう死者往生との関係で描かれたものではないかと考えられます。

それから5番目に、関山の山中に立地した、ということです。先ほど言いましたように阿弥陀様に清衡個人の往生浄土を祈願するお堂であれば、山の中ではなくて、清衡の住宅のすぐそばに作るのが一番適当だったわけですがそうではなかった。関山の山中というのは日常的な祈りの場としては不適當ですから、清衡の祈りのためのお堂ではなかったと考えるのが妥当と思われる。つまり、個人往生を祈る場所ではなかったということになると、生前から、清衡が自分の遺体を安置する、墓所堂として計画をしたのが金色堂だったと考えられます。清衡の遺体はミイラの形で安置されます。「留身往生」と言いますが、弘法大師空海も亡くなった後、高野山で留身往生する、つまり生きたままで往生したという伝説が後ほど広がるわけですが、要するに生きたまま往生して、現実の世界を見守っていくという考え方、それが留身往生の思想でした。おそらく清衡の考えにもそれがあったのではないかと。つまり、死んだ後も、自分がこの世の中に留まって、平泉を見守っていく、平泉を守護していくという思いがあって、自身の遺体をミイラの形で安置させたのではないかと想像されます。のちの平泉館が「金色堂の正方」に計画されたのは、基衡や秀衡にも清衡のこうした思想が正しく伝えられていたということではないかと思われる。

中尊寺の造営理念についてまとめてみます。まず法華信仰を中心とした鎮護国家の寺だったということがあげられます。最初に造られた「多宝堂」は法華経見宝塔品に基づきます。次に百体釈迦堂。お釈迦様は法華経の中心仏ですから、これも法華経を体現する形で作られた。それから「供養願文」の新釈迦堂も丈六のお釈迦様を安置しています。そして千部法華経の書写、あるいは千口の僧侶による法華経の転読という大行事の施行にも法華経重視の姿勢が窺われます。そして鎮護国家について。「供養願文」には天皇家に対する報恩がしたためられており、その延長には「玉体安穩」があります。玉体安穩と鎮護国家の関係については、今考えると不思議ですが、当時は天皇が健やかに過ごされることが即国が安泰であるということだと受け止められていました。玉体安穩を通じて鎮護国家を祈願するという発想があったわけで、中尊寺の場合にもそういう思いがあったのではないかと考えられます。

2番目に、衆生済度の寺、死者往生の寺であったこと。平安期の浄土信仰というのは、基本的には自分自身が往生する、個人往生の祈願が中心でした。しかし清衡の浄土思想はそうではなかったらしい。例えば、白河の関から外浜まで1町ごとに阿弥陀仏を描いた笠卒塔婆を立てた。これにはどういう意味があったのか。おそらく、奥州戦役で死没した人々、あるいは奥州に住むすべての人々の霊を関山に導き、大長寿院の巨大な九体阿弥陀仏によって極楽に引摺ってもらうという意味合いがあったのではないのでしょうか。衆生済度を眼目とした造寺の理念で、清衡の個人往生というのは副次的なものであったらしい。

死者往生をさらに敷衍すれば、生きとし生けるものの極楽往生を祈願する寺。両界堂の存在がこれに関わります。両界曼荼羅安置堂での結縁灌頂によって一般大衆を仏教へ結縁させ、その後で九体阿弥陀仏によって極楽に引摺するという理念も考えられなくはない。法成寺にしても法勝寺にしても、中央の貴族や天皇が作るお寺というのは基本的には個人救済、つまり道長なり、白河天皇なりの極楽往生を祈願するものであって、一般大衆の極楽往生祈願という発想は全くありませんでした。それに対して、中尊寺の場合には、奥州に暮らす一般の人たち全てが極楽に行けるようにというような思いがこめられていたのではないかと、つまり、非常に大乘仏教的な、為政者としてのスケールの大きな構想が中尊寺にはあったのではないかというふうに考えるわけです。なお、全体として見ると、道長の法成寺に見られた

ような、法華信仰、浄土信仰、密教信仰の3本柱は全て伽藍の内部で実現されていることも疑いありません。

6. 毛越寺と無量光院

毛越寺では発掘調査によって伽藍配置が明らかになっています(図15)。大きな池があって、池の正面に円隆寺の伽藍があります。法勝寺の金堂の一郭と円隆寺は、平面上はほぼ同じ形態ですから、法勝寺をお手本にして作られたことはまず間違いありません。毛越寺の持つ中央的な要素というのは、法勝寺に類似の中心伽藍であるということ、池に面してお堂を建てる臨池式の伽藍であるということがあげられます。特異なのは金堂の本尊が薬師であるということです。法成寺も法勝寺も、金堂の中心仏は大日如来で、薬師ではありません。薬師本尊については今後の究明が必要です。それから、毛越寺の伽藍内には阿弥陀堂がありません。これも当時の中央の傾向からすればやや特異です。隣接する観自在王院には阿弥陀堂がありましたから、あるいはこれと対の関係にあったために、毛越寺にはあえて阿弥陀堂を作らなかったということも考えられます。

次に無量光院について(図16)。宇治の平等院を模したとされますが(図17)、発掘の結果、少なくとも平面形態については類似したものであったことが明らかにされています。次に伽羅御所との関係について考えてみます。白河上皇、鳥羽上皇は京都の郊外の鳥羽や白河に、阿弥陀堂を中心とした多くの寺院を建てますが、これと対になるような形で必ず御所を造りました。院の御所と呼ばれます。模式的に書いたものですが、例えば鳥羽東殿という御所と安楽寿院、白河北殿という御所と宝莊嚴院はそれぞれ対になります(図18)。御所とお寺は隣り合わせの関係でした。無量光院の場合はまだ不明確ではありますが伽羅御所と無量光院は隣り合わせの対の関係にあったことが考えられます。京都における院の御所と御堂との関係に類似のものでした。これも中央的な発想といえます。ただ無量光院の場合に特異なのは、このお堂の中に「狩猟の体」、つまり秀衡が狩猟をする絵を描かれていたことです。こうした堂内荘嚴は他に例がありません。それから土塁が存在すること。中央のお寺では周囲を築地で囲みますが、無量光院では敷地を囲むように土塁が作られている(図19)。土塁という非常に土着的な工法による区画が施されている点も特異と言いますか、地方性だろうと考えられます。

7. 建築文化からみた平泉

仏教建築からみた平泉の中央性と地方性についてまとめてみたいと思います。まず中央的な要素としては伽藍の形態があります。中尊寺の新釈迦堂、つまり供養願文の釈迦堂は翼廊を持った形式であったということがわかりますし、この形態は平等院鳳凰堂や法勝寺の金堂に類似しています。それから、中尊寺の旧釈迦堂は百体釈迦堂で、法成寺の釈迦堂を前例とします。そして毛越寺の場合には伽藍の形態が法勝寺の金堂の一郭に類似しています。無量光院も平等院鳳凰堂を模している。つまり藤原3代による寺院はいずれも、全体の基本的な形態は中央の代表的な建築をお手本にして作られたことは間違いのない。ただ安置仏から見ると、法勝寺も法成寺も金堂には大日如来を安置していましたが、平泉の寺院の中心仏堂で大日如来を安置したものが確認できないのはちょっと不思議なところでもあります。それから大長寿院の二階大堂は九体阿弥陀堂、金色堂は一間四面阿弥陀堂ですが、両者とも京都で九体阿弥陀堂や一間四面堂が流行し始めた早い時期に作られています。奥州の藤原氏は都の動向に敏感で、常に最先端の文化を導入する方向で動いていたことが、仏教建築の形式からも察知できます。

次に地方性について見てみます。平泉の建物は実は上部構造がわかっていません。現存するのは金色堂だけで、それ以外の建物に関してはどんな建物だったのか実はよくわかっていません。ただ、発掘調

査によって明らかになったものもあります。例えば円隆寺の金堂は壇正積の立派な基壇を築いていましたが、講堂および金堂の翼廊は木製基壇です。木製基壇は当時の京都では確認されていません。木製の基壇は腐りやすく、あまり具合のいいものではありません。また金堂の翼廊には掘立柱が使われていました。当時の京都の寺院は礎石の上に柱を立てるとするのが普通で、掘立柱はすでに使われなくなっていました。平泉にはそういう古い構造法が残っていたこととなります。それと、先ほど述べましたが築地ではなく土塁を用いています。土塁による結界というのも極めて地方的な要素です。それから、無量光院の場合、平等院を模したとされますが、最近の無量光院の発掘現場を見ていると、これはどこまで平等院を模したのだろうかという疑問が生じます。確かに本堂の平面形状は似ていますが、それ以外の部分を見るとあまり似ていないのではないかと、というのが実感です。例えば、平等院鳳凰堂では壇正積という石で作った基壇です。しかし無量光院では壇正積基壇は確認できていません。また平等院では基壇上に板敷の床を張りますが、無量光院の場合は床の部分にごろごろした石がぎっしり詰まっている。ですからどういう床だったのかというのは今の状態ではよくわかりません。平等院を模したというのは程度の問題で、あるいは似て非なるものであったかもしれないという印象を持っています。

最後に、柳之御所遺跡について若干ふれてみたいと思います。寺院ではありませんが、平泉文化の中央性と地方性という視点からは重要です。当時の中央の貴族住宅は寝殿造という形式で、これを模式的に描くと次のようになります。大きな池に面して南面する寝殿があり、その西と東に南北棟の対屋が置かれます。そして建物同士は廊でつながれます。東西の対屋からは中門廊が南に伸びます。屋敷の入り口は正面ではなく、西か東のどちらかになります。これが寝殿造の典型的な形態です。これに対して、発掘によって明らかになった、おそらく柳之御所遺跡の中心建築だろうという建物は2棟並びますが、これがどういう関係なのかよくわかっていません。両方とも南ではなく、西を向いて建っているように見られます。そして建物をつなぐような廊の形跡は全くなく、それぞれ独立した建築になっています。また、池がありますが、必ずしも正面にあるわけではなく、ずっとずれた場所に位置して、建物との関係が不明確です。このように柳之御所遺跡の建物配置からは寝殿造らしい要素はほとんど見られないのです。また寝殿造は、平安後期には柱はすべて礎石立てですが、柳之御所の建築はすべて掘立柱構造です。つまり都ではすでに行われなくなった古い構造が残っている。柱の筋も必ずしも直線上にきちっと乗らない、割と精度が低いという面も見られます。このように、池があるという点が寝殿造に共通する要素で、それ以外は寝殿造の影響はほとんどなかったと言っても過言ではないと思います。復原の根拠は柱穴しかないので、実際の姿はほとんど分からないのですが、あるいはかなり土着的な、もともと奥州にあった建築のスタイルで作られたのが柳之御所の建築だったのではないかとというのが私の印象です。

最後に平泉の建築文化についてまとめてみます。まず寺院建築については金色堂の建築を見れば明らかのように、おそらく中央の工匠の指導のもとに、都の建築を基本にして建設されたと考えられます。ただし都から招かれた工匠の指導のもとに、実際の建築は地方の大工の手になったと思われるから、詳細に見るとやはり非中央的な要素も垣間見られます。それに対して、御所とか住宅においては中央性は非常に薄く、平泉の地の伝統的な住居形式に則って、在地の大工が在地の工法によって建設したものであったのではないかと考えられます。以上で終了させていただきます。



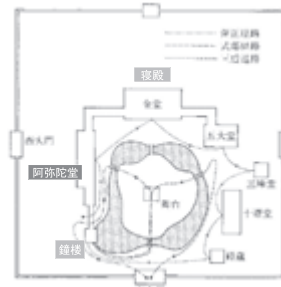
図1



法成寺 図2



図3

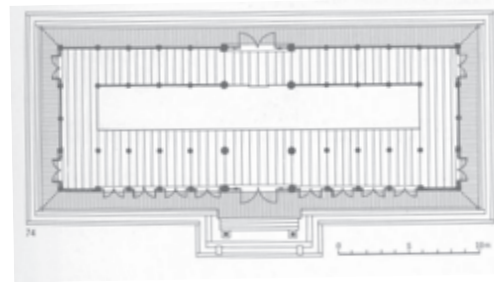


無量寿院 図4

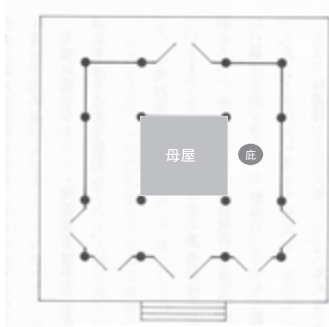


浄瑠璃寺本堂

図5



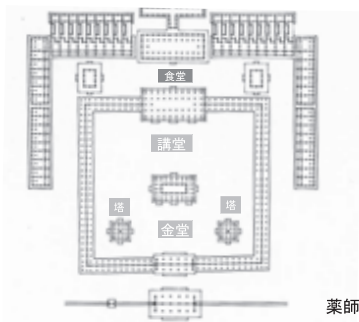
浄瑠璃寺 図6



一間四面堂の平面 図7



金色堂 図8



薬師寺伽藍 図9



法勝寺 図10



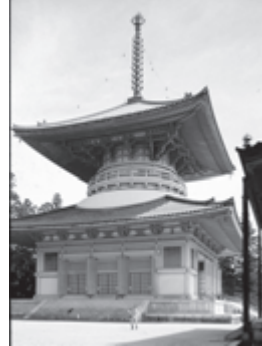
図11



石山寺多宝塔 図12



根来寺大塔 図13



高野山大塔(再建) 図14



毛越寺の伽藍

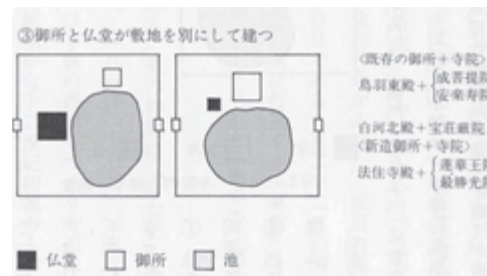
図15



図16



図17



院の御所と御堂の関係

図18



図19

平泉文化と北海道 —アイヌ文化の装身具の成立を考える—

越田 賢一郎

はじめに

2011年度から、12世紀前後の東北北部と北海道のつながりについて、ガラス玉と鉄鍋を通して考えてみた(越田2012・2013)。

11世紀ころから本州から鉄鍋をはじめとする大量の物資が北海道に流入し、土器にかわり鉄鍋が煮炊きに用いられるようになり、住居が竪穴住居から平地住居へ変化するなどの現象がみられるようになる。また、精神的な面では、本州から入った人々と異なる北海道独特の墓制が成立し、そこに副葬される鉄器、漆器などの品々が全道に広がっていく。その一つにアイヌ玉と呼ばれるガラス玉がある。

ここでは平泉文化のガラス玉について再度まとめ、北海道のアイヌ文化に特徴的なガラス玉を用いた首飾りである、タマサイとシトキの成立との関係について考えてみたい。

1 平泉中尊寺金色堂におけるガラス製品

(1) 金色堂内のガラス製品

平泉中尊寺金色堂には、多くのガラス製品が装飾として使われている。他の材質の玉類も含めて、その形態を分類し、使用方法とのかかわりについてまとめてみたい。

① 瓔珞

内陣には瓔珞に数千といわれる中小のガラス玉、連珠が飾られている。また、仏像の宝冠にも玉が使われている。色は、青、緑、黄、茶(黄褐)、白、無色などである。

② 螺鈿玉装

巻柱には円光仏の蒔絵とともに、螺鈿による七宝繫文、法相華唐草文などの装飾がある。この螺鈿の花芯部分の下地に錐のようなもので穴をあけ、玉を押しこんでいる玉装がみられる。浅い穴と深い穴があり、浅い穴には朱が認められることから無色の玉を、深い穴には青色の玉を挿入したと推測されている(中里・立田1969)。

また、西北壇の螺鈿玉装は、残存する玉は緑色のみであるが、脱落跡には朱も見られるので無色の玉が使用されていたこと、さらに、須弥壇、燈台、平塵案などの螺鈿装飾部分にも玉装が行われた可能性が指摘されている(中里・立田1969)。

③ 金工部伏せ彩色

清衡壇の格狭間には、宝相華唐草文の透かし彫りのある金具が取り付けられている。その透かし彫りの部分と木地の間に挟んだとみられる、曲面のある薄い色ガラスの断片がみつまっている。木地に彩色が施されており、花卉の形に下地の色彩と同系統の板状の薄色ガラスをはめ込んだもので、ガラスを通して下の色彩がほのかに見える、一種の伏せ彩色技法が使われていたと考えられている。(河田1986、藤島監修1986)。

(2) 棺内副葬品の玉類分類

棺内出土の玉類は、朝日新聞社編の報告書(朝日新聞社編1950)、藤島亥治郎氏監修の『平泉 中尊寺・毛越寺の全容』(藤島監修1986)等の記載を参考にして、次のように分類できる。

〔第Ⅰ類〕 中心に孔がある小玉で、単独のものとして2～5個連なった連珠がある。なお、連珠が欠けて単独になったものもある。直径5mmに満たない小型と10mmほどの玉がある。色彩は、青が多く、緑、茶（黄褐色）、黄、白、無色のものがみられる。巻きあげ技法により製作したと考えられる。

瓔珞の銅製飾金具である四花形辻金具、風鐸形板金具、四角形辻金具、透かし金具及び銅製鎖と伴うものがあり、いずれも瓔珞の飾り玉と考えられる。

〔第Ⅱ類〕 孔のない球形の玉である。径3mmほどの小さなもので、無色、白、青がある。また、水晶製の玉もみられる。これらは、螺鈿の装飾用の玉と考えられる。

〔第Ⅲ類〕 完形の板状ガラスである。緑色で2×2cmほどの直角三角形を呈し、厚さは1mmである。片面は光沢がありやや曲面をもつが、もう一面は平坦で荒れた面が残る。直角となる部分の側面も同様であり、型に流し込まれたもので、表面だけが光沢をもつと考えられる。半透明で細かい気泡を含む。1点のみである。

宝相華唐草文にみられる伏せ彩色等の用途に使われた板状ガラスと考えておきたい。

〔第Ⅳ類〕 水晶製の玉でガラス玉より大きく、念珠玉と推定する。

（3） ガラス玉の分析結果

昭和25年の調査によって、基衡棺の腹中から見つかった玉2点について分析が行われている（朝比奈他1953）。写真から、淡青色の玉は径10mm程度の丸玉（0.9g）、黄褐色の玉は径5mm程度（0.8g）の10連珠で、3連と7連に割れていると判断される。

この2点について、比重と屈折率の測定と分析が行われた。この結果、彩色については淡青色が酸化第二銅、黄褐色については酸化第二鉄と推定された。また、アルミナ（ Al_2O_3 ）が多く、石灰（ CaO ）とマグネシウム（ MgO ）が少ない、カリ（ K_2O ）がソーダ（ Na_2O ）の3～4倍に達することなどが指摘されている。比重が3.76と3.80で鉛分が多い。カリ鉛ガラスに含められよう。

基衡棺から見つかった「ガラス板」（第Ⅲ類）は、重量が0.780グラムで、比重が3.13（計算）と3.75（浮力実測）の値となった。また、一部をやすりで削って液浸法により屈折率を求めたところ、1.576であった。これらから、 PbO の含有率33.5～49%と推定された。着色剤については FeO に少量の Fe_2O_3 が混じっていると考えられた。

なお、その他のガラス玉についても比重と屈折率が測定され、中尊寺の鉛ガラスは、 PbO の含有率は30～50%と推定された。これに、「4%の温醋酸に浸して温浸液中に溶出した鉛を、アルコールを加えた硫酸による硫酸鉛の白色沈殿及びクロム酸カリによるクロム酸鉛の黄色沈殿によって確かめた」結果を総合して、鉛ガラスでないガラスも少量ながらあることが分かった。（朝比奈他1953）

1953年の分析を担当された小田幸子氏のコレクションに含まれている中尊寺金色堂のガラスについて、白瀧絢子氏と中井泉氏による分析が行われており、青色の玉がカリ鉛ガラスであることが明らかになっている（白瀧・中井2011）。

棺内副葬品の一部について、平成22・23（2010・11）年に函館工業高等専門学校中村和之氏や筆者等が走査型電子顕微鏡（SEM）と併用されているエネルギー分散型X線分析装置（EDS）による分析を行い、その結果を研究年報に報告した（中村2011、越田2012）。

この分析の結果、ガラス製品はほとんどに鉛分が多く含まれ、カリウムも多い、カリ鉛ガラスであることが明らかになった。また、鉛分の含まれないガラスが1点存在したことは、昭和25年度調査を裏付ける結果となった。なお、着色剤はCu、Feと思われ、色の薄い玉、無色の玉にはほとんど含有されていない。

(4) 中尊寺金色堂のガラス玉の類例

〔宇治平等院〕

宇治平等院本尊阿弥陀如来座像台華盤（以下平等院本尊と略す）から発見された、11世紀代後半のガラス製品の分析によって、古代の玉の様相が明らかになりつつある（井上2011、白瀧2011、中井他2012ほか）。井上暁子氏、中井泉氏等の調査成果を基に、平泉中尊寺金色堂の玉と比較してみる。

平等院本尊の玉はほとんどが鉛ガラスで、50～55%の鉛（PbO）を含むものと、70%以上の鉛を含むものとに分けられ、前者はカリ鉛ガラス、後者は鉛ケイ酸塩ガラスである。瓔珞に用いられているガラス玉は、29個のうち1例を除き、カリ鉛ガラスであった。

カリ鉛ガラスの特徴として挙げられているのは次の点である。

- ・カリ鉛ガラスは2価の銅による発色の青色系が多く、無色透明、抹茶色などがある。
- ・形態は、丸玉（直径7mm前後）と連珠で、製作技法は巻き上げによる。
- ・他に、台の上にガラスを落として柔らかいうちに穴を穿ったものが3点ある。

また、鉛ケイ酸塩ガラスの特徴として挙げられているのは次の点である。

- ・濃緑色から黄緑系（銅による発色）と金茶（鉄による着色）の色調を示す。
- ・直径10mmを超えるものと、4～5mmの小型のものがある
- ・握じり玉、丸玉、連珠があり、製作技法は巻き上げによる。丸玉にガラス棒を巻き付けて加飾したものもみられる。

鉛ケイ酸塩ガラスの玉を正倉院ガラスと比較すると、色、成分など良く類似しており、8世紀の奈良時代に国内で生産されていたものの系譜を引くと考えられる。一方、カリ鉛ガラスは、中国で8世紀に製造がはじまり、宋代に盛んに行われていたとされ、日本でも九州の博多遺跡群や大宰府の発掘調査でガラス製品が出土し、年代が抑えられる資料が出土している。この二系統の玉が平等院本尊から見ついている（白瀧他2011,p157）。

中尊寺のガラス玉のほとんどがカリ鉛ガラスである。また、1点ではあるが、鉛分を含まないガラスもあり、これを加えると二系統となる。

〔平安時代・鎌倉時代の伝世資料〕

2年前の論考では、ガラス史研究文献（由水・棚橋1977、関忠夫ほか1978、中塚1985、岡田譲1969）をもとに、伝世品と出土品を壺、舍利瓶、骨臓器など容器類の系統、瓔珞などの飾り玉、飾り金具の装飾の三つの系統に区分した（越田2012）。その後、井上暁子氏による9～13世紀の伝世品と出土遺物とともに、絵画や文学作品に記述されたガラス関係についての膨大な集成（井上2011）が行われていることを知ったので、これに従って再度中尊寺のガラス玉について考えてみたい。

この時代のガラス製品について、井上は容器類と玉（孔を持つビーズ、孔のない粒状のものを含む）及び加工片類に大別し、それぞれの用途を推定されている。

容器類には、舍利容器やその他仏器として使用されたものと、高級調度として使用されたものがあり、その多くは中国あるいはイスラム等から運ばれてきたガラスと推定されている。

玉及び加工片類は、《堂内、仏具装飾》、《神宝》、《家具調度・装束》の目的で使用された。

《堂内、仏具装飾》では、瓔珞にガラス玉が使用される例は、11世紀後半以降に集中し、中尊寺金色堂（第Ⅰ類）の他、興福寺北円堂埋納玉類、峰定寺十一面観音瓔珞が代表例としてあげられている。このほか中尊寺金色堂関連では、第Ⅱ類の螺鈿玉装、第Ⅲ類の伏彩色が例示されている。

《神宝》としては、刀剣類、弓具関連、鞍のガラス装飾があげられている。

《家具調度・装束》では、12世紀前半に編まれた『類聚雑要抄』巻四の「螺鈿料」とともに計上され

ている「入玉料」に注目し、螺鈿に入れ込むガラスの調達費ではないかと推測された。このほか、螺鈿・蒔絵を施した漆工芸品に板状ガラスを使う例が指摘されている。

井上の集成により、平安時代後期からガラス容器とともに、ガラス玉が様々な飾りとして利用されていることが明らかになってきた。平泉中尊寺のガラス製品も、これらの中に位置付けられる。

このようなガラス製品は、輸入品ばかりでなく、国内でも生産が行われていたことは、井上が指摘している博多遺跡群出土のガラスからも明らかになってきている。その中で最も多いガラス素材がカリ鉛ガラスであり、その再溶融が行われていたことは注目される。

ただ、博多のようなガラス生産がどの程度国内に広がったかはまだ分からない。由水常雄の平安時代前半の成立といわれる『竹取物語』には、「ガラス窯」と思われるものが登場するとの指摘も再考の必要があるだろう（由水1977）。

〔瓔珞製作の系譜〕

久寿元（1154）年に建立された京都峰定寺の千手観音像の瓔珞には、青や緑系統の色のほか、黄色、渋い橙色などが含まれている。中塚氏はこの仏像の願主が伝平清盛とされていることから、中国の仏像と関連があり、ガラス玉も輸入品と推測した（中塚1985）。さらに、鎌倉時代の玉佩や仏像の瓔珞として使われた伝世品を加え、三種類の瓔珞用の玉の変遷を想定している。

（ア）不透明の深青色の同系統のみを使用

- ・奈良 興福寺厨子入弥勒菩薩像瓔珞 平安末から鎌倉初
- ・奈良 法隆寺聖徳太子像厨子 鎌倉
- ・奈良 西大寺透彫舍利塔瓔珞 鎌倉中期

（イ）透明の緑色、飴色、コバルト青色、白など各色使用

- ・京都 法金剛院十一面観音座像 元応元（1319）年頃
- ・奈良 長谷寺十一面観音像 13世紀
- ・奈良 松尾寺千手観音像瓔珞 建武元（1334）年

（ウ）宋渡来の各色使用

- ・京都峰定寺千手観音像瓔珞 久寿元（1154）年

（ア）は奈良以来のガラス製法の伝統でできた平安末から鎌倉中期頃のもの、（ウ）は平安末期に宋から舶載されたもので、（イ）は舶載品の影響を受けて鎌倉後期13世紀頃から日本で製作されたものと推定している（中塚1985）。中尊寺のものは（ウ）に含まれるといえよう。今後分析データの蓄積によって、この推定の是非が明らかになると思われる。

当時の日本におけるガラス製作は、博多では一部に容器類の製作もみられたものの、瓔珞の飾りの玉、緒の先端につける露玉（伝和歌山県出土例あり：河田1974）などに集約されていた可能性が強い。

2 北海道におけるガラス玉の変遷（1）—中尊寺ガラス玉の時期まで—

（1）続縄文文化のガラス玉

続縄文文化後期の後北式土器と北大I式土器の時期の遺構からガラス玉が出土している（越田他2014a・b）。

①後北B式・後北C₁式期：カリガラス

北海道におけるガラスの出現期であり、淡青色と紺色の玉が出土している。径5mm未満で、管状のものを割りとり再加工している。弥生文化と同じカリガラスである。

②後北C₂D式期：カリガラス

淡青色と紺色が混じる。径5mm未満のものだけでなく、5mm以上のものが多くなる。管状のものを割りとり再加工したもので、古墳文化前期と同じカリガラスである。

③北大Ⅰ式期：カリガラス、ソーダ石灰ガラス（植物灰ガラス）

紺色のカリガラスに、古墳文化中期から出現する濃紺色の植物灰ガラスが加わる。この時期までのほとんどの玉が本州からもたらされたものと推定される。

(2) オホーツク文化期のガラス玉 カリガラス、ソーダ石灰ガラス（植物灰ガラス）

紺色と濃紺色のガラス玉が道北部とオホーツク海沿岸部の遺跡から出土している。カリガラスと植物灰ガラスがある。オホーツク文化は大陸との関連が強い文化であり、ガラス玉も大陸からもたらされた可能性が強い。本州からもたらされたものも含め、両方のルートが考えられる。

(3) 擦文文化期

この時期の装身具はほとんど出土していない。土製の玉類が前期にみられるが、これは本州の祭祀具が持ち込まれたものと思われる。

3 北海道におけるガラス玉の変遷（2）—中尊寺ガラス玉の時期以降—

本州の中世に相当する時期については、陶磁器の編年を基に次のように区分する（越田1997）。

第一期は12世紀後半から14世紀前半、第二期は14世紀後半から15世紀前半、第三期は15世紀後半から16世紀である。ガラス成分による区分（越田2013）をもとに、ガラス玉の出土状況について触れ、その使用方法についても考えてみたい。なお、成形痕が観察できるものでは、すべて巻きあげ技法とみなせる。

(1) 第一期（12世紀後半から14世紀前半）のガラス玉

第一期には、厚真町で平泉文化にみられる常滑焼の壺、白老町と上ノ国町で珠洲焼の四耳壺がみられるほか、13世紀代の貿易陶磁が道央部で出土している。また、湖州鏡が釧路市材木町の擦文文化の住居内から出土しているのが注目される。

この時期のガラス玉として、①②③の3遺跡があげられる。成分分析から、カリ鉛ガラスが大半で、カリ石灰ガラスが少量含まれて出土している。なお、④⑤の2遺跡を第二期に近いものとして加えておく。

①根室市穂香堅穴群11号住居跡（北海道埋蔵文化財センター2002）

擦文文化期の11号住居跡床面から、玉類59点と金具8点がまとまって出土した。ヒスイ製勾玉1点、凝灰岩製の有孔自然礫1点、ガラス玉57点が含まれる。ガラス玉は、滴玉1点の他は丸玉である。銀化の激しい青色の玉と、紺、水・白、薄い黄色、白、無色各1点である。紺色のものは続縄文文化期のガラスとみなせる(1)。

小笠原正明氏等による分析が行われており、鉛ガラスの他、水・白の玉と白の玉が鉛石灰ガラス、透明なものがカリ石灰ガラスであることが明らかになっている（北海道埋蔵文化財センター2002）。

なお、金具8点は中尊寺の讃衡蔵に展示されているセッコと呼ばれるものと同形態であり、帯や紐の金具と思われる。

②余市町大川遺跡 GP004墓（余市町教育委員会蔵）

未報告の資料である。出土したガラス玉のうち52点を観察した。滴玉2点、3連珠1点、連珠2点、丸小玉47点である。丸小玉には、連珠が割れたものも含まれる。いずれも銀化（風化）が激しい。いず

れも鉛ガラスであり、カリウムが多く含まれるものとほとんど含まれていないものに分かれ、カリ鉛ガラスと鉛ケイ酸塩ガラスと考えられるが、腐食が激しいため確実ではない。

③厚真町ニタップナイ遺跡（厚真町教育委員会2009）

ガラス玉1点が包含層から出土したのみで、性格ははっきりしない。分析では鉛ガラスと報告されている。カリ鉛ガラスと判断される。

④厚真町オニキシベ2遺跡1号土坑墓（厚真町教育委員会2011）

第1号土坑墓の上半身側からは小刀、刀子、耳飾り、鐔状銅製品、白色金属板とともに玉類と古銭が出土している。古銭は北宋銭15点、南宋銭1点である。また、下半身側からは、小刀、刀子、鉤状製品、環状装飾品2点、耳飾り、鉄斧、漆器が出土している。鐔状銅製品は、和鏡を加工して、鐔状のものに作り替えている。漆器は鎌倉などで出土しているスタンプ文漆器といわれるものである。

玉類には、瑪瑙製の5点とガラス玉がある。ガラス玉は破片が多く、報告書には76点の記載があるが、正確な点数把握はできない。白地に茶、黄、緑の線を加飾して入組み文を描いたものが26点ある。分析ではカリ鉛ガラスが多く、カリ石灰ガラスが混ざっている。

⑤伊達市オヤコツ遺跡方形配石墓2号（伊達市教育委員会1993）

方形配石墓が2基、6mほど離れて南北に並列して検出された。いずれも1辺が4～5mで、方形に石を積み上げて墓域を区画している。共に中央部に遺体があり、構築物をつくり、それに火をかけたと思定されている。

配石墓2号は熟年男性、9・10歳男子、12～15歳女性、壮年女性、14～16歳男性の合葬で、南東位とみなせる。東側からガラス玉が銀製の金具とともに出土している。ガラス玉には、青色の玉の他、地玉に緑色の線を加飾したオニキシベ2遺跡と同形態の玉もみられる。また、I・II号共に、オニキシベ2遺跡と同形態の鐔が出土している。それに、ガラス玉とともに出土した金具は、穂香堅穴群からしている出土しているセツ口と同じ形態で、帯先金具も伴っている。

ガラス玉2点は、分析によりカリ石灰ガラスの系統とされている（肥塚1993）。

(2) 第二期（14世紀後半から15世紀前半）のガラス玉

第二期には、道南部と道中部で貿易陶磁器と珠洲焼がまとまって出土するようになる。また、アイヌ文化の墓から陶磁器が出土する例がみられる。

この時期のガラス玉としては、墓に副葬された陶磁器と古銭の組み合わせから推定して、次の遺跡があげられる。なお、副葬品の古銭による年代推定では、明代の洪武通宝（1368年初鑄）を伴う⑥と永楽通宝（1408年初鑄）と宣徳通宝（1433年初鑄）を伴う⑦⑧⑨⑩の2グループに区分できる。前者はカリ鉛ガラスが、後者はカリ石灰ガラスが主体である。

なお、陶磁器が伴っていない墓については、古銭からの推定のため、第三期前半の遺構も含まれている可能性がある。

⑥余市町大川遺跡 GP608墓（余市町教育委員会 2000）

足元に副葬品がまとまっており、トンボ玉を含む大小様々なガラス玉420点、古銭27点、刀子1点、サメの歯15点、刀装具1点、紐金具2点、漆器などが含まれる。古銭は明銭の洪武通宝が最新銭となる。カリ鉛ガラスが主体となる。

加飾のあるいわゆるトンボ玉が出土しており、特殊な様相を見せる。

⑦札幌市西区発寒（河野廣道1933、高倉新一郎1933）

第一号墳墓は3体合葬で、中央の遺体には、右側に太刀、太刀片、小刀が各1点、その周辺にガラス

玉70個、銀製耳飾り1点、古銭11枚が副葬されていた。最新銭が永楽通宝で、ガラス玉、耳飾りと一連であったと思われる。最も東側の遺体では、右足先に第二期と推定される陶磁器1点と漆器椀が重ねて置かれていた。カリ石灰ガラスの組み合わせである。

⑧釧路市幣舞遺跡第43号墓（釧路市教育委員会1994）

副葬品は、ガラス玉49点、古銭54点、耳環2点、竹製管玉8点、内耳鉄鍋1点、漆器1点である。古銭は最新銭が永楽通宝である。カリ石灰ガラスの組み合わせである。

ガラス玉、古銭、竹製管玉の連ね方が分かる出土状況で、首飾りの形態が復元できる貴重な資料であり、石川朗氏と平川善祥氏によって復元図がつくられている（図1：平川2004）。

⑨根室市コタンケシ第V地点墓（根室市教育委員会1994）

1号住居跡のくぼみに掘りこまれた墓壇があり、その上に集石が認められた。住居の床面を4cmほど掘りこんでおり、ガラス玉409個、碧玉製玉、古銭、漆器椀、金属板、棒状の木製品が出土した。全体の形態は不明である。また、集石部からは内耳鉄鍋が出土している。

古銭は永楽通宝を最新銭とするもので、ガラス玉の間に2・3枚ずつ張り付いた状態で出土したものもある。カリ石灰ガラスの組み合わせである。

⑩余市町大川遺跡GP600（余市町教育委員会2000）

永楽通宝と宣徳通宝までが出土している。住居跡のくぼみを利用してつくられたアイヌ墓で、墓壇の形態は明確でない。頭骨の周囲からガラス玉252点、耳飾り2点、古銭45点、刀子1点、漆器片が出土した。今回分析は行っていない。

この5例と同時期と考えられるものとして、次のものがあげられる。

⑪恵庭市カリンバ2遺跡（恵庭市教育委員会2000）

副葬品は、第二期の白磁小皿3点、片口鉄鍋1点、ガラス小玉278点、刀装具の足金具1点、耳飾り4点、漆器椀数点、刀子1点、足元から漆器膳1点である。他に出土位置不明の鉄針2点、耳飾り周辺から細い樹皮6点、炭化した草の茎1点がある。21点分析した結果、カリ石灰ガラスとその風化したものと考えられる。

⑫ライトコロ川口遺跡 12号竪穴内墳墓（東京大学文学部1980）

12号竪穴内墳墓の南西部からまとめてガラス玉、コイル状鉄製品、鏢、短刀が出土している。ガラス玉は70個程度出土している。大型の白いガラス玉に茶色の線模様をつけられた、径18mmのもの1個を除き、すべて青色系統の玉である。今回分析したのは4点のみであるが、カリ石灰ガラスである。

（3）第三期（15世紀後半から16世紀） カリ石灰ガラスと鉛ガラス

戦国時代から安土桃山時代にあたる。西洋人の渡来、南蛮交易の展開など広域な流通がおこなわれた時代で、陶磁器も広範囲のものが流入する。道内の陶磁器出土遺跡は道南部に限定されるが、珠洲焼から越前焼への変化、瀬戸美濃焼の量の拡大がみられる。16世紀末には、志野焼、唐津焼などの製品が流



図1 幣舞遺跡首飾り復元図（平川2004）

入するようになる。

この時期の代表的な遺跡である上ノ国町上之国勝山館跡からは、16世紀から17世紀初頭の陶磁器が出土しており、郭内から30点を超すガラス玉が出土している。分析の結果、カリ鉛ガラス、カリ石灰ガラスのほか、鉛成分の少ないガラス玉など様々な玉の存在が明らかになった（中村他2005）。近世初頭の玉などと合わせ、更なる検討が必要であり、現段階では例として挙げるにとどめる。

4 北海道におけるガラス玉の出土状況と使用法

(1) 平泉文化以前のガラス玉

続縄文文化、オホーツク文化期のガラス玉は、ほとんどが墓やその周辺から出土したものである。一つが5mm程度の大きさであり、最も量が多くても40点ほどで、単独では首飾りとして使用されたとは考えにくい。

擦文文化期にはほとんど出土例がなく、住居の内部や骨集中地点から数点出ている例があるが、この時代のものであるか確実でない。根室市穂香遺跡例は中世に相当する時期の第一期としてまとめて述べる。

(2) 平泉文化以降のガラス玉

アイヌ文化の伝世品では、ガラス製や金属製の玉だけで作られた首飾りを「タマサイ」、金属製や木製の胸飾りのついたものを「シトキ」と呼んで区分している。このような首飾りには、古銭、金属製の飾り、耳環などが連ねてあるもの、赤い布が結び付けられているものもある。このような首飾りが、遺跡から出土するようになるのが、この中世に相当する時期からである。

中世第一期、第二期のガラス玉と搬出する遺物を表1にまとめた。

根室市穂香堅穴群では、確認できるだけで57個のガラス玉が出土しており、一連であれば50cmほどの長さで、首飾りとして充分使用できるだけの量となる。他の遺跡では、ガラス玉数が400にも及ぶものがあり、幾重かに巻かれていたか、伝世品にみられるように複雑な組み方がされていた可能性がある。しかし、伝世品と違い、玉の大きさが小さく、ほとんどが1cm前後のものであることに注意が必要である。

また、胸飾り（シトキ）が付けられていた可能性があるのが、オヤコツ遺跡とオニキシベ2遺跡の鐔状金属製品である。オニキシベ2遺跡のシトキは、和鏡の縁を取り去り、円盤状にして鐔の形に加工し、2孔を開けたものである。擦れの痕から、鐔として使用されていた可能性があることが注目される。同様のものは、オヤコツ遺跡でも出土しており、規格もほぼ同一であることから、本来は本州で鐔用に加工されたものが流入してきたと考えておきたい(2)。このほか、コタンケシ遺跡の金具も有機質でできたシトキの付属品として考えることができる。

耳飾りは、実際に耳飾りとして使用されていたものの他に、伝世品でも見られるように、首飾りに組み込まれていた可能性がある。穂香堅穴群やオヤコツ遺跡では、中尊寺でセツ口と呼ばれている金具類がガラス玉とともに出土しており、連に加えられていたと推測される。銭、締め金具、コイル状鉄製品なども出土状態からみて同様の用途と考えられる。首飾りの形態を最も良く残すのが幣舞遺跡第43号墓である。これから推測すると、銭も金具類も金色を呈し、様々なガラスとともに輝いていたと考えられる。

表1 中世相当期のガラス玉出土遺構の伴出品一覧

市町村	遺跡	墓No.	性別	年齢	副 葬 品								
					ガラス玉	その他玉	古銭	耳飾	漆器	鉄鍋	鉄器	その他	
根室	穂香堅穴群	住居内	—	—	57+	ヒスイ勾玉1 有孔珠1						七ッ金8	
余市	大川遺跡	GP-004	?	?	あり							コイル状鉄製品	
余市	大川遺跡	GP-608	男?	成人	420 加飾玉		27		○			刀装具1 刀子1 紐金具2	サメの歯15
厚真	オニキシベ2遺跡	1号土坑墓	?	?	76+ 加飾玉	メノウ玉5	16	2	1			鉄斧1、小刀2、刀子1、山刀1、鐔状銅製品1、環状鉄製品2、魚鉤1、針3	
伊達	有珠オヤコツ遺跡	II号方形配石墓	男3 女2	若年3 壮年 熟年	あり 加飾玉					内耳1		七ッ金、鐔2、大刀1、刀装具2、刀子5、釣針、釘	
札幌	発寒N16遺跡	第1号墳墓	?	?	70		11	1	○			大刀、小刀1、斧、骨製中柄	陶磁器1
		第2号墳墓	?	?	若干		2		○			太刀2、飾り金具1	
余市	大川遺跡	GP-600	?	?	252		45	2	○			刀子1	
恵庭	カリンバ2遺跡第VI地点	AP-5	女	?	278	メノウ玉1 碧玉玉?1		4	○	片口1		刀子1、刀装具1、針2	陶磁器3
釧路	幣舞遺跡	第43号墓	女?	壮年	49	竹製管玉8	54	2	1	内耳1		刀子1、木製品2	
根室	コタンケシ遺跡	墓址	女	成人	409	碧玉筋玉2	16		1	内耳1			
常呂	ライトコロ川口遺跡	12号堅穴内墓塚	?	?	約70 加飾玉							コイル状鉄製品 鐔1	

5 平泉中尊寺の玉と北海道の関連 —ガラス玉の流入路について—

(1) カリ鉛ガラス製の玉

先にも述べたように、平安時代後半の本州では、ガラス玉は瓔珞、飾の一部、数珠として用いられていたものであり、首飾りとしての使用は全く見られていない。この時期の玉は、奈良時代からの鉛ケイ酸塩ガラスと宋代に大量に作られたカリ鉛ガラスの系譜をひくものが共存していた。

北海道の中世第一期の大川遺跡GP004墓と穂香遺跡出土品は、カリ鉛ガラスが多く含まれており、平泉中尊寺の玉類と共通する。形態からみても、瓔珞に使用されている滴玉、連珠、丸玉の組合せを見ることができ、色彩も同じものが多い。本州の瓔珞等のガラスが再編成された可能性がある。

だが、ガラス玉は本州では首飾りとして使用されていないのに、北海道では、首飾りとして成立していくのはなぜであろうか。近年、ロシア沿海州からも金管玉はじめ多くのガラス玉類が出土しており、朝鮮半島でも首飾りが出土している。また、オニキシベ2遺跡、カリンバ2遺跡では大陸から運ばれたと考えられるメノウ製の玉が出土しており、大陸からの影響を考えておきたい。

中世第二期の大川遺跡GP608については、他に類例の求められない加飾のあるガラス玉がみられること、数点ではあるが本州では見られないカリ石灰ガラスが含まれていることから、大陸からサハリン経由から海上ルートによって、連として運ばれた可能性が強いと考えている。

(2) カリ石灰ガラス製の玉

第二期のガラス玉は、ほとんどカリ石灰ガラス主体で構成される。わずかに出土する滴玉、連珠など鉛分が多い玉は、第一期の伝世の可能性はある。

この時期に、ガラス玉が北海道の墓に首飾りとして副葬される例が増加することは、玉の供給が潤沢に行われるようになったことを示している。鎌倉時代から室町時代のガラス玉の伝世品が仏具関係だけに限られていることから、この供給源を本州に求めることは難しい。

カリ石灰ガラスは、中国の元代、明代の遺跡から出土しており（于福熹編2005）、山東省博山では生

産地遺跡が調査されている（淄博市博物館1985）。まだ流入ルートは確実ではないが、元代から明代にかけて黒龍江下流域に中国勢力が進出し、拠点を築いていく時期と一致している。いわゆる貂皮交易が隆盛となり、貂皮の見返りとしてガラス玉が黒龍江流域に流入し、それが民族間の交流で北海道へ流入したと推測しておく。

一方、シトキに付属するコイル状鉄製品は大陸に、鐔は本州にその供給先を求められるが、古銭や七ツ金は両方の可能性がある。これらの製品については、ガラス玉とともに、丹念にその流入経路を明らかにする必要がある。

（3）本州物品・大陸物品の再利用法の確立

本州や大陸の物品が北海道に流入してきた時、その本来の使用法がそのままであったわけではない。ガラス玉が瓔珞や数珠の形ではなく、首飾りに組み替えられていくこと、七ツ口が金具として首飾りに組み入れられること、鐔や鏡がシトキとなること等である。10世紀ころから北海道内で出土する銅碗についても、仏具としてではなく、素材として流通することなどが指摘できる。また、大陸からの流入品と考えられるコイル状鉄製品についても、首飾りの一部として転用された可能性が強い。

越田は道南部の中世墓を分類し、和人の墓と推定できる火葬墓と、木棺に収められた座葬墓に対し、伸展葬の形態をとる墓がアイヌ文化と関連する墓であり、16世紀ころには道南部で両者がはっきり区分できることを示した（越田2005）。また、道央部から道東部では14世紀から15世紀前半にかけて明の陶磁器を伴うアイヌ墓が出現するものの、その後陶磁器は副葬されなくなるなど、アイヌ社会に選択が働いていることを示した（越田2006）。

14世紀から15世紀にかけての北海道では、和人文化や大陸文化と関連しながらも、アイヌ文化が独自の発展を遂げていく時期と考えられる。タマサイやシトキの成立もその一つとしてとらえられる。

おわりに

平泉文化の時期以前には、北海道ではガラス製首飾りの存在は考えにくい。ところが中世相当期になると、数百単位のガラス玉がまとまって出土するようになる。それに、前述した古銭の他に、耳飾り、鐔の形に加工した銅鏡、鐔形の金具、七ツ口と呼ばれる帯金具などが玉とともに出土している。これは、アイヌ文化に残るタマサイやシトキの形態に類似しており、その成立が14・15世紀にあり、さらに13世紀代にガラス玉使用の祖形が出来上がっていたことが指摘できる。

また、鉄鍋は11世紀頃から東北地方で煮炊具として定着し、北海道でも12世紀頃から土器に変わる煮炊具となって行く。鉄製品のうち利器の多くはそのままの役割で使用されている面もある。ただ、北海道で鉄生産が行われなかったことから、リサイクルが行われず、小型の釘や小札などは鮭鉤の素材や鉄鍋の補修材として、本来の機能を離れた目的で使用されている。

玉は、アイヌ社会の精神的な面を、鉄鍋は実用品としての面を端的に示すものといえよう。この二つのものの北海道への流入が、平泉文化の成立期と密接にかかわっていたことが指摘できた。だが、重要な生産地の問題、平泉文化と北海道との交流の実態など明らかにできていない点が多い。今後さらなる追及が必要となっている。

本稿の執筆にあたり、ガラス玉の分析を承諾していただいた中尊寺、平泉町の八重樫忠郎氏、ガラス玉分析を行った函館工業高等専門学校中村和之氏、小林敦哉氏、竹内孝氏、玉を借用した各地の教育委員会の方々に厚くお礼申し上げます。また、玉の分析値の解析に当たっては、東京理科大学中井泉氏、

北海道埋蔵文化財センター田口尚氏、高橋美鈴氏のアドバイスをいただきました。また、ガラス玉の整理にあたり札幌国際大学の下斗米香織さんと鈴木栞さんの協力を得ました。皆様に厚く感謝申し上げます。

註

- (1) 厚真町教育委員会乾哲也氏の御教示による。
- (2) 鐔がシトキとして利用されている例は、伝製品にも見られる。東北部では、10世紀頃の住居内から鐔が刀剣類と伴わず、単独で出土する例がみられる。鐔が特殊な役割を果たしていた可能性がある。この問題については別に取り上げてみたい。

引用参考文献

- 朝日新聞社編 1950『中尊寺と藤原四代 中尊寺学術報告書』朝日新聞社
- 朝比奈貞一・會田軍太夫・小田幸子 1953「中尊寺ガラスの研究と古代ガラスについて」『古文化財の科学』5号、1-5
- 厚真町教育委員会 2009『ニタツナイ遺跡』(1)
- 厚真町教育委員会 2011『オニキシベ2遺跡』
- 井上暁子 2011「平安時代のガラス関連資料と博多出土ガラス」『GLASS』55 28-54 日本工芸学会
- 于福熹編 2005『中国古代玻璃技術的發展』上海科学技術出版社
- 小笠原正明他 2004「5 北海道の擦文時代後期の穂香堅穴群から出土したガラス製玉の非破壊的分析と産地分析」『根室市穂香堅穴群(3)』北埋調報198 北海道埋蔵文化財センター
- 岡田譲 1969『ガラス』日本の美術37
- 恵庭市教育委員会 2000『カリンバ2遺跡第Ⅵ地点』
- 春日大社 1987『春日大社古神宝宝物図録』
- 加藤晃一・干谷洋平・斎藤健・小笠原正明 2006「擦文遺跡から出土したガラス玉の分析」『考古学と自然科学』53号 23-35
- 河田 貞 1974「藤原時代のガラス(瑠璃)」『日本美術工芸』429号 口絵・44-51
- 釧路市教育委員会 1994『釧路市幣舞遺跡調査報告書』
- 肥塚隆保 1993「有珠オヤコツ遺跡出土のガラス小玉の材質調査」『伊達市有珠オヤコツ遺跡・ボンマ遺跡』伊達市教育委員会
- 越田賢一郎 2004「鉄鍋再考」『アイヌ文化の成立』457-492
- 越田賢一郎 2012「12世紀前後における奥州藤原氏と北海道の関係について」『平泉文化研究年報』第12号 岩手県教育委員会 53-63
- 越田賢一郎 2013「平泉文化の鍋と玉-北海道とのつながり-」『平泉文化研究年報』第13号 岩手県教育委員会 33-45
- 越田賢一郎他 2014「北海道浦幌町の十勝太若月遺跡から出土したガラス玉の成分分析」『函館工業高等専門学校紀要』第48号
- 小林幸雄 2000「北海道中世のガラス玉の材質的検討」『「北の文化交流史研究事業」研究報告』北海道開拓記念館
- 淄博市博物館 1985「淄博元末明初玻璃作坊遺址」『考古』1985-6 530-539、図版参
- 白瀧絢子・中井泉 2011「小田コレクションの分析による日本の古代ガラスの考古化学的研究」『国立科学博物館研究報告』34、61-71
- 関忠夫ほか 1978『玉・ガラス』日本の工芸9 淡交社
- 関根達人 2007「平泉文化と北方交易1-北奥出土のガラス玉」『平泉文化研究年報』第7号 1-13
- 関根達人 2008「北のガラス玉の道」『考古学ジャーナル』579、12-15
- 伊達市教育委員会 1993『有珠オヤコツ遺跡・ボンマ遺跡』
- 東京大学文学部 1980『ライトコロ川口遺跡』
- 中里寿克・立田三郎 1969「金色堂内装飾の工芸技法について」『仏教藝術』72号

- 中塚美智子 1985『日本における吹きガラスの起源』びいどろ史料庫
- 中村和之他 2005『蝦夷錦・青玉の科学分析』平成16年度財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構研究助成報告書
- 中村和之 2011「中尊寺に残されたガラス玉の非破壊的分析と考察」『平泉文化研究年報』第11号 岩手県教育委員会
67-78
- 根室市教育委員会 1994『根室市コタンケシ遺跡発掘調査報告書』
- 平川善祥 2004「アイヌ墳墓出土の古銭について」『アイヌ文化の成立』宇田川洋先生華甲記念論文集刊行実行委員会編
445
- 北海道埋蔵文化財センター 2002『根室市穂香竪穴群』
- 村田 大 2002「第VI章3 H-11出土の玉類について」『根室市穂香竪穴群』北埋調報170北海道埋蔵文化財センター
- 毛利 登 1950「副葬品について」『中尊寺と藤原四代 中尊寺学術報告書』朝日新聞社 157-174
- 由水常雄 1977「竹取物語のガラスの窯」『火の贈りもの』せりか書房 東京
- 由水常雄・棚橋淳二 1977『東洋のガラス 中国・朝鮮・日本』三彩社
- 余市町教育委員会 2000『大川遺跡における考古学的調査Ⅱ』

「平泉」思想と藤原清衡

伊藤 博 幸

はじめに

平泉地名の謂われは？なぜ当地を平泉というのか？その地名は最初からあったのかどうか？江戸時代よりこの地名の意味や命名の契機についてはさまざまに言われてきた。一般には『吾妻鏡』文治3年(1187)10月29日条の「今日、秀衡入道、陸奥国平泉館に於いて卒去」が平泉の歴史的初見とされ、さらに同書文治5年(1189)9月23日条の「清衡、(中略)去ぬる康保年中、江刺郡豊田館を岩井郡平泉に移して宿館となす」という記事から、その地名は清衡当初からあったとするのが通説的理解である。ただし、地名としての平泉は初めて衣川を訪れた西行の家集『山家集』の「衣河」を読んだ詞書中⁽¹⁾に見られるので、12世紀中頃にはその存在が確認できるが、やはり清衡当初から平泉といわれていたという確証はない。いうまでもなく、江刺郡から岩井郡平泉に宿館を移したという記事は、12世紀末葉頃の知識を清衡代に投影したに過ぎず、後付けの要素が強い。

小論では、はじめに「平泉」地名の研究史を紹介し、次いで本来の意味を中国の事例から取り上げ、その由来について考える。最後に、当地に平泉が命名された時期について考えてみたい。これらを検討する過程で、「平泉」思想なる概念を提唱できれば幸いである。

1. 「平泉」由来研究小史

当地における「平泉」の語源—地名の意味、命名の契機—については、江戸時代以来、「泉酒(酒之泉とも)」由来譚、平地に泉が湧き出るところからの命名、また慈覚大師が骨寺村平泉野にあった寺を中尊寺に移したという平泉野本源譚などが伝わっている⁽²⁾。

このような伝承地名譚に対して、近年、平泉地名を歴史的に考える研究者が現われてきた。

1987年、『寝殿造の研究』を著わした太田静六氏はその論文中で、「ついでながら、藤原氏三代が栄えた平泉という地名については、今まで誰もふれておられないが、これは盛唐時代の東都・洛陽の郊外にある別荘地で、唐の宰相李徳裕がここに別荘を営み、『平泉山居戒子孫記』を残したので知られる唐の平泉に因んだものと私考される⁽³⁾」と、はじめて平泉地名問題を李徳裕の別荘地との関わりで取り上げた。『平泉山居戒子孫記』は、李徳裕が唐の開成5年(840)に子孫のために書き残した、洛陽南郊に建てた平泉山荘の由来記である⁽⁴⁾。

次いで、同様の問題を指摘したのは高橋富雄氏である。氏は1993年の『図説奥州藤原氏と平泉』において「わたくしは最近、清衡以前、岩井郡に平泉の地名がなかったばかりか、その移転とともにこの地名が命名されて、その宿館を平泉館と呼んだのでもない」と確信するようになっている。そして移転当初の清衡館は岩井営のように呼ばれたと推定し(上略)、その岩井営が平泉館と呼ばれるようになった時期・理由であるが、これは清衡晩年近く(中略)、中尊寺を中心とする黄金文化が、岩井府(岩井郡にできた政治・行政・経済上の拠点平泉館=筆者註)を花の都のように飾り、柳営また花の御所(下略)のように讃えての名であろう。(その平泉館の由来も)同じように、著名な唐宰相李徳裕(787-849)の豪奢を極めた別荘「平泉荘」に倣ったものであろう。平泉荘から平泉館へ。まことに自然な移行である。平泉館ははじめのうち、ヘイセンのタチというような呼称もあつたりして、だんだんにヒライズミのタチというふうになっていった⁽⁵⁾」と考えた。清衡以前、当地に平泉地名はなく、平泉館と呼ばれる時期も清衡晩年であり、その由来も李徳裕の平泉荘に倣ったものとする。またその読みもヘイセンと音読み

だったとする。平泉を当初はヘイセンという音読みであったとするのは卓見である。

ところで高橋氏は、この後著わした『平泉の世紀』（1999年）の中の「平泉のおこり」においても、清衡以前には「平泉」はなかった、清衡以後も「平泉」の名で呼ばれる地名はしばらくなかったとしながら、一転してこの名は、清衡とともに歴史的に新しい時代をおこす「理念表徴」としての造語である。まず「平泉」はヒライズミでなく漢音ヘイセンと呼ばれた。ヘイセンは平安京の平安に擬した「たいらのみやこ」にあやかっの「たいらいずみ」である。安らかなる「平夷」としての「平安」。「平泉」も「平戦」として、長い戦いを平夷におさめとる平安の泉、そういう願いが込められていたとして、李徳裕別荘由来説を取り下げてしまった⁽⁶⁾。そして清衡の「平泉理想」が明確な形をとるのが、「中尊寺落慶供養願文」であり、それは聖都構想であったという。

平泉において、どのような風水思想のもとに都市づくりが行なわれているか、そこにおける苑池の配置はどういう原理に基づくのかなど、平泉を地政学的に研究している前川佳代氏は平泉の語源について、その名前は、平泉の苑池的性格から名付けられたと考えている。それは『平泉旧蹟志』に載せる起源譚を受け、「平らな泉の湧き出る場所」であり、これは中国唐の宰相李徳裕の別荘「平泉荘」の語源も同じであるとする。平泉荘は、12世紀にはすでに痕跡を残すのみとなっていたようだが、白居易などの多くの文人が「平泉荘」について詩を残しており、詩文から平泉藤原氏がその存在を知るところとなった可能性は十分にあるとする⁽⁷⁾。中国文学界では、李徳裕と平泉荘の関係、あるいは白居易と平泉荘の関係は周知の事実であったが、前川氏ははじめて平泉山荘問題を白居易との関わりで、わが国平泉研究に歴史的に話題提供した研究者といえよう。

このような経緯を踏まえながら、平泉地名問題を中国側の文献を用いて初めて明らかにしたのが、2013年発表の藪敏裕氏の「平泉起源考」である⁽⁸⁾。初の専論といってもいい。藪氏ははじめに先学が取り上げた李徳裕の詩文を詳細に検討し、平泉山荘の名称は、山下の平坦な土壌から泉が湧き出ること（平壤出泉……山下出泉『靈泉賦 并序』）に由来すること、それは平泉と呼ばれた溪谷の総称であり、ここには歴代の多くの宰相経験者の別業があったこと（東隣のもと丞相崔公より、谷口のもと丞相司徒李公に至るまで、凡そ別墅五、六あり。皆これを平泉と謂う。その泉の源はここに発する。『靈泉賦 并序』）、平泉山荘が『穆天子伝』所載の崑崙山の山頂にあるとされる平泉と同名であることを嘉していること（「洛中士君子多以平泉見呼愧獲方外之名因此詩為報奉寄劉賓客」と題する詩序）、また別荘の涌泉は、所有者にその吉凶を教えてくれる神泉であるとされていること（其れ、靈泉の蘊なり。予れ往歳に戻を獲て放逐せられ、再び謗傷を罹るに、泉必ず色を変え、久しくして後に復す。『靈泉賦 并序』）、などを指摘した。次いで、白居易と平泉山荘の関係について分析を加え、洛陽城内に住む白居易は、別業を平泉に求めたいと希望しており、その平泉でたびたび酔遊した白居易は平泉に強い愛着をもっていること、ただし李徳裕のように平泉を理想郷と考えていたようではないこと、最後に『政事要略』「白居易伝」を引き、白居易は単なる文人としてだけでなく、文殊菩薩の生まれ変わりとして（浄土世界へ導く偉大な菩薩であると信じられて）わが国に将来されたことを指摘した。白居易像についてわが国で大きな影響を与えたのが『白氏文集』である。「中尊寺落慶供養願文」も白居易の影響が見られるという。李徳裕の詩文により洛陽南郊の平泉山荘は、白居易によって詩に詠われ、文殊菩薩の言葉として東アジアに広まり、一部で仏教的な別業の名称として受容され、清衡も永年の平和を願うための別業の名称としてこの地に平泉と命名しようとしたとする。

伊藤は藪説を受け、さらに中国梁村溝平泉寺の現地踏査を踏まえながら、中国での平泉は元来、伝説上の聖山崑崙山にある理想郷であった。それが次第に山中の楽園観に転じ、あるいは隠遁空間に転じて、隠れ家的別荘となった。白居易に関する詩文や観念ともどもこれらの総体がわが国の「平泉」概念と

いえるとし、元来の平泉は別荘（別業）なので清衡の宿館も当初は別荘と理解すべきだろうとした⁽⁹⁾。語源の「平らな泉」にはもともと波風が立たない、つまり戦乱のない世という意味付けがあり⁽¹⁰⁾、清衡の平泉命名にはこのような理由があったと考えた。また平泉と命名される以前の当地方は、広域「衣川」であり⁽¹¹⁾、平泉命名の時期は、清衡晩年の中尊寺が整備される段階と考え、中尊寺落慶供養願文と地名の命名が一体性をもつ可能性を指摘した。

2. 古代中国における平泉観

中国において最古の平泉事例は、『詩経』小雅・黍苗篇と西周の穆王（前900年代）の事跡を記録した『穆天子伝』巻一・二である⁽¹²⁾。

前者は、李徳裕が『靈泉賦』本文で一部「原隰すでに平ぎ、泉流すでに清し」を引用して、平泉の根拠を別に儒教經典の『詩経』に求める事例とされる⁽¹³⁾。ここでは後者の2巻をみていく。

『穆天子伝』巻一：河宗また之を号す。帝曰く、「穆満、女（なんじ）に春山の瑤（たから）を示し、女に昆侖の□舎四・平泉七十を詔（つ）ぐ、乃ち崑崙之丘に至り、以て春山の瑤を觀る。晦に語を賜う」と。天子命を受け、南に向かいて再拝す。

河宗（黄河の神河伯の意）が周の穆王満に、春山の瑤を見せ、崑崙山の□舎四・平泉七十を示したというが、崑崙山の中に春山の瑤があり、そこには平泉があったことを示唆する。

『穆天子伝』巻二：春山、是れ唯天下の高山なり。（中略）（天子）曰く「春山の澤、水清く泉出る。温和無風、飛鳥百獸の飲食する所、先王の所謂縣圃（けんぽ）するところ」と。

縣圃とは、神話上の山で、崑崙山の頂上で仙人が住むといわれる所である。巻一・二より崑崙山の頂上の春山は穏やかな清水が湧くところであり仙人が住み、それを平泉という、ということがわかる。

次に唐代の資料を見てみる。

『法苑珠林』巻十三：隋の天台釈智顛、三道寶階を感見す、の序。

顛、乃ち居を卜して勝地とす。是れ光所住の北、佛壘山の南、螺溪の源。處すでに閑敞にして、真を尋ね得易く、地平かにして泉清し。

本書は唐の仏僧釈道世の撰によるものである。智顛は隋の煬帝の支持で、天台山佛壘山の南麓に天台宗国清寺（図1）を創建した。この地は、それ以前は道教の聖地で、「地平泉清」と呼ばれていた。すなわち天台山以前のこの地は平泉である。

ところで『法苑珠林』は実は「宋版一切経」の一部として中尊寺に伝わっている。図録によれば巻43、巻76、巻81などがある⁽¹⁴⁾。奥州藤原氏は宋版一切経を入手し、それを繙きながら天台山と平泉名称との関係を承知していた蓋然性が高いといえよう。

まとめ—平泉と清衡

研究史を概観したように、平泉地名の歴史的研究はそれほど古いことではない。その動向は主に1900年代と、2000年代に二分できるが、ことに後者では、平泉と白居易の関係が主題となってきた。さて、わが国平泉地名のルーツは中国盛唐の李徳裕（787-849）の別業、平泉山荘に行き着く。これは、すべての研究者に共通する認識である。今回は詳しく触れることができなかったが、それを媒介したのが平安初期に将来された白居易（772-846）の『白氏文集』であることも後者の研究成果から明らかとなったといえよう⁽¹⁵⁾。また、そのはじめは、ハイセンという音読みであり、訓読みヒライズミは後出的であることも推定できる。さらに平泉と命名されるまでは、当地方は衣川の一地域であったことも認めてよいであろう。

中国での平泉伝承は古く周代にまで遡り、伝説上の聖山崑崙山の頂上にあつて、仙人が住む理想郷であった。後にさまざまに展開する平泉思想の原型はまさにここにあるといえよう。また平泉に関わりながら、改めてわが国における天台宗と天台山の智顛との関係を検討する必要がある。この地に入唐僧たちが詣でていたことは確かなのだから。「平泉」知識がいくつかのルートを持って、時代ごとに将来されていることを推定できる。

奥州藤原氏における平泉の命名の時期は、おそらく「中尊寺落慶供養願文」草案作成時期とそれほど差異はないと推定できる。「願文」は平安後期を代表する漢文学者藤原敦光の草案とされるが、「願文」が白居易の詩句を引用していることは、藪氏の指摘の通りである。すなわち敦光は、「平泉」の由来も漢籍から熟知していたことは十分に考えられる。あるいは、清衡は自らが宿館を構えた当地の命名を敦光に打診した可能性もあろう。筆者が、中尊寺落慶供養願文と地名の命名が一体性をもつ可能性を考えるのは以上の理由による。

平泉命名を打診された敦光は、清衡にその由来についてどのように説明したのであろうか。苑池、清水、林泉、竹林等々を備えた大規模な邸宅であること、そのルーツは崑崙山の理想郷であったこと、都とは離れた別荘地であること、あるいは楽園的隠遁生活の場であること等々、まさに「中尊寺落慶供養願文」の趣旨と一体となった「平泉」がそこに現出したのである。

究極の問題である清衡は、広域衣川の南半地区になぜ別業を構えたのか、つまり「平泉」をそこに構えた理由である。それを解くカギは、平泉のロケーションにあると考えている。これについてさらに研究を深めていきたい。

今回は、李徳裕との関わりが強く指摘されている中国梁村溝平泉寺（図2）およびその遺跡（図3）について、いっさい触れることができなかつた。次回に期したい。また、李徳裕の平泉荘をはじめ平泉を述べるに際して、欠くことのできない庭園（図4）や苑池の問題についても同様である。

参考文献

- (1) 後藤重郎校注 1982『山家集』新潮日本古典集成 新潮社 pp.320-321.によれば、詠まれた時期について文治2年(1186)10月12日説もあるが、現在は出家直後の陸奥行脚の折りと考える説が有力とされる。ここでは後者に従う。
- (2) 江戸時代の地誌等を利用した平泉地名に関する最近の研究には、千葉信胤 1992「平泉の地名」『奥州藤原氏と柳之御所跡』吉川弘文館 pp.93-105.同 2007「平泉余話—その民俗を知る手がかりとして」『アジア遊学—東アジアの平泉』第102号 pp.22-33.がある。
また、白山平泉寺との関わりや「平清水」地名との関わりなど、別の観点から平泉地名問題を紹介しているのが、佐々木邦世 1999『平泉中尊寺—金色堂と経の世界』吉川弘文館 pp.173-210.である。
- (3) 太田静六 1987「平等院鳳凰堂の源流」『寝殿造の研究』吉川弘文館、所収。ここでは新装版(2010) pp.264-281.を使用した。
- (4) 二宮美那子 2004「李徳裕と平泉荘」『中国文學報』第67冊 pp.1-39.他に、李徳裕と平泉荘の関係に触れたものに、川合康三 2013『桃源郷—中国の楽園思想』講談社 pp.115-153.がある。
- (5) 高橋富雄 1993「総論 藤原四代—平泉衣裳哲学」『図説奥州藤原氏と平泉』河出書房新社 pp.44-51.
- (6) 高橋富雄 1999『平泉の世紀—古代と中世の間』日本放送出版協会 pp.30-45.
- (7) 前川佳代 2001「平泉の苑池—都市平泉の多元性—」『平泉文化研究年報』第1号 pp.59-70.
- (8) 藪 敏裕 2013「平泉起源考」『平泉文化の国際性と地域性』汲古書院 pp.5-20
- (9) 伊藤博幸 2013「『平泉』地名の由来」『いわて文化財』第255号 p6.
- (10) 仏教的な観点から同様な指摘に、佐々木邦世 1999がある。ここでは「(池の鏡のような水面は) 仏教的に解釈すれば、泡立たない、平らかな寂浄の境地の表徴」と受け止められるという。 pp.185-186.
- (11) 千葉信胤 2007もこの時代「衣川と平泉は同義であった」とする。 p25.

- (12) 中国側の文献については、劉 海宇 2014「中国古代の文献史料に見える洛陽の平泉」『岩手大学平泉文化研究センター年報』第2集（近刊）に負うところが大きい。記して謝意を表す。
- (13) 藪 敏裕 2013 pp.7-10.
- (14) 中尊寺編 2010『中尊寺』pp.86-87.また、佐々木邦世 1999はこれについても触れている。 pp.189-210.
- (15) わが国における『白氏文集』の渡来の歴史は、もっとも著名な記録として天台留学僧慧萼の筆写した唐の会昌4年（844和暦承和11年）のものがあるという。これ以後、『白氏文集』が平安王朝文学に大きな影響を与えたことは周知のところである。静永 健 2010『漢籍伝来—白楽天の詩歌と日本』勉誠出版 pp.113-119.参照。



図1 天台山国清寺



図2 中国梁村溝平泉寺



図3 中国梁村溝平泉寺遺跡の遺物出土状況



図4 蘇州耦園の平泉掛軸

平泉の食文化

前川佳代

はじめに

人の身体は食べた物によって作られる。12世紀の平泉で生きた人々や奥州藤原氏が何を食べていたのかを知ることは、その人を知ることにつながり、ひいては彼らが生み出した平泉文化をひもとく手がかりとなるだろう。

現代の平泉の食文化を、餅文化、団子文化、八斗文化とまとめられたのは、石川渡氏である（石川2003）。氏は神事を中心にした餅文化、仏事を中心にした団子文化、日常を中心とした八斗文化とし、日常の生活や行事の中にこれら食文化を位置づけられた。「八斗（はっと）」は、現在も家庭料理として、旅館やお休み処では平泉の名物として味わうことができる。挽いた小麦粉を水やぬるま湯でこね、二時間以上寝かせて薄くのぼし、鍋に入れて煮込んだ料理である。岩手県では、「ひつつみ」や「すいとん」もよく似た製法をとる。同じ様な煮込み料理は、山梨県の「ほうとう」だろう。時代を遡って古代にも「はっと」と同じ材料・製法で作られた「餠飩（ハクタク）」という料理があった。「餠飩（ハクタク）」は平泉が栄えた時期に貴族たちの間で食べられていたことが史料から確認できるため、都の文化に敏感だった奥州藤原氏が平泉の食に取り入れた可能性は想定される。

本稿では、12世紀の平泉で何が食べられていたのか、発掘調査に伴う自然科学分析からみえる食べ物を取り上げ、それらの料理を貴族の宴会料理から推察する。またそれ以外の食品、とくに唐菓子などの粉食品を取り上げ、「はっと」に似た古代食・餠飩（ハクタク）の製法や食べ方と製法道具についてみて、平泉の食文化について考えを巡らせた。

1. 平泉で食べられていたもの—自然科学分析からみえる食べ物

平泉で食べられていた食材を、トイレ遺構の自然科学分析結果から抽出してみたい。

①寄生虫卵分析（表1）

回虫卵、鞭虫卵、肝吸虫卵、異形吸虫卵、ウエステルマン肺吸虫、宮崎肺吸虫、槍型吸虫卵、横川吸虫、日本海裂頭条虫、広節裂頭条虫卵、カピラリアなどの寄生虫卵が検出されている。

回虫卵・鞭虫卵は、体内より排泄物と共に排出された卵が施肥などによって野菜に付着し、それを食べることによって体内に侵入して成虫になるといわれる。肝吸虫卵はコイ・フナなどコイ科の淡水魚に、ウエステルマン肺吸虫はモクズガニ・イノシシ等、宮崎肺吸虫はサワガニ・イノシシ等、槍型吸虫卵はアリ類、横川吸虫はアユやシラウオ、日本海裂頭条虫（サナダムシ）・広節裂頭条虫卵はサケ・マス類、カピラリアは鶏の小腸に寄生する。

分析結果では、野菜は生食か不完全調理によって食べられていたこと、魚肉鳥はコイやフナ、アユ、サケ・マス類、サワガニ、モクズガニ、イノシシ、鶏の摂食が想定され、生食か不完全調理で食していたとされる。寄生虫の種類が最も多く検出されているのは、柳之御所遺跡である。サケ・マスの摂取は、柳之御所以外にも花立Ⅰ遺跡から泉屋遺跡まで中心区の市街地に広がる。コイ・フナの淡水魚は多少でも志羅山遺跡・泉屋遺跡にみられる。

②種実分析

検出された種実は以下のものである。

ナス、ゴマ、エゴマ、ウリ（雑草メロン、マクワ・シロウリ、モモルディカ）、シソ科、オニグルミ、

表 1 寄生虫卵分析結果

遺跡名	遺構名	回虫卵	鞭虫卵	肝吸虫卵	異形吸虫卵	ウェルスマン肺吸虫卵	宮崎肺吸虫卵	槍形吸虫卵	横川吸虫	日本海裂頭糸虫卵	広節裂頭糸虫卵	カビラリア(毛頭虫類)	不明虫卵	報告書番号
柳之御所遺跡 41次	SK7 9層	○	○	○	○				○	○		○	○	①
	SK7 10層	○	○	○					○	○		○	○	
	SD2 Ⅲ層	○	○	○	○									
	SD2 Ⅳ層	○	○	○					○					
柳之御所遺跡 第56次	SK26 8層	○	○								○	○		②
	SK27 10~11層	○	○								○			
	SK27 13~15層	○	○								○			
	SK28 13層	○	○								○		○	
	SK29 7層	○	○								○			
	SK33 8層	○	○								○			
	SK53 13層	○	○								○			
	SK67 8層	○	○								○			
	SK67 9層	○	○								○			
	SK67 11層	○	○								○			
柳之御所遺跡 第70次	SK22 4層	○	○					○		○			○	③
	SK22 5層	○	○					○		○			○	
	SK24 4層	○	○					○		○			○	
	56SK52 1層	○	○											
花立I遺跡 第9次	SE3 4層下	○	○											
	SK2	○	○											④
志羅山遺跡 第47次	19区1号土坑 最下層黒土	○	○											⑤
	19区1号土坑 第8層オリーブ灰色土	○	○											
	19区2号土坑 第6層灰色土	○	○							○				
	65区SK2 3層	○	○											⑤
志羅山遺跡 第67次	68区SK3 3層	○	○											
	SE2 6層	○	○											⑥
泉屋遺跡第15次	SK28 底面	○	○											
	SK30 3層	○	○											
	SK31 4層	○	○											
	SK45 5層	○	○											
	SK45 5層	○	○											
泉屋遺跡第16次	SK6 2層	○	○											⑦
	SK9 2層	○	○											
	SK18 2層	○	○											
	SK21 2層	○	○											
	SK38 2層	○	○											
泉屋遺跡第28次	SK38 2層	○	○											
	5号土坑 10層	○	○											⑧
	18号土坑 12層	○	○											

①柳岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1995『柳之御所跡 一 岡遊水地事業・平泉バイパス建設関連遺跡21・23・28・31・36・41次発掘調査報告』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告第228集 ②岩手県教育委員会生涯学習文化課2003『柳之御所遺跡—第56次発掘調査報告—』岩手県文化財調査報告第133集 平泉遺跡群発掘調査報告書 ③柳岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1999『花立I遺跡 (第9次・12次・13次)・衣岡遺跡 (第5次) 発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告第285集 ④柳岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2001『志羅山遺跡発掘調査報告書 (第47・56・67・73・80次調査)』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告第352集 ⑤柳岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1997『泉屋遺跡第10・11・13・15次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告第247集 ⑥柳岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2003『泉屋遺跡第16・19・21次発掘調査報告書』(第1分冊) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告第399集 ⑦柳岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告第284集 ⑧柳岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告第102次・祇園II遺跡第11次・中尊寺跡第81・82次・三日町II遺跡第5・6次』岩手県平泉町文化財調査報告書第120集

イチゴ（キイチゴ・オランダイチゴ）、アケビ、ブドウ（ヤマブドウ、ノブドウ）、クワ（クワ、ヤマクワ）、マタタビ、グミ（アキグミ）、ガマズミ、サルナシ、カキノキ、ウメ、クリ、モモ、マツブサ、アカザーヒユ科、イネ、イネ科、オオムギ

特に、キイチゴ、ウリ、ナスの種実が多い。図1は鳥獣人物戯画に描かれたウリである。スイカのような縦縞のあるウリは、モモルディカと分類される種が大きい種類で、現在は八丈島など離島で栽培され、果肉に水分が少なくモワモワして喉をつまらせることがあるため、「ババゴロシ」という異名がついている。ウリはほかに雑草メロン、マクワ・シロウリの種が検出されている。出土するウリの種は、古代にはモモルディカの割合が大きい、中世になるにつれ、マクワやシロウリの割合が高くなるという（藤下1984）、平泉でもその傾向がみられる。



図1 瓜を持つ兎（鳥獣人物戯画より）

③花粉分析

花粉分析によって検出された草木で食用可能なものをあげる。

イネ、イネ科、ヒエ、ソバ、アブラナ科、マメ科、ヨモギ、ネギ、セリ科、アカザーヒユ科、ペニバナ、シソ科

特に、イネ、イネ科、アブラナ科、ヨモギ、アカザーヒユ科が多い。

アカザーヒユ科は種も花粉も検出されている。平安時代の医学書『大同類聚方』によるとヒユ属の果実花序は腹痛などの薬として処方されていたとみえることから、寄生虫分析の結果と重ねて、寄生虫を体内にもつ人々が服薬していたと考えられている（金原1994）。

2. 平泉で食べられていた料理—貴族の宴会料理を参考に

①平泉で検出された食材と宴会料理

平泉で検出された食材を使って『類聚雑要抄』にみえる饗宴料理を作ったのが下の表2である。『類聚雑要抄』は久安二年（1146）頃の成立と考えられており、永久三年（1115）～保延六年（1140）までの年中行事や饗宴の様子が記されているので、料理書が残らなかった時代の食を考えるうえで貴重な史料となる。ここでは小泉和子氏が抽出された料理（小泉2011）を参考にして、平泉で検出された食材を使った料理を考えてみた（表2）。

表2 平泉の食材で考えられる饗宴料理

菓 子	木菓子：ナシ・サルナシ（獼猴桃）・カキ（申柿・枝柿）・クリ（搔栗・平栗・甘栗）
	唐菓子：
	その他：イネ・イネ科（餅・椿餅）
	交菓子：
干 物	サケ・マス、コイの楚割
生 物	サケ・マス、コイ・フナの膾（鱒膾、鯉膾）、イノシシ（猪炙）、シロウリ（白瓜・黒瓜・糟漬瓜・味噌漬瓜）、ナス（醬漬茄子）、アブラナ科（蕪・蘿蔔〈大根〉）、シソ科（白根〈シソ科の多年草〉）
貝 物	
窪 坏 物	マス（鱒）、ナス（茄子子〈茄子の種？〉）、ウリ（瓜子〈瓜の種？〉）、エゴマ（荏裏〈荏胡麻の葉で野菜を包んだもの〉）
四 種 物	（塩・醬・酢・酒）
酒 肴	
追 物	コイ（鯉味噌）、フナ（鮓の包焼〈鮓の腹に結び昆布・申柿・芥子・焼栗などを詰めて焼くか、味噌で煮たもの〉）・零餘子焼（鯉の皮付き切身を串に刺し塩魚をかけて焼いたもの）、アブラナ科（茎立〈油菜や蕪菜の浸しもの〉）
汁 物	コイ（寒汁〈松茸・鯉〉、汁膾〈汁の実の魚を別の器に盛って供する熱汁〉）
飯	イネ・イネ科・ウリ（飯・水飯・湯津ケ〈若布・干瓜を加える〉）、搗粉粥
餅	イネ・イネ科（鏡餅）
酒	イネ・イネ科+麴

料理の種類は、菓子、干物、生物、貝物、窪坏物、四種物、酒肴、追物、汁物、飯、餅、酒と分類される。以下、小泉氏の解説を引用させていただきながら、これらの分類と平泉で食された食材の料理について述べたい。

菓子には木菓子和唐菓子があつた。木菓子は果物のことで、表2では平泉で検出された果物の中で『類聚雑要抄』にみえる果物をあげた。他に平泉で検出されるキイチゴ・クワ・マツブサ・グミも木菓子として出されていた可能性はある。唐菓子は中国から伝わった粉食品の総称で、小麦粉をこねてさまざまな形にして油で揚げたり焼いたりしたものである。その他に餅や椿餅があり、イネやイネ科の検出はそれらの存在を示唆する。椿餅は、餅米の粉に丁子の粉を加え、甘葛（あまづら）の汁をかけて固めて椿の葉二枚で包んだもので、今の桜餅のような和菓子に近い。交菓子は色々な果物を取り合わせて盛ることをいい、お酒を勧めるときには用いられたらしい。

干物（からもの）は、楚割（すわやり）や干鳥・干蛸・干蛸など魚肉を乾燥したものをいった。精進料理では海藻や野菜の乾燥食品を使うこともあつた。楚割は魚肉を細長くさいて干したもので、削って食用としていた。干物は削って食べられることが多いようで、削り物とも呼ばれたらしい。平泉では、サケ・マス、コイの楚割が想定される。現代のおつまみである。

生物は、鯛・鱒・鯉・雉など魚鳥の刺身を膾といい、鮓鮓や煮塩鮓のように加工品を用いることもあつた。精進料理では野菜や海草、漬物があてられたという。寄生虫卵分析で、魚や鳥などの生食か不完全調理が示唆されていたが、おそらくはサケ・マス、コイ・フナの膾（鱒膾、鯉膾）で調理されたものを食した結果と想定される。刺身は薄く切って重ねて高く盛って出された。ほかにシロウリは白瓜・黒瓜・糟漬瓜・味噌漬瓜と出てくるし、ナスは醬漬茄子、アブラナ科は蕪・蘿蔔（大根）の名前がみえる。シソ科が検出されているが、饗宴料理では白根というシソ科の多年草が食されていた。

窪坏物（くぼつきもの）は、窪坏に入れて供するという意味で、塩辛類が主だが、和え物や漬物もあつた。塩辛には海月（くらげ）・老海鼠（ほや）・鯛醬・鮓兒（子うるか）・蟹蟻・蟬（こむし）・モムキコミ（雉の内臓の塩辛）・生鮑があつた。

平泉では、マス（鱒）、ナス、ウリ、エゴマが相当しそうだ。『類聚雑要抄』の御菌固の供御には「茄子」「瓜子」と出てきて茄子の種、瓜の種を食していたものと推測されている。トイレ遺構の決め手ともなりやすい瓜やナスの種は、このように種自体を食べていたことが想定された。ナスの種を採取するには熟させる必要があり、完熟ナスは現在我々が食べている食べごろのものより不味いことから、古代人は不味いナスを食べていたと分析結果ではいわれていた。しかし種を食べていたなら、種を採る用のナスは完熟させ、ナスの漬物などは我々が食べるナスと同じ美味しいナスを食べていたといえる。エゴマも検出されているが、荏裏という荏胡麻の葉で野菜を包んだ料理があつた。今の紫蘇巻に似たものを想定できる。

追物（おうもの）は宴会のコース料理に補う追加で出される料理である。主催者側の心づくしが表れ、珍味などが出されるようだ。コイを鯉味噌に、フナを鮓の包焼（鮓の腹に結び昆布・串柿・芥子・焼栗などを詰めて焼くか、味噌で煮たもの）に、また零餘子焼といって鯉の皮付き切身を串に刺し塩酒をかけて焼いたものが想定できる。花粉分析ではアブラナ科の検出が多く、莖立という料理が想定される。莖立（くくたち）という言葉は万葉集にも出てきており、蕪などアブラナ科は古代から日本人が食べていた食材であることがわかった。

汁物は、汁料理の総称で、熱い熱汁と冷たく冷やした寒汁があつた。魚や貝、きのこなどの実が入つた。羹も熱汁と同じと考えられている。汁の実を別の器にもって供するのは、汁膾と呼ばれた。平泉では、コイを寒汁（松茸・鯉）や、汁膾にしたと想定できる。

飯には普通のごはんと水をかける水飯、湯をかける湯づけがあった。搗粉粥は米の粉を煮て粥にしたものようである。

餅は御菌固に供され、杠葉（ゆずりは）に大根と押鮎と三成の橘を載せて餅の上に飾っていた。

酒は酒である。米と麴でできる。

平泉では検出されていないが、『類聚雑要抄』にみえるものをみていく。貝物と四種物、酒肴に該当する食材の検出はない。

貝物（かいつもの）は、平泉では未検出である。貝鮑・栄螺子（さざえ）・白貝（おう）・石陰子（かせ）などの生の貝類で、干物に置鮑や蒸鮑があるため、貝類の生か塩物を指したのかもしれない。

四種物は調味料で、塩・醬・酢・酒である。塩以外は平泉で作れるように思う。

酒肴は五種（鮑・干鳥・蛸・小鳥・海月）と二種（生鮑・擁劔）があり、食材を補えば作れる。二種の擁劔はワタリガニで、北上川のモクスガニで代用できるようにも思う。

菓子には他に松の実、柏の実、干棗、石榴、小柑子、橘、菱、甘葛、野老（ところ：いものこ）などがある。石榴は、柳之御所遺跡第30次調査SE6から石榴の絵が刻まれた板片が出土しており、平泉にもあった可能性はある（図2）。甘葛は、冬季のツタから採れる甘味料であり、平泉周辺にもツタは自生するので、作ることは可能である（前川2011）。これに薄くスライスした薯蕷（山の芋）を入れて煮込んだものが薯蕷粥である。甘葛は石鍋や銅製鍋を使って煮詰めるのが良いらしい（石橋1988）。石鍋も出土している。

生物の肉は雉、鹿、鳥足などで、山野で獲れる。魚は鯛や鱸が宴会料理の定番で、貝物とともに、沿岸や石巻から北上川の水運で運ばれてきた可能性はある。窪坏物の老海鼠は、ホヤで、三陸のホヤが想像できよう。

貴族の宴会や酒の席に必ず出されていた菓子が唐菓子である。古代の菓子は果物を指す言葉であったが、菓子には木菓子と唐菓子と呼ばれる加工菓子が存在した。

②唐菓子について

先述したように唐菓子は古代中国唐から日本に伝わった、小麦粉をこねて形を整え、揚げたり焼いたりした加工菓子である。初見は『延喜式』であるが、源順編の『倭名類聚抄』には、八種唐菓子と出てくる。これらの中の一部は、神饌として奈良県の春日大社など古い格式のある神社には今も残っており、作り方が知られる。

私は、以前「唐菓子」を「平安時代初期に八種に固定された、粉と油を使用した造形菓子で、舶来品というニュアンスを含む」と定義したことがある（前川ほか2010）。粘土細工と同じ要領で、さまざまな形に造られたようである

これら唐菓子を含む粉食品も材料の米や麦は存在するため、平泉で作ることは可能で、宴会には必ず出されており、また寺院の供物の菓子ともなっていたので、平泉で食べられていた可能性はある。このような粉食品の一つが、「はっと」に似た「餠飴（ハクタク）」である。

3. 古代食「餠飴（ハクタク）」

①「餠飴（ハクタク）」について（表3）

「餠飴（ハクタク）」は『倭名類聚抄』によると「小麦粉をねってのぼして方形に切ったもの」とある。時代が下って中世の料理書『厨事類記』には、「バウタウ」がみられ、



図2 石榴が刻まれた板片（平泉町1994）

表3 餽託（ハクタク）記事一覧
 (「餽託」の字と異なる漢字を使用する史料もあるが、すべて「餽託」に統一した。下表は管見のみ、順次追加予定)

年号	西暦	日付	場	場面	場所	本文	引用	史料名
寛弘四年	1007	2月30日	道長、春日詣		馬場殿	…早朝就馬場殿。餽託如常、賜祿。		御堂園白記（藤原道長日記） 【大日本古記録】
康平5年	1062	1月13日	春日詣定		春日社、馬場殿 黒木屋	北垣前作餽託庇（四頭）。 …次餽託妓女八人、打餽託（寺侍等取之、參進御下、僧傳取供之）。曲終賜祿（重重各一領。諸大夫取之、各便有纏頭事）。		康平記（平知家日記）【群書類従】 卷450
永保元年	1081	12月5日	春日行幸（白河天皇）		春日社、御所	…次打餽託、唱酬醉樂、進餽託。次諸大夫取餽託姫祿、…餽託女參御前、…前々餽託女賜祿…		【水左記】（源俊房日記）【史料大成】
寛治六年	1092	正月19日	興福寺北円堂供養		權別当濟尊妻室房	…庭前作餽託女屋打餽託奉之、各給祿。		【中右記】（藤原宗忠日記）【大日本古記録】
承徳元年	1097	3月29日	春日行幸（堀河天皇）		長者殿御休所、黒木屋	…又仰髪上餽託女等裝束。…餽託女各打之、有樂。…次餽託進之。…居加饗饗後給祿於餽託。…餽託女廿人參後前南屋。…次餽託打、樂、且給祿。…		【殿曆】（藤原忠実日記）【大日本古記録】
天永二年	1111	2月12日	春日行幸（鳥羽天皇）		春日社、宿所、黒木屋	…先有孟酌事、二献之後居汁物立箸、三献了…此此間且供餽託、諸大夫等傳取居之…然而餽託女列立庭上打之（有樂）。左右近官人等取祿給之。		
久安六年	1150	10月17日	春日詣定様			一、祿…餽託女単重一領		
仁平元年	1151	6月26日	春日詣定			一、祿…餽託女単重一領		
		8月11日	春日詣		春日社・黒木屋	…妓女十二人打餽託（先伶人奏酬醉樂（用左樂器）、妓女隨樂打之、其屋六間、每間二人、列居之。須予置拍子於長押。未知其由。光時取大拍子、侍御下打之）…出自樂屋、渡餽託屋前、入自鹿苑寺大門、差菓子之後、捧餽託（用折敷高坏、餽託一本、其汁口小豆、盛河三進、又盛汁瓶子、副之）。出同大門（自此妓女不打、伶人止樂）、…次給祿妓女（各白単重一領…）		
		8月11日				…自餽託屋北方可経敷…		
		11月13日	春日使還立			…於餽託岡、餽託、賜祿…		
		11月15日				…餽託岡、餽託料（絹六疋）。		【台記別記】（藤原頼長日記） 【史料大成】
仁平三年	1153	11月27日	春日詣・競馬		春日社・黒木屋	…伶人奏酬醉樂（用左樂器）、妓女十二人、隨樂打餽託（其屋六間、二人居之、光時須取拍子、居其屋南御打之、今日不然如何、次第所載、舞人陪從着座之後、打餽託、而今日、上馬運引、殆移時刻、仍予命別当僧正、上馬之大令打餽託、并命羞酒食於公卿以下）。…次第所載、菓子之後差薯蕷粥。薯蕷粥之後餽託、而依恐遲緩三献後即借餽託。寺家職掌人入自鹿苑寺大門（須出自樂屋、渡餽託屋前、入大門也。而今日、職掌人予出大門外餽託屋前。僧徒群立、無其路之故也）。捧餽託自大門出（此後伶人、不可奏音樂、妓女不可打餽託、而猶奏打仍命伶偷止之）…入自同間蓋主人已下參議已上（無陪膳、主人已下、所可依次直供之、是先例也。餽託不差殿上人已下座）…殿上人役送同汁（菓子薯蕷粥、不待居了食之、餽託雖畢供、菓子薯蕷粥居了後供了也。是路遠故也）。餽託供了之間…追着餽託。…經寺門就餽託舍、賜妓女了。（馬場殿の説明）…鹿苑寺大門東掖、構十間片廂、西六ヶ間（打腰長押、卷簾）、為餽託女候所…		
保元三年	1158	2月29日	春日行幸（後白河天皇）		黒木御所	…賜餽託女祿。次三献同前。次居汁、御著下。次供餽託。諸大夫給實子出迎南階上、傳取供之…次餽託女參上着南庇…次右府以下被着庭中廂（北上東面）、殿上五位居物。此間打餽託。次賜祿。…		【兵範記】（平信範日記）【史料大成】

ヨキ暑預ヲヲロシテ、コメノコニアハセテ、ヨクヨクレム木ニテヲシヒラメテ、粉ヲスコシカケテ、カタナニテ長二寸アマリニキリテ、サクハイノヤウニホソクキリテ、ユヲワカシ、ユデテトリアゲアズキノスリシルニテマイラス

とレシピが書かれてある。「バウタウ」は薯蕷をおろして米粉にあわせるとあり、米粉は小麦粉のようにグルテンがないため、暑預をおろして入れたと考えられる。このように原材料が小麦粉から米粉に変化していることは看過できない事実で、唐菓子の中で『倭名類聚抄』に小麦粉を使うとあったものも、『厨事類記』では米粉を使用すると書かれており、現在に残る神饌のレシピも米粉を使用する。小麦粉から米粉使用へと変わる理由は、収穫量や社会的変化などの要素が考えられ非常に興味深く、後考を期したいと思う。

この「餠飴（ハクタク）」は、平安時代後期の日記類には撰関家藤原氏の春日詣や春日行幸の際に、春日社の馬場殿にあった黒木御所（屋）での宴会の場面で登場する（表3）。庭中に握舎をもうけて、8～20人くらいの妓女が楽にあわせて踊りながら「餠飴（ハクタク）」を打ち、それをいただくという趣向をこらしたものだ。藤原道長の日記『御堂関白記』寛弘四年（1007）二月三十日条には「餠飴常のごとし」とあり、恒例であったことがわかる。詳細は、藤原頼長の『台記別記』仁平元年（1151）八月十一日条にみえ、妓女12人が餠飴を打ち、「妓女は楽に従い、これを打つ。その屋六間、間ごとに二人、これを列居す」とみえ、餠飴屋は6間あり、一間に2人いたこと、出来上がった「餠飴（ハクタク）」は、「折敷高坏を用い、餠飴一本、その汁□小豆、両三迸盛り、また汁瓶子に盛りこれをそえる」と、「餠飴（ハクタク）」が折敷高坏に盛られて小豆汁が添えられて出されていたことがわかる。『厨事類記』の「バウタウ」も小豆の摺汁に入れて食べるとあった「小豆ぱっと」のようなものだろうか。妓女があわせた楽は、『水左記』『台記別記』に酣酔楽とみえる。

②折敷高坏について

「餠飴（ハクタク）」が盛られた折敷高坏は、高坏に折敷を載せた器である（野場1987）。高坏には土高坏が用いられたといい、羽柴直人氏は、柳之御所遺跡から出土する土製の大型の高坏をそれにあてている（羽柴2001）。小泉和子氏は、土高坏をひっくり返して折敷をのせたものといい、胡粉や雲母で美しく塗り、松鶴の絵などが描かれていた（小泉2011）。

柳之御所遺跡第56次調査で堀跡から出土した釘痕がある折敷は、木製の高坏をつけたと推測されているが、これが折敷高坏に該当しよう（県埋文2003）。

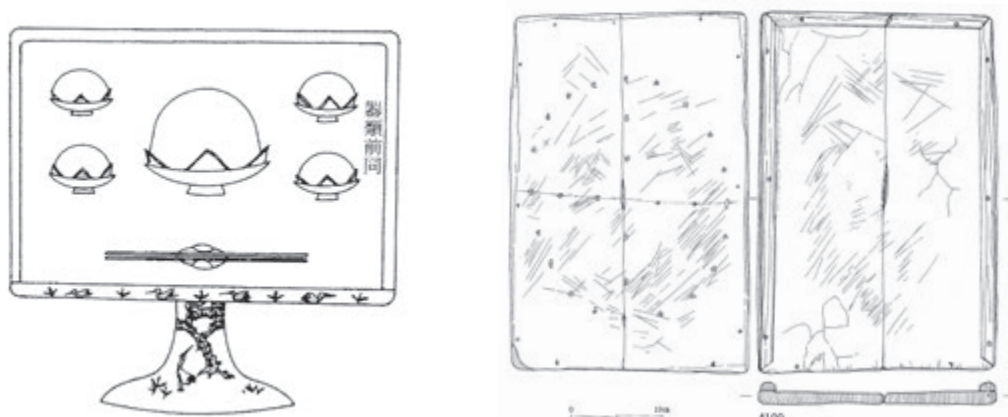


図3 『類聚雑要抄指図』折敷高坏（左：小泉2011より）と柳之御所遺跡出土の釘痕がある折敷（右：県埋文2003）

③臼について

小麦粉を使用するには、精麦し、さらに粉にしなければならない。精麦や製粉には臼が使用されていたと思われる。

この時代には、搗き臼と足踏み臼の唐臼（カラス）もあった。これらとは別に摺臼の存在が知られる。「枕草子」九十五段にみえる「くるべきもの」がそれに該当するとされる。摺臼は上下二段に分かれ、二対の縄がつけられ、向かい合って座った二人が交互に縄を引いて上臼を動かすものである。この縄引き臼は、藤原秀衡発願の紺紙金字一切経「大般若経」巻第63の見返し絵にみえている。餓鬼が縄引き臼に人を逆さまにして突っ込み、二体の餓鬼が挽き臼の縄を引いている図様がみられる。この身体動作の描写が摺臼を使用するときと酷似しており、身近にモデルがあった可能性が指摘されていることから（河野2008）、12世紀平泉に摺臼の存在が示唆される。

摺臼はもみ殻を取り除くときに使用する。搗き臼は精米、精麦に使う。中世には石臼で粉を挽く（製粉）が、12世紀平泉の時代では何を使用したのだろうか。

古代にあった碾礮は水力を動力としたと考えられている臼である（関根1969）が、米と麵（小麦粉）を作る臼であったようだ。碾礮は、職員令義解の註によると、「水碓なり。米を作るを碾といい、麵を作るを礮という」とある。集解釈は「水碓なり。米を作るを碾といい、音女箭反、石を以て碓と為し、木を以て杵と為す。麵を作るを礮といい、音五対反、臼杵並びに石を以て作るなり」とある。麵は臼杵ともに石を用いたとあり、粉にするものにより、木と石の使い分けがあったことがわかる。水力を利用するというと水車が思い浮かぶが、現在北上市のふるさと民俗村で野外展示されている、水力を利用した踏み臼（唐臼）もある。関根真隆氏は奈良の年配者の話として、近年まで米の粉や小麦粉はカラスで搗いていたことを紹介している（関根1969）。平泉では、近年まで精麦や製粉には水車を利用していたようだが、カラスでも地粉（じこな）が作れるとなると、12世紀平泉でも、カラスの利用が考えられる。

米や麦を粉にすると、殻とわけるための篩や箕も必要となろう。そして粉をこねる段階では、捏ね鉢の使用が考えられる。「餗鉢（ハクタク）」は、「打つ」という表現がされており、大量に作る場合は、臼と杵で搗いた可能性もある。

おわりに

平泉の食文化を考えるために、まずは発掘調査に伴う自然科学分析の成果から食材を抽出し、何がどのように食べられていたかを、京都の貴族の宴会料理と重ねてみた。分析結果を貴族が食べていたものにつきあわせると、自然科学分析だけではわからなかった食べ方が想定できた。

疑問点も残る。サケ・マスが縄文時代から北海道や東北地方で多く食べられていたことは知られているが、もともと当地方の人たちは生で食べていたのだろうか。サケやマスというと塩漬や燻製が思い浮かび、厳寒期が長いこの地方では保存食が発達していたはずである。トイレ遺構の寄生虫卵分析の結果（表1）をみると、サケ・マスや淡水魚の寄生虫卵が検出される遺構と検出されない遺構がある。そのため摂食制限があったのではないかとという想定をされている。私は、生食する人としらない人があったのではないかと考えた。貴族の宴会料理には生食で出てくるため、宴会にでる人とでない人といった区別もできるように思う。これらの遺構が平泉の都市内にどのように分布するかなども合わせて今後の課題としたい。また野菜を生か不完全調理で食べていたという分析結果についても、戦前の日本人の野菜の食べ方を考えたとき、疑問が残る。野菜をサラダで食べることは戦後になってからである。必ず火を通していたにも関わらず寄生虫に感染していたのだから、感染ルートは他にも考えられよう。

「八斗（はっと）」の呼び名と文字は平泉町旧小島村が発祥地という（石川2003）。「はっと」という料理は栃木県と福島県の境（八溝山）から岩手県まで広がる。古代食「餠飩（ハクタク）」が「ハウタウ」と読まれ中世の「バウタウ」となり「ほうとう」となったと山梨県では説明される（山梨県立博物館1998）。音の変化を探るのは国語学の領域であり、その正否はわからないが、『厨事類記』の「バウタウ」は米粉で作られているため、小麦粉を使う「ほうとう」をその系譜に位置づけて良いのか疑問は残る。呼称でなく形態からは「ほうとう」も「はっと」も「餠飩（ハクタク）」の系譜にある。青森県の「かけ」や、大分県の「やせうま」という菓子も同じで、日本全国に似たような食べ物があり、同じ材料と同じ製法を用いているということは、日本で昔から同じような食べ物があった証拠ではなかろうか。

「餠飩（ハクタク）」という難しい漢字の羅列から中国伝来の食品であることは想像されることである。実際、高啓安氏の『敦煌の飲食文化』によると、「餠飩」は敦煌でも食べられていたことがわかる（高2013）。敦煌の「餠飩」は、現在中国西部でよく食べられている揪麵（面）片（ジュメンヘン）と似た食べ物だったようで、小麦粉を柔らかくこねて薄くのばし、2～3センチに切ったものをちぎりながら鍋に入れて煮たものというから、「八斗（はっと）」と同じ食べ物である。「餠飩（ハクタク）」も唐菓子も、もともとは中国から奈良へ入ってきた食文化である。シルクロードを経由した食の文化伝播も想定できるのではなかろうか。

「八斗」の食べ方に、「ふかし八斗」があるという（石川2003）。にぎり酒やどぶろくを作るときに発酵する「もろみ」を粉に混ぜてこね、蒸し器で蒸すと食パンのような食感だそうだ。平安時代の法典である『延喜式』巻40造酒司の項には唐菓子に「糞（あえる）」甘醴料があがっている。これは唐菓子に甘酒をかけて食べる、あるいは甘味料としたともとれるが、「八斗」にどぶろくのもろみを入れて酵母の代わりとしたように、麵（小麦粉）を材料とする唐菓子に甘酒をあえて発酵させ、それを揚げるとドーナツのような食感になるのではなかろうか。奈良時代、あるいはそれ以前からあった揚げた菓子とは違う、これぞ「唐の菓子」と宮中のグルメ人に思わせた食感ではなかったかと。古の人々の知恵と日々の経験の語り伝えは、千年を越えて、重要な証言となりうるのではないか。

2014年1月26日、平泉町公民館において、平泉ユネスコ協会文化財愛護少年団の子どもたち6名とユネスコの関係者、保護者の方の協力を得て、唐菓子作りを行った。文化財愛護少年団は、平泉町内の小学校4～6年生を対象とし、清掃活動や平泉町内の史跡についての勉強・巡検や発掘体験を行っている。活動の中には、餅つきや水木団子（餅花）作りなど昔の食生活や小正月行事の体験活動を行う回があり、今年は昔のお菓子作りがテーマということで、古代の菓子作りと古代のドーナツを実証するために開催された。当日は、米粉を捏ねて湯がいて搗いて形を整えて揚げたものと、小麦粉に火入れしていない甘酒を入れて捏ねて発酵させて形を整え揚げたものを作った。後者は発酵時間が短かったため、十分に膨らみはしなかったが、明らかに米粉で作った唐菓子とは風味も食感も異なるものが出来た。米粉の唐菓子は餅を揚げたようなもので、普段から餅を食べなれている子どもたちには好評であったが、小麦粉甘酒入りのものは大人から高得点をいただいた。次は発酵時間を長くして試してみようということになり、今後も古代の菓子作りは継続して行っていくことになったことを報告しておく（文末「唐菓子づくり」レポート参照）。

平泉の出土品をみると、20世紀前半までに使用されていた道具類とかがたがかわらない遺物が出土している。使用した道具や雑器がほぼ同じということは、同じような生活様式で、同じようなものが食されていたと想像することは許されるのではないだろうか。添加物だらけの現代食でなく、古代の食や平泉の伝統料理は、元気な日本人を作ったのである。

「和食」が世界遺産となった今、世界遺産の平泉で、「和食」の原形ともいえる平安時代の食生活を復

元することに意味がないわけはなかろう。とりわけ平泉の伝統食である「はっと」は古代食「罇飴（ハクタク）」の面影を残し、さらにシルクロードとつながるという点で、世界遺産平泉の食文化として国内外に誇れる伝統料理だといえるだろう。

参考文献

- 石川 渡 2003『八斗』ひらいずみ型農業実践協議会
- 石橋 顕 1988『幻の甘味料 甘葛煎研究 報告その1』小倉薬草研究会あますら調査部会
- 大田区立郷土博物館 1997『トイレの考古学』東京美術
- 河野通明 2008「身体技法の違いにもとづく古代日本列島の民族分布の復原—東北地方の木摺臼調査からの古代日本列島の民族分布復原への見通し—」『身体技法・感性・民具の資料化と体系化』（神奈川大学21世紀COE プログラム研究推進会議）
- 小泉和子 2011「『類聚雑要抄』と『類聚雑要抄指図巻』にみる平安貴族の宴会用飲食・供膳具」家具道具室内史学会『家具道具室内史』第3号
- 高啓安著 高田時雄監訳 山本孝子訳 2013『敦煌の飲食文化』東方書店
- 鈴木晋一 1998「『類聚雑要抄』の食べ物」川本重雄・小泉和子編『類聚雑要抄指図巻』中央公論美術出版
- 関根真隆 1969『奈良朝食生活の研究』吉川弘文館
- 野場嘉子 1987「『兵範記』にみる食器」名古屋市博物館『名古屋市博物館研究紀要』11巻
- 羽柴直人 2001「平泉遺跡群のロクロかわらけについて」『岩手考古学』第13号
- 藤下典之 1984「出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法」『古文化財の自然科学的研究』同朋舎出版
- 前川佳代・大杉綾花・竹端絢子・深澤智子・水科典子・山辺規子 2010「奈良と菓子」『奈良女子大学文学部 研究教育年報』第7号
- 前川佳代編著 2011『古代の甘味料“甘葛煎”の復元—菓子の文化史—』奈良女子大学大学院人間文化研究科
- 山梨県立博物館 2008『甲州食べもの紀行』

報告書

- 金原正明・金原正子・中村亮仁 1995「柳之御所跡の寄生虫卵・花粉・種実の同定分析」(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『柳之御所跡 一閑遊水地事業・平泉バイパス建設関連第21・23・28・31・36・41次発掘調査報告』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告第228集
- (株)古環境研究所 2003「柳之御所遺跡におけるトイレ遺構分析」岩手県教育委員会生涯学習文化課『柳之御所遺跡—第56次発掘調査概報—』岩手県文化財調査報告書第117集 平泉遺跡群発掘調査報告書
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2011「自然科学分析」岩手県教育委員会生涯学習文化課『柳之御所遺跡—第70次発掘調査概報—』岩手県文化財調査報告書第133集 平泉遺跡群発掘調査報告書

- (株)古環境研究所 1999「花立Ⅰ遺跡における寄生虫卵・食物残渣分析」(助)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『花立Ⅰ遺跡(第9次・12次・第13次)・衣関遺跡(第5次)発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告第285集
- (株)古環境研究所 2001「志羅山遺跡47次調査におけるトイレ遺構分析」
- (株)パレオ・ラボ 2001「トイレ遺構土壌(寄生虫・花粉・種子)分析報告書」(助)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『志羅山遺跡発掘調査報告書(第47・56・67・73・80次調査)』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告第352集
- (株)古環境研究所「泉屋遺跡第15次調査におけるトイレ遺構分析」1997(助)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『泉屋遺跡第10・11・13・15次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告第247集
- (株)古環境研究所 2003「泉屋遺跡16次調査におけるトイレ遺構分析」
- 辻誠一郎・辻圭子 2003「平泉町泉屋遺跡から産出した植物遺体群」(助)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『泉屋遺跡第16・19・21次発掘調査報告書』(第1分冊)(第2分冊)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告第399集
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2013「泉屋遺跡の自然科学分析」平泉町教育委員会『平泉遺跡群発掘調査報告書 泉屋遺跡第28次・志羅山遺跡第102次・祇園Ⅱ遺跡第11次・中尊寺跡第81・82次・三日町Ⅱ遺跡第5・6次』岩手県平泉町文化財調査報告書第120集
- 平泉町教育委員会 1994『柳之御所跡発掘調査報告書』岩手県平泉町文化財調査報告書第38集

後記

後日、奈良女子大学文学部に留学中の中国の方に揪麵片について聞いたところ、中国西部地域では普通に家庭で食べている汁であるとのことであった。また、「はっと」の製法と写真を見ていただいたら、全く同じ食べ物であるという返事であった。

今後、広く東アジア世界に目を向けて平泉の食文化を研究する必要性を感じた。

レポート：唐菓子作り

2014年1月26日11時～

於：平泉町公民館

参加：平泉ユネスコ協会文化財愛護少年団

ユネスコ関係者、保護者

唐菓子作りの様子を報告する。

①捏ねる

米粉にぬるま湯を少しずつかけて捏ね、耳たぶくらいの堅さにして小分けに丸める。



②湯がいて搗く

小分けにした団子をゆがき、浮き上がったならザルに取り上げ、水気を切り、鉢に移して棒でつく。

③成形する

搗いた餅を好きな形に成形する。春日大社のブトに挑戦する団員も……。団長は、奈良にちなんで大仏の頭を作りました。



④揚げる

成形したものを油で揚げる。危ないので、大人

の人に揚げてもらいました。

⑤食べる

唐菓子には味がないので、きなこ、甘酒、ごま塩を用意して、つけて食べました。



⑥番外編

『延喜式』に唐菓子に「齧る」甘酒料があがっているのので、小麦粉に火入れしていない甘酒を混ぜて約1時間あたためて発酵させ、成形して揚げました。ドーナツになるでしょうか？

発酵時間が短かったものの、外はカリッと、中はややふっくらで、甘酒の風味がある香ばしい唐菓子が出来上がりました（写真の濃い色のもの）。

⑦感想

- ・味がついたらお菓子になる。
- ・米粉より小麦粉+甘酒のほうが香ばしい。
- ・また食べたい。

子どもたちには米粉の唐菓子のほうが好評でした。普段からお餅を食べなれているからか、奈良の子どもたちよりたくさん米粉の唐菓子を食べてくれました。

大人の方からは、小さい子どもが遊ぶ小麦粉粘土の延長で、遊びながら食べることができ、孫との遊びに取り入れられそうだという声も聞かれました。

今度は大人を対象にしてみる、旅館やお菓子屋さんと作ってみるなどを話し、新しい平泉の名物を開発できたらと夢が膨らみました。ご協力いただきました方々に御礼申し上げます。

平泉仏教の歴史的 성격に関する文献資料学的考察

誉田 慶信

はじめに

本研究の課題は、藤原基衡期平泉仏教の特質の一端を文献資料から明らかにすることにある。藤原基衡の時代は、それ以前の清衡期（11世紀後期から12世紀前期）、あるいは以後の秀衡期（12世紀後期）に比較したとき、平和で都市文化の繁栄した時代という印象を人びとに与えている。計画的な街路形成をふまえて建立された毛越寺（羽柴直人2002、八重樫忠郎2013）、苑（園）池造営（前川佳代2008、佐藤嘉広2013）、大量の白磁・青磁の移入などは、基衡期仏教文化を象徴する事例である。遺跡発掘の成果から浮かび上がった都市平泉の姿は、平泉研究をさらなる段階へと押し上げている。

その一方において、同時代史料の少ないこと、清衡と秀衡とのあいだに挟まれた基衡期への問題関心の相対的薄さもあいまって、文献史学の立場からの基衡期に対する研究にはまだやり残された部分がある。近年の平泉に関する歴史学研究は、白河後期院政の政治史（遠藤基郎2005）、平泉仏教文化集団と交通関係（誉田慶信2013a）、北方世界との貢納関係に注目しながら、日本史全体の中で展開していく「地方の時代」の深まりを秀衡の平泉幕府論への論理回路で解明していくようになっていく（入間田宣夫2013a、齊藤利男2011）。

本研究では、このような研究動向を踏まえつつ、基衡期の同時代史料を丹念に分析し、それを院政期社会のなかに位置づけ、さらに当該時期の奥羽在地社会、藤原基衡にとって、その意味するところは何であったかを明らかにする。もって、基衡期の平泉仏教の歴史的な性格を論じてみることにする。

I 清衡の千僧供養、基衡の千部一日経

天治3（1126）年3月の「鎮護国家大伽藍」落慶供養のとき、千人の僧侶による法華経読誦（千僧供養）が執り行われた。千僧供養こそは、京都の大極殿、法勝寺、比叡山延暦寺などの限定された場で実行される国家的仏会であり、院政期日本仏教を特色づけるもっとも重要な仏会であった（海老名尚1993、井原今朝男1995、菅眞城1997）。千僧供養の運営形態から公家沙汰と院中沙汰とに分類し、その手続きから、院政期王権と公家政権との構造的な特質をさぐる研究もあった（遠藤基郎2008）。千僧供養は、従六位上の官位の藤原清衡が執り行えるようなものではなく、異例中の異例の仏会であった（入間田宣夫2013a）。天治3年の「鎮護国家大伽藍」落慶供養の千僧供養は、万燈会、金銀字交書一切経の供養会（一切経会）とともに、藤原清衡仏教の頂点となる仏会であった。まさしく、清衡の千僧供養であった。

以上のように清衡期の仏会を把握した場合、基衡期の仏会をもっとも特色づけるものは何だったのだろうか。同時代史料が僅少なこともあって、このことを解明していくことは至難であるが、史料が全くないわけでもない。いわゆる中尊寺経のうちの金字一切経のなかには紺紙金字法華経約103巻17部以上もあることが、山本信吉によって指摘されている（山本信吉1971）。これらの紺紙金字法華経のうち、中尊寺外に流出したものも含めて7点の奥書を有する紺紙金字法華経が紹介されている。その7つのうち、以下の4点の奥書を分析対象とする。史料の所蔵者を最初に記す。（史料1）静岡県湖西市妙立寺蔵、（史料2）田中塊堂『日本写経綜覧』（思文閣、1974年）より、（史料3）東京都個人蔵、（史料4）大阪南河内金剛寺蔵。なお、山本信吉は、（史料1）と（史料3）は法華経巻第八の奥書とする。（史料1）から（史料4）の奥書は以下の通りである。

(史料1) 保延四年五月十六日、奉為先考藤原清衡成仏得道、奉書写千部一日経内、第六十二部也

弟子、藤原基衡
導師、伝灯大法師範耀
問者、阿闍梨範覚

(史料2) 保延六年五月四日、奉為先考藤原清衡成仏得道、書写千部一日経内、第二百二十四部也

弟子、藤原基衡
講師、伝灯大法師幸慶
問者、大法師兼耀

(史料3) 保延六年七月十一日、奉為先考藤原清衡成仏得道、書写千部一日経内、第二百七十一部也

弟子、藤原基衡
講師、伝灯大法師増忠
問者、大法師応円

(史料4) 久安四年閏六月十七日、奉為先考藤原清衡成仏得道、書写千部一日経内、第五百七十二部也

弟子、藤原基衡
講師、伝灯大法師乗恵
問者、大法師増忠

この4点の史料にある人物について、明らかにしてみたい。まず、上記の奥書には、共通して、弟子、藤原基衡の記載があった。この金字法華経写経は、基衡が「弟子」の意識のもとになされたことを意味する。では基衡以外の僧侶とはいったい誰なのか。容易に彼らを明らかにしえないが、本研究では、3人の僧侶を解明することができた。まず、(史料1)の「問者、阿闍梨範覚」は、在地世界の寺院の僧侶にあらず。京都園城寺から千部一日経の問者として招請された僧侶である。三井寺範覚は、大治2(1127)年12月3日に京都法成寺御八講の豎者をつとめている(『中右記』同日条)。この法成寺御八講は11月29日から開始され、3日の御八講では探題を勤める忠尋僧都が所労によって精義できなかったため、忠尋の代役を範覚がおこなっている。忠尋といえば延暦寺東陽院流の始祖で白河院政後期から鳥羽院政前期に御願寺の諸供養・仏会で探題・導師などを勤め、その威光は興福寺僧永縁とともに王朝貴族内では、つとに有名であった。『中右記』長承元(1132)年5月27日条には、最勝講結願にあたり僧事があり、範覚阿闍梨のことが触れられてあった。

さらにこの範覚は、『国史大系 尊卑分脉』巻一によれば、藤原氏道隆流の家範の子、園城寺阿闍梨範覚であった。範覚の兄弟には、白河院院司、四位別当として活躍した基隆を筆頭に家行・家保・宗隆らがいたし(高橋昌明2011)、範覚の妹(姉、あるいは姪か)は美福門院得子の女房となっていた。注目されるのは、範覚の兄弟に仁和寺の阿闍梨行範がいたことであり、この行範は仁和寺僧で陸奥国に住む、とあったことである。

行範の師は、「本朝傳法灌頂師資相承血脈」(『大日本古文書 醍醐寺文書 之一』)によれば寛助であった。そして、この寛助こそはまだ若き覚法法親王を扶持しつつ白河院政期に隠然たる力を発揮し、世に「法師関白」と称されたかの有名な僧侶である。嘉承2年(1107)年には、鳥羽天皇の護持僧にもなり、大北斗法の供養導師をもつとめていた(栗本徳子1991)。また覚法は、村上源氏源頼房の子である信雅と兄弟である師子と白河上皇とのあいだに生まれた法親王である。周知の事実である。源信雅は、清衡没年の大治3年(1128)、陸奥守に任命されていた。後述のごとく陸奥守源信雅こそは、藤原基衡が兄惟常との家督相継争いに生き残るための強力な後ろ盾として、決定的な重要な人物であった。範覚と陸奥・平泉との結びつきは、思いのほか太い。

そもそも園城寺と奥州藤原氏との関係については、『吾妻鏡』文治5年9月17日条の「寺塔已下注文」にある、園城寺千僧供養を藤原清衡が執り行った、というかの有名な事実があった。さらには、『古事談』巻五の34「三井寺鐘の由来の事」があった。園城寺にある竜宮の鐘は、もともとは栗津に住む栗津冠者なる武者が龍王からもらいうけ、建立した広江寺に鉤してあったもの。藤原清衡が園城寺の僧侶千人に施した砂金千両(千僧供養)のうち、わずか五十両でもって園城寺が広江寺から購入した、と。奥州藤原氏と園城寺との密接な関係を示す(入間田宣夫2013a)。陸奥守藤原基信の女と撰関家藤原忠通とのあいだに生まれた恵信(興福寺僧)もいた(前川佳代2008)。

前掲(史料1)の保延4(1138)年5月16日の千部一日経の頓写供養において、導師を勤めた伝灯大法師範耀を同時代史料から探すことはできなかった。しかし、上記の問者阿闍梨範覚が参加する仏会において導師を勤めた伝灯大法師範耀は、少なくとも奥羽在地世界の寺院の僧侶にあらず。都の天台宗寺院権門のしかるべき学僧である、と判断せざるをえない。範覚が園城寺僧であることから、伝灯大法師範耀は、あるいは延暦寺の学僧であったか。なお、この時代に範覚と言えば、仁和寺信蓮院開祖の範覚(世豪)が有名であるが、別人である。

また、「問者」阿闍梨範覚がいるということは「講師」の存在を意味する。事実、(史料3)の保延六年の千部一日経では「講師」と「問者」がいた。さらには、鎮護国家大伽藍に納められた金銀字交書一切経の料紙が、延暦寺専当法師鎮徳や日吉舎宮師高満らによって調達されたこと(保安2年(1121)正月十八日金銀字経本紙墨書『奥州平泉文書』国書刊行会)。また、天治3年3月の鎮護国家大伽藍落慶供養で供養願文を読んだ導師は、延暦寺僧侶の已講相仁であった(菅田慶信2013b)ことよりしても、延暦寺・園城寺の僧侶が、千部一日経のために基衡により平泉に招請されてもなんら不自然ではなかった。

上記の(史料3)と(史料4)に記載された増忠についても、他の史料から確認することができる。この増忠は『尊卑分脈』によれば、藤原道隆流の藤原経忠の子である。父の経忠と陸奥守(1116~21?)藤原基信は兄弟であった。藤原基信は白河院近臣として活躍し、白河上皇に接近しようとする藤原清衡の思惑を取り持った人物であった(遠藤基郎2005)。藤原基信の甥にあたる増忠の兄の阿闍梨増修は、園城寺、行縁は都維那で最勝寺の僧でもあった(『尊卑分脈』)。あるいは、増忠も寺門であったか。さらに、姉妹は善勝寺藤原家成と結婚していた。家成と言えば、大国受領系の院近臣家・末茂流出身で、美福門院得子勢力の中心人物であった(元木泰雄1996)。また、増忠の兄弟である行縁も都維那であり最勝寺の僧侶として王都権門寺院で活躍していた。

増忠は、(史料3)にあるように、伝灯大法師として保延6年(1140)7月11日千部一日経の講師となっている。また、(史料4)にあるように、久安4(1148)年閏6月17日には問者をとっている。講師と問者とでは、一般的には講師が問者より教学の階梯において上であり、講師の発言に宗の碩学たる証義が論評を加えたというのが、現実的には問者の問いに講師が返答に窮することもあった(上島享2010)。

一方、問者の応円は、保元元（1156）年3月15日の祇園社恒例一切経会で咒願を読み上げる応円であったか（『兵範記』同日条）。この一切経会で導師を勤めた弁覚は、久寿2年7月3日の法勝寺法華八講の証義を勤めた鳥羽院政後期の顕密教学の上層に位置する僧侶であった（『兵範記』同日条）。ちなみに応円は、『尊卑分脈』巻4によれば、紀一族祇園社執行の行円の子であり、応円祖父の寛院は恵心僧都源信の弟子内供奉であった。

基衡がなそうとした平泉の千部一日経で招請された僧侶のなかには、以上のような分厚い京都の教学体系をになう僧侶たちがいたことは明白である。

さらに注目したいのが、藤原道隆家系に生まれた範覚と藤原頼宗家系に生まれた増忠とは、長忠の二姉妹によってつながっていたことである。つまりは、基隆（範覚の兄）の妻は、藤原頼宗の孫の長忠の娘であり、さらには長忠のもう一人の女は藤原忠能（増忠の兄）に嫁ぎ、長成を産んでいたのである。基隆の妻と増忠兄忠能の妻とは姉妹であった。藤原長忠は平安末期において台頭してきた徳大寺系藤原氏に娘を送り「嫁の家」ともいわれた名門貴族（保立道久2004）。『中右記』によれば典型的な弁官系貴族であった。そして、長成こそは源義経の生母常磐の夫であった。源義経と平泉藤原秀衡との接点に、常磐をめぐる女性たちの濃厚な人脈をあり、とする保立道久の研究を思い起こさずにはいられない（保立道久2004）。

近年、遠藤基郎は、藤原基衡と道隆系藤原忠隆との人脈に注目する研究成果を発表している（遠藤基郎2013）。今までの研究では、陸奥守となって下向した忠隆の子の藤原基成と平泉藤原基衡との密接な連携こそが、街路形成をふまえつつ毛越寺建立をなしていく仏教都市平泉へのさらなる飛翔の根本原因とされてきた。八重樫忠郎は、考古学上の研究成果に基づき、毛越寺建立を12世紀第3四半期前半ころとしている（八重樫忠郎2013）。確かに基成と基衡との連携は、仏教都市平泉の発展にとって重要である（菅野成寛1994）。ただし、千部一日経という空前の仏会が、基成の陸奥守補任以前からなされていたこと、具体的には、藤原基隆の弟たちとのつながりがあったことに、本研究では注目するものである。覚法系列の人脈をつなぐパイプとしての範覚の役割は重要なものがあつた。陸奥守源信雅の死後も、覚法法親王と藤原基衡とのあいだのパイプは行範や範覚を通して維持され、藤原基隆との接点も確保されていたのである。つまりは、清衡以来、基衡も京都への積極的な働きかけと人脈形成のなかで、仏教立国を維持していたのである。千部一日経の成就にはそのような意味があつた。そして、何よりも注目すべきは、基衡の千部一日経が、都の僧侶を導師・講師・問者に招請しての問答講として続けられていったことである。このことの持つ意味をまずは確認したい。ここに平泉－三井寺僧の範覚－行範－寛助－覚法法親王という人的ネットワークの存在を見いだすことができる。

II 仏会としての千部一日経と基衡

そもそも千部一日経とは、法華経一部を一日で書写し終える写経供養を、千回おこなうことである（田中塊堂1974）。法華経は8巻（28品）からなる長大な経典であるが、さらに法華経の開経として無量義経、結経として観普賢経が加わるので、法華経書写は全体で三十（巻）からなっていた。一日経とは、まさしくこれらを一日（実際は午前中で写し終える）で写経する必要があつた。とうてい一人の書き手による写経は不可能であり、必然的に集団による写経となった。鎌倉期建久年間に成立したという「二中歴」（『史籍集覽』第32集）では、一日書写法華経支度では、書手30人、催2人、調卷師3人の人々が必要であり、それぞれに浄衣30領、書料布30段、各疋絹、布3段浄衣が支給されるとともに、全体として墨30、廷筆20管、餐35前（料米3斛）、肴一度（料米3斗）も用意されるべし、と記してあつた。

この千部一日経がどのように行われたのか。千部一日経の作法、仏会としての具体的なようすを伝え

る史料を見つけることは、容易でない。そこで法華經千部一日經ではないが、大般若經一部書写をあげてみる。寛治8（1094）年3月19日、郁芳門院媞子の平癒を祈願して大般若經一部書写がなされた（『中右記』同日条）。それは、以下のようなものであった。まず大般若經本と料紙（白紙・焼表紙）が、両院別当・公卿・殿上人・受領・修法の僧侶・本院庁・前大僧正・天台座主・前関白らに一人一帙あるいは二・三帙ずつ配られ、鶏が鳴く早朝から書写が始まった。書写する場所は「六条殿近辺小屋」。そして写經と平行して辰の刻には会場設営がなされ、丈六の釈迦仏を今日のうちに図絵した御仏が母屋中央に懸けられた。未刻以前には經典書写が終了し、その經典が奉ぜられる。諸人、前関白から左右大臣など公家上層部のほぼ全員がそらい僧侶60人も参上すると、白河上皇院司の藤原顕雅が御願趣を表した。導師権僧正隆禪による弁説の後、諸僧による読經、行香がなされ、夜の亥刻になって大般若經一部書写の仏会はようやく終了した。さらに講説のあいだ御邪氣を守護人に託したら、それに呼応するかのようには御加持僧がきた。このことを、『中右記』作者の藤原宗忠は、般若經の靈驗が自ずから顕然となった、として感嘆した。

まさしく、大般若經写經は、単なる經典書写にとどまらず、仏会の一コマであった。同様の事例は、『中右記』天仁元年8月13日条から18日まで6日間にわたっておこなわれた藤原宗忠家中女房の企画する色紙五部大乘經の書写でも見られる（『中右記』天仁元年8月13～18日条）。そこでは、「過去二親、一切衆生、滅罪生善のため、また先には功德上分をもって先帝（堀河天皇）の聖靈に資し奉り、朝恩の深きこと報いるところを知らざる故なり」とする藤原敦光の起草の願文が読み上げられていた。写經の後の仏会会場である寢殿には、作られたばかりの等身金色釈迦像が安置され、その前で12人の僧侶による講説がなされた。増珍・永縁・長誉・忠尋など顕密寺院を代表する高僧が出席。「天台法相英才兼能説」の増珍と永縁が互いに講師また問者となった。講は開放され、「聴聞の男女皆以て随喜」「道俗賓客來集」したという。『栄花物語』巻16の「もとのしづく」においても、治安元（1021）年九月の藤原道長の女房たちによる結縁法華經写經に永昭が講師として招請され、願文が読まれ、無量義經から觀普賢經にいたるまでの講説がなされていた。

同様の事例は、久安5年（1149）10月8日に亡き鳥羽天皇皇女叡子内親王の御月忌にさいしても見られた。早朝から法華經の書写が30人の經師によってなされ、午の刻に終了、校正のあと調卷されている。その後、千日講がなされている（『兵範記』同日条）。また、「一日經」の作法は、寿永2（1183）年7月14日に九条兼実がとりおこなった故皇嘉門院聖子（養和元年1181、12月に没）の追善供養としての写經でも見られた。『玉葉』同日条によれば、やはり午の刻に写經が終わり、法華經の本門の内題字は徳大寺藤原実定が、迹門の内題字は九条兼実、外題字はすべてを九条兼実が記した、という。

寿永2（1183）年4月29日から開始され、6月7日に終了した法華經の写經を一族あげておこなった運慶願經は（『平安遺文 題跋編』2961～67号）、硯水を三カ所の靈水に求め、經軸は東大寺焼失の柱残木にあてるといふ、仏師雲慶のこだわりのなかでなされた。在地の人々が結縁し、写經中は宝号3100返、念仏3100返を唱えるという、まさしく法華經受持（写經）の風景が繰り広げられた（林屋辰三郎1953、高木豊1973a）。かかる、雲慶の法華經写經は、珍賀・栄印という二人の書き手によって丁寧になされ、頓写でなかったため、40日近い日を要することとなった。逆に言えば、頓写であったとしても一日（実質は午前中に）で法華經を写すことがいかに大変な持經であったかがわかる。ましてや、午前中の書写と午後からの講説とがセットになった仏会を千回おこなうことは、実に遠大なことであった。

さて、以上のことを念頭においた場合、院政期公家社会や南都北嶺において、千部一日經は、ごく一般的に見られた仏会と言えるのだろうか。院政期社会におけるいわゆる国家的仏会の中核にあったのは、千僧御読經（千僧供養）であった。康平4（1061）年から治承4（1180）年までに実に127回もの千僧

御読経が執り行われた。

それに比して、千部一日経について記述している史料は、思いのほか少ない。試みに『御堂関白記』『日本紀略』『小右記』『左経記』『後二条師通記』『中右記』『殿暦』『長秋記』を調べてみると、「千部法華経」の記載は、12カ所確認できる。このうち、寛弘6（1009）年12月14日には、中宮藤原彰子安産の修善として千部法華経の摺がなされている。摺とは印刷物のこと。11世紀には経典が印刷されるようになり、寛治2（1088）年には興福寺で法相宗根本典籍である『成唯識論』が刊行されていた（白石克1998）。

また亡くなる三ヶ月ほど前の久寿3（1156）年4月7日に開始された鳥羽法皇発願の千部法華経では、石清水八幡社・上賀茂社・下賀茂社でそれぞれ毎日一部の法華経を供養し、三社あわせて三千部の法華経供養をなそうというものであった（『兵範記』同日条）。下賀茂社に赴いた平信範は、同社舞殿奉仕堂の莊嚴を具体的に記し、第一間の前机におかれた御経第一巻と願文などを確認するとともに、導師法眼顕尋、題名僧により講演が始まり、説法があったことを記す。

しかし、紺紙金字経となると話はやや違って来る。金泥千部法華経の事例としては、仁平元（1151）年11月8日に藤原家成（中納言）の金泥法華経一千部供養がある（『本朝世紀』同日条、「濫觴抄」『群書類従』巻20）。金字法華経一部写経と供養は、院政期公家社会ではごく一般的であったが、家成のこの金泥法華経一千部供養は、当時の京都でも驚嘆されたと思われ、「濫觴抄」に記載されることとなった。この藤原家成こそ、美福門院得子とはいとこ同士。大国受領系鳥羽院近臣、美福門院の中心人物として権勢を有し、1141年ころからは、美福門院・藤原氏末茂流・村上源氏顕房流・藤原氏中御門流と待賢門院・藤原氏閑院流との対立構図の渦中にあった人物（元木泰雄1996、佐伯智広2012）。まさしく、鳥羽院近臣藤原家成ゆえになしえた金泥法華経千部供養であった。白河上皇の石清水八幡奉納などのさいになされたのも、千部金字法華経書写であった。

このように見ていくと、「千部法華経」の発願者が、藤原彰子・藤原道長・右大臣藤原実資・関白藤原師通・白河法皇・鳥羽法皇など天皇家・藤原摂関家などの人間であることに注目したくなる。摺写の技術が院政期社会に見られるが、千部一日経は、普通の貴族とて容易になしうるものではなかった（龍田恭子1990）。このことを確認しておきたい。『平安遺文 題跋編』に掲載された写経奥書のなかに、前節で検討した藤原基衡発願千部一日経の事例以外、発見しづらいことに通じるものがある。

時代はやや下るが、嘉禄元（1225）年5月22日、鎌倉で金泥経書写供養と千僧供養が行われた（『吾妻鏡』同日条）。前年から続いた天災地変、北条義時の後妻の伊賀氏が藤原頼経を廃し一条実時の擁立を企てるという政争の下、「世上病死之者数千に及ぶ、その災を攘せんがため、般若心経と尊勝陀羅尼経万卷、一千部仁王経」書写がなされたのである。鶴岡八幡宮にての千僧供養（仁王経転読）が開かれたと同時に般若心経と尊勝陀羅尼経の各一千巻の「摺経」があり、各百巻分に限っては金泥経の書写が行われ、それは諸国一宮に下された。その後「供養の儀」があり、導師弁僧正定豪には十物十五種・布施、千僧にも布施があり、「布施扇経袋等物巨多その数を知れず」という状況であった。

嘉禄元年の鎌倉鶴岡八幡宮でなされた千僧供養と一千部の般若心経・尊勝陀羅尼経摺写（内百巻は金字経）は、死にゆく自分を予感した北条政子の発願のもと、嵯峨天皇のときにおこなわれた弘法大師の般若心経書写にあやかって、わずか3週間の準備をへてなされたものだった。政子の発願ではあるが、その実質的執行者は北条泰時。前年に執権となったばかりの北条泰時が、幕府権力の正当なる掌握者として天災地変・天下疫気を鎮めん、としたのである。この幕府の写経法会は、千僧供養とセットでなされたものであった。そのような鎌倉幕府であっても、金字経として写経されたのは、尊勝陀羅尼経と般若心経という比較的短い経文であった。

以上のように見てくると、藤原基衡の金字法華経千部一日経が、鳥羽院政期の日本において有した位

置が理解できる。天皇家や藤原摂関家、あるいはその近辺にて権力を有した有力貴族、延暦寺や円仁などのごく限られた僧侶こそが、強い発願力（政治力）を発揮しながらなしえた遠大なる積善の行、それが千部一日経であった。法華経の行法（受持）、読・誦・解説・書写からなるが（高木豊1973b）、書写のみで終わるのではなく、読・誦呪・問答講とセットになっていた。事実、藤原基衡の千部一日講でも、第1節で検討したように、導師・講師・問者が、あるいは園城寺や延暦寺から招請されて、法華経講説をおこなっていた。そのような、仏教の善根が平泉で20年以上続いたこと。その事実を確認したい。天治3（1126）年3月、平泉鎮護国家大伽藍落慶法要のさいの千僧供養は、東の平泉千僧供養、西の平氏千僧供養とも言うべき大イベントであった（菅田慶信2013b）。その意味で、藤原基衡の千部一日会も、当時の京都以外ではとうていなしえない、破天荒な仏会であった。まさしく清衡の千僧供養に匹敵する、基衡の千部一日経であった。

Ⅲ 基衡千部一日経発願の背景

本節では、千部一日経は、なぜ「その時」から行われたのか、ということを考えてみたい。前節で明らかかなように、遠大なる千部一日経は、京都の貴族でも容易になしえないものだった。千部一日経発願には、旦那の強力な菩提心が不可欠であった。それでは、基衡はいつころ千部一日経を開始したのか。

田中塊堂は、千部一日経の開始を保延3年の年初ころと推測する（田中塊堂1974）。この田中の分析をもう少し詰めて考えてみたい。前節の史料（1）から（4）を見ると、保延4（1138）年5月16日の法華経書写部数は60部。保延6年5月4日は224部、同年7月11日は270部、久安4（1148）年閏6月17日は572部である。保延4年5月16日から保延6年5月4日まで、ほぼ2年間で162部の法華経写経がなされた。1ヶ月で6.75部のペースで写経されている。ほぼ4日から5日の間をおいて一部写経が行われた。保延6年5月4日から同年7月11日の2ヶ月間は、46部の写経がなされた。連日に近いような、一日経の名にふさわしい状況であった。保延6年7月11日から久安4年閏6月17日までの約8年間で302部の書写がなされた。1ヶ月間で、3.2部のペースである。残存史料の分析から言えるのは、前半においては、4.5日に一部の割合で写経がなされ、保延6年には一日経書写がほぼ連日執り行われたこと。後期にはやや写経のスピードが落ちること、以上の3点である。

このことから、以下のことがわかる。第一には、この千部一日経は、基衡の生涯においてかろうじて達成できるかどうかの遠大なる事業であったことである。藤原基衡の没年は、相原友直『平泉実記』の保元2（1157）年とする説や保元3年とする説（川島茂裕2003、斉藤利男2011、大矢邦宣2013）がある。推定年齢は55歳か56歳である。後半の写経ペースである1ヶ月につき3部の回数でいくと、千部一日経が成就するのは、久安4年閏6月から142ヶ月（11年と10ヶ月）後の1160年となる。それは、基衡の死亡年とほぼ同じである。基衡は、己の生涯をかけて千部一日経を成就せん、と発願したのである。

最大の問題は、それでは、いつ千部一日経は開始されたのか、ということである。前述の分析では、写経事業の前半は4.5日に1回の割合で一日経がなされていた。これをもって62部が完成するには、279日分必要となる。そして、保延4年5月16日から279日さかのぼると、保延3年7月16日前後になる。その7月16日は、清衡の命日（十回忌）であった（菅野成寛1991）。本稿では、藤原基衡の千部一日経の開始が、亡父清衡の十回忌にあたる保延3年7月16日に開始されたと考える。

もっとも、金泥法華経書は、この保延3年以前にも見られた。それは「平氏」が清衡没後の三七日にあたる大治3（1128）年8月6日になした、法華経の「一日中書写」である（『平泉町史 史料編1』13号史料）。川島茂裕は、この「平氏」を清衡正妻「北方平氏」ととらえる（川島茂裕2002）。さらには、大治3年7月13日にも「為清衡一日之中書写」がなされていた（『日光輪王寺所蔵文書』、川島茂裕

2003)。しかし、これらの二つの金字法華經書写は、基衡発願の千部一日經とは異質のものである。田中塊堂は、大治3年の二つの写經を先例とすることで、基衡の千部一日經が発願されたとしているが（田中塊堂1974）、大治3年の法華經書写は、一日頓写であったとしても、それは当時の公家社会によくみられたことであり、これをもって基衡千部一日經の嚆矢とすることはできない。

それでは、なぜ、保延3年7月清衡没後十年にして、千部一日經が開始されたのだろうか。ごく常識的に考えるならば、藤原清衡の追善供養のため、となろう。古くは、田中塊堂が、清衡の追善供養、清衡慰霊のためと述べていた。何よりも、金字千部一日經法華經の奥書には「清衡成仏得道」と記載されていることは、この常識的見解の正しいことを証している。このことを否定するものではない。

本稿では、この理解に立ちながらも、保延2年という年が、藤原基衡にとっていかなる時代であったのか、に関して考えてみたい。数多くの研究は、保延年間年は、藤原基衡にとってもっとも試練の年、国司との緊張を強いられた時代であった、としている（齊藤利男2011、遠藤基郎2005）。このことを示す事件が『古事談』第四の二五と『十訓抄』下第十に記載された信夫佐藤氏・藤原基衡と陸奥守藤原師綱との対立に関する物語である。『古事談』では以下のように記述している。陸奥守として下向した陸奥守師綱は、基衡が一国を横領し国司の威がないことを知り朝廷に奏上する。宣旨を申し受けて検注をしようとしたところ、基衡が信夫郡の在地を支配していた「大庄司季春」と心をあわせ抵抗したので、国司はなお、宣旨を帯びて入部したところ季春と合戦になり、国守方に負傷者が続出することとなった。国守師綱の入部は先例がないことではあるが、宣旨に背いたことは「違勅之恐」なきにあらざることを憂慮する藤原基衡の気持ちを察した季春は、自分の首を切って国司に差し出すよう基衡に進言し、国司が派遣してよこした検非違使所目代の前で気仙から出仕していた弥太郎に斬首させたのである。

まず、陸奥守藤原師綱の就任時を確認しておきたい。『中右記』保延元年5月15日条には、陸奥守源信雅が卒去したことを記している。藤原基衡にとって、京都政権との繋がりをなす上でもっとも重要なコネである陸奥守源信雅を失う、という重大事であった。信雅卒去をうけて、京都では、陸奥守を所望する輩が「東西を走迷す」という状況となった（『同』6月8日条）。藤原敦光も陸奥守に任じられようとして奏上を出している（『本朝統文粹』巻第六）。陸奥守に任命されたのは藤原師綱であった。それは、保延元（1135）年のことである。大塚徳郎（1984）や齊藤利男（2011）が述べている通りである。師綱の父親は、藤原師尹系の尹時であるが、重要なのは母親の系列であった（遠藤基郎2005）。母親は村上源氏師忠の娘であり、しかも姉妹が後三条天皇皇子輔仁親王に嫁いで源有仁を産んでいた。母方の村上源氏との人脈を生かしてのし上がってきたのが、藤原師綱であった。

この藤原師綱が信夫郡の検注に入部しようとしたのは、国守に任命されて間もない時であった、と考える。出羽国でも似たようなことが起きていた。それは、天仁2（1109）年の、出羽守源光国による摂関家両寒河江莊収公事件（天仁2年1109）であり、出羽守入部直後に発生していた（誉田慶信2014）。『古事談』は、「依レ無二先例一雖レ追二返国司一」と基衡が大庄司季春に述べたのも、信夫郡の検注がおこなわずにきたからである。その先例が国守師綱によって否定されたからに他ならない。季春（基衡）の国司検注拒否、師綱が都から宣旨をもらい季春らの非を糾弾、師綱による検田使入部拒否、その非を糾弾する宣旨の要請とそれに対する師綱の武力行使、と事態はエスカレートしていった。そして、ついに基衡の身代わりとして信夫大庄司季春一族を斬首するという、やむにやまれぬ最後の手を使わねばならなくなった。藤原基衡の実効支配を黙認しない新国守藤原師綱。そのために発生する在地勢力との対立。奥羽世界平和秩序の減退の可能性。藤原基衡にとって見れば、もっとも緊張と苦難の時であった（齊藤利男2011、遠藤基郎2005）。さらに言えば、基衡には、もっとも不安に満ちた時代でもあった。

この大庄司季春は、信夫郡司で「代々伝れる後見なる上、乳子なり」と『十訓抄』にはあった。そも

そも、信夫佐藤氏は平泉藤原氏と同じく藤原秀郷のながれをくむ由緒ある武士、鎮守府将軍のスタッフとして奥州に乗り込みんできた佐藤師信は、清衡と連携を強めるなかで信夫郡に土着したのである（入間田宣夫2007）。川島茂裕は、「信夫佐藤氏一族は、奥州藤原氏代々と外戚関係をもち、季春が乳母（乳父）として基衡を養育してきた」と述べる（川島茂裕2002）。しかし、入間田宣夫は、乳母を差し出す家が平泉藤原氏と婚姻関係を結んでいたとは考えられず、むしろ信夫佐藤氏は家人と奉仕していた、としている（入間田宣夫2007）。やはり、『吾妻鏡』貞応3年閏7月29日条に見る「武州（北条泰時）後見」などの事例より押して、信夫佐藤氏（大庄司季春）は、基衡への奉仕者であった。

それにしても基衡が「違勅之恐」を避けるために、もっとも信頼できる家人を斬首するということは、よほどのことであった。建暦2（1212）年成立の『古事談』に藤原清衡と基衡は、それぞれ2回登場してくるが、この信夫佐藤氏の斬首とそれに至る陸奥守師綱とのやりとりは、詳述をきわめていた。清衡の記述では見られないことであった。建長5（1252）年成立の『十訓抄』でも同じことが言えた。「後見」信夫郡司佐藤季春の助命に女性外交を展開し（大石直正2001）、「構二女人沙汰之体一、再三遣二妻女於国司館一乞請サセケリ、其請料物凡不レ可二勝計一、沙金モ一万両云々」との話で都が持ちきりになるほどであった。このことに注目したい。

「後見」は、単なる「頼りになる」という意味にあらず。「いざとなったら主人の身代わりになって身命をなげうつ」「もっとも親近の家臣・郎従としての役割をになう」という意味があった、と入間田宣夫は述べる（入間田宣夫2007）。このことを踏まえた時、信夫佐藤季春と子息舎弟五人の首を切ったということは、残された一族への手厚い保護をなすべし、との責任が基衡に発生したことになる、と考えざるをえない。入間田は、大庄司季春一族は滅亡したものの、従兄弟の佐藤師信系統の生き残りを支援し、信夫郡から荘園（佐藤氏の在地支配権の確保）への切り替えを後押しした（佐藤氏の在地支配権の実質的保障）、と強調する（入間田宣夫2007）。「後見」佐藤氏への現実的保護策なくして、藤原基衡の為政者としての信頼は確保できなかったのである。さらに、このことに付け加えるとすれば、基衡が藤原惟常との家督相続争いで勝利できたときの最大の功労者「後見」大庄司季春一族を失うことは、たとえ苦肉の策であったとしても基衡には不安この上ないことではあったに相違ない、という点である。基衡は、保延6年夏、千部一日経をほぼ連日のように行っていた。千部一日経それは、基衡の不安の深さを表している。

そもそも、基衡は清衡亡き後、清衡長男である惟常（小館）との争いをへて平泉藤原氏の家督を奪取していた。この清衡（御曹子）と惟常（小館）との家督争いは、上京し検非違使別当源義成と再婚した「清衡妻」（常陸平氏の吉田清幹の娘、川島茂裕2002）によって京都の公家たちに知られることとなった（『長秋記』大治5年6月8日条）。1年近く続いた争乱の背後に、基衡・惟常をかつぎだしていく独立性が強い家臣たちの存在を齊藤利男は指摘していた（齊藤利男、2011）。奥羽武士団社会の習いとしての次子相続は（大石直正2001）、決して無条件に次子に家督を与えるものではなかった。清衡も基衡も、一族を二分する跡目争いに勝ちぬく必要があった。このことを忘れてはならない。

家督争いに勝利した藤原基衡は権力の確立と家臣団統制の強化に乗り出した（齊藤利男2011）。それは、時間の要することであったに違いない。基衡は、自らの実効支配の地を京都に認めさせるために陸奥守源信雅と提携していった。しかし、信雅の死によって京都政権との絶好の太いパイプを失った。亡父清衡の時に平泉藤原氏抑圧策をとった、かの藤原良兼を想起させるような藤原師綱が、保延元年、陸奥守に任命されることによって、基衡の不安は一気に増大することとなった。案の定、師綱は、今まで実施されなかった検注を基衡方の信夫郡でも行い、在地勢力と対立を激化させていった。領主支配権を確保していく上で発生する在地の政治対立が基衡にもたらされた、とも言える。しかも家督を清衡より受け

継いだとはいえ、基衡権力が確立しているわけではなかった。それ故にこそ、何よりも平泉藤原一族の強力な結集が必要であった。それには、清衡の成仏得道、追善仏事を徹底して成就すること、一族の結集を仏事に昇華させることこそが最良の策であった。かくして、自分の生涯をかけた清衡追善供養、つまり千部一日経を発願したのである。千部一日経の開始の時は、保延3（1137）年7月清衡命日前後である。時に基衡は36歳前後。基衡次男が、元服をむかえたころであったか。

中世社会において、追善仏事の背後に政治的戦略的思惑があった。樋口健太郎は、九条道家による藤原忠実追善仏事（法華八講）が、寛喜3年（1231）忠実死後70年後に初めて行われたことに注目し、自分の子に災厄をもたらす忠実の霊を鎮めるためであったことを述べている（樋口健太郎2013）。また、治天の君による追善供養執行の背景に、治天の君としての正統性を確立し、地位を安定化させるため、追善仏事を積極的に継承し分立する皇統を吸収していた、とする布谷陽子の研究もあった（布谷陽子2005）。それは、基衡の千部一日経の背景に共通するものでもあった。

千部一日経を成就するためには、膨大な人力と財力が必要であった。新経を使用しての問答講を執り行うべく都から学僧を招請することも不可欠であった。清衡は、鎮護国家大伽藍を造り、金銀字交書一切経を納め、京都と見間違えるばかりの破天荒な仏事（一切経会・千僧供養・万燈会）を執り行うことで奥羽全体を「平和な仏土」としようとした。この清衡の壮大なる仏事をふまえながらも、一回だけのイベントというよりは、千日ものあいだ金字法華経書写をなし続けるという、京都の公家でも容易に成就できない遠大この上ない千部一日経を基衡は発願した。さらには法華経書写と問答講には衆生が結縁していった。つまり、千部一日経には、平泉藤原氏の私的積善に終わらない菩薩道としての意味もあったのである。弟子基衡を筆頭に一族、僧侶、職人、さらには結縁する衆生が日常的におこなう行によって、平泉は仏土として荘厳化されたのである。毎日のように法華経の写経、唱題、滅罪生善の仏会が繰り上げられることで、基衡は仏土平泉に人々を結集させることができたし、京都政権に向かっては「平和」を希求する仏土平泉を発信できたのである。

おわりに

藤原基衡の千部一日経発願の背後に、12世紀30年代段階の奥羽在地世界の政治矛盾対立あり。平泉権力の強化に向かう基衡の深い不安あり。本研究で注目したことであった。それは、基衡前期の政治課題からわき起こったことでもあった。基衡は南奥羽へも勢力をのばしていった。それは、基衡への傘下に入る在地勢力のかかえる問題を基衡が背負い込むことになる。大庄司季春の事件の背後には、在地勢力と京都からの動きとのあいだで生じる同じような摩擦・軋轢が起きていた、と考える。かくして奥羽の実効支配を維持するため、さらなる仏土の荘厳化が必要になってくる。毛越寺の建立、そして円隆寺寺号の問題は、鳥羽院政期後期の基衡による仏土成就の象徴的事件であった。なお、このことについては次年度の研究課題としたい。

注

井原今朝男 『日本中世の国政と家政』「中世国家の儀礼と国役・公事」校倉書房、1995年、初出は1986年

入間田宣夫 『平泉の政治と仏教』「中尊寺造営にみる清衡の世界戦略」高志書院、2013年a、初出は1997年

入間田宣夫 『平泉の政治と仏教』「義経と秀衡」高志書院、2013年b、初出は2006年

入間田宣夫 『平泉藤原氏と南奥武士団の成立』歴史春秋社、2007年

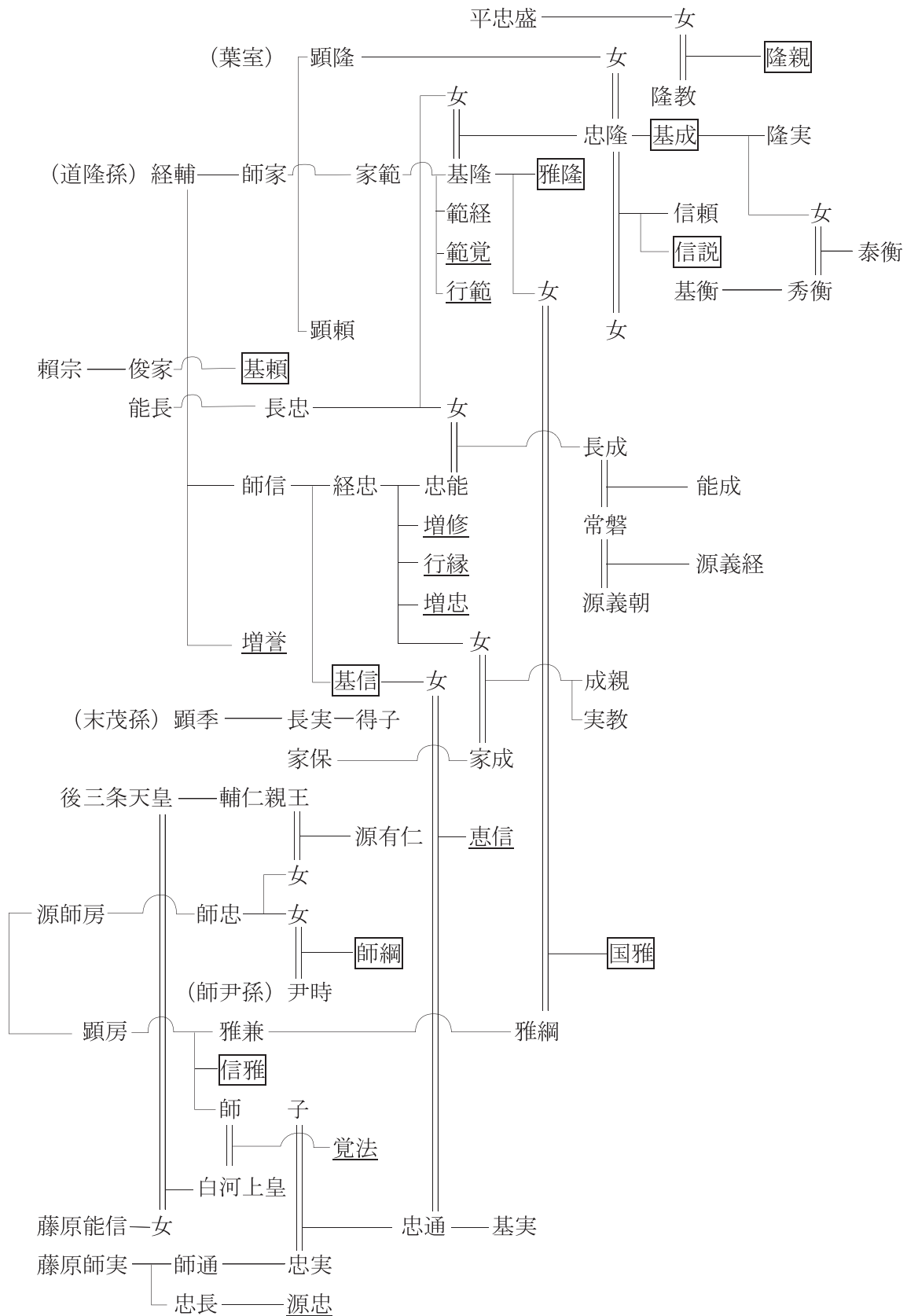
上島享 『日本中世社会の形成と王権』「中世前期の国家と仏教」名古屋大学出版会、2010年、初出は1992年

海老名 尚 「中世前期における国家的仏事の一考察」『寺院史研究』3、1993年

遠藤基郎 「平泉藤原氏と陸奥国司」入間田編『東北中世史の研究』上巻、高志書院、2005年

- 遠藤基郎 『中世王権と王朝儀礼』 「天皇家王権仏事の運営形態」 東京大学出版会、2008年、初出は1994年
- 遠藤基郎 「基衡・為義・忠宗・御室覚法」 2013年年8月東北中世史研究会サマーセミナーでの研究発表、(於) 一関市博物館
- 大石直正 『奥州藤原氏の時代』 「奥州藤原氏の相続形態」 吉川弘文館、2001年、初出は2000年
- 大塚徳郎 『みちのく古代史』 刀水書房、1984年
- 大矢邦宣 『図説 平泉』 河出書房新社、2013年
- 川島茂裕 「藤原清衡の妻たち」 入間田宣夫・本澤慎輔編 『平泉の世界』 高志書院、2002年
- 川島茂裕 「藤原基衡と秀衡の妻たち」 『歴史』 101号、2003年
- 菅野成寛 「平泉無量光院考」 『岩手史学研究』 74号、1991年
- 菅野成寛 「平泉出土の国産・輸入陶磁器と宋版一切経の舶載」 岩手県平泉町文化財調査報告書第38集、1994年
- 栗本徳子 「白河院と仁和寺」 『金沢文庫研究』 286号、1991年
- 菅真城 「院政期における仏事運営法」 広島大学 『史学研究』 315号、1997年
- 斉藤利男 『奥州藤原三代』 山川出版、2011年
- 佐伯智広 「鳥羽院政期王家と皇位継承」 『日本史研究』 598号、2012年
- 佐藤嘉広 「平泉の『都市』計画と園池造営」 藪敏裕編 『平泉文化の国際性と地域性』 汲古書院、2013年
- 白石克 「『日本中世印刷史』の開催にあたって」 『三田評論』 998号、1998年
- 高木豊 『平安時代法華経仏教史研究』 「法華唱題とその展開」 平楽寺書店、1973年a
- 高木豊 『平安時代法華経仏教史研究』 「法華講会の成立と展開」 平楽寺書店、1973年b
- 高橋昌明 『清盛以前 改訂版』 平凡社、2011年
- 龍口恭子 「千日講の基礎的考察」 日本仏教史の研究会編 『日本の社会と仏教』 永田文昌堂、1990年
- 田中塊堂 1953 『日本写経綜覧』 三明社、1953年、思文閣で再版、1974年
- 羽柴直人 「平泉の道路と都市構造の変遷」 入間田・本澤編 『平泉の世界』 高志書院、2002年
- 林屋辰三郎 『中世文化の基調』 「仏師雲慶について」 東京大学出版会、1953年
- 樋口健太郎 2013 「藤原忠実の追善仏事と怨霊」 『日本歴史』 第787号、2013年
- 布谷陽子 「承久の乱後の王家と後鳥羽追善仏事」 羽下徳彦編 『中世の地域と宗教』 吉川弘文館、2005年
- 保立道久 『義経の登場』 日本放送出版協会、2004年
- 誉田慶信 「日本中世仏教のなかの平泉」 『平泉文化研究年報』 第13号、2013年a
- 誉田慶信 「平泉造園思想に見る仏教的要素」 藪敏裕編 『平泉文化の国際性と地域性』 汲古書院、2013年b
- 誉田慶信 「白河院政期の出羽守と『都の武士』」 伊藤清郎編 『最上氏と出羽の歴史』 高志書院、2014年
- 前川佳代 『『苑池都市』平泉』 『平泉文化研究年報』 第8号、2008年
- 元木泰雄 『院政期政治史研究』 「院政期における大国受領」 思文閣出版、1996年、初出は1986年
- 八重樫忠郎 「平泉・毛越寺境内の新知見」 橋口定志編 『中世社会への視角』 高志書院、2013年
- 山本信吉 「中尊寺経」 藤島亥治郎監修 『中尊寺』 河出書房新社、1971年

藤原基衡千部一日経関係人物の系図 『尊卑分脈』による。□は陸奥守。僧名に下線



平泉藤原氏の権力基盤に関する基礎的研究（その1）

七 海 雅 人

はじめに—平泉藤原氏の地域支配をめぐる研究動向—

1 北方史研究の中の平泉藤原氏

平泉藤原氏（奥州藤原氏）の政治権力は、奥羽両国をどのように掌握したのか。きわめて単純で基礎的な問題意識であるが、本稿の課題はこの点にある。柳之御所跡をはじめとする都市・平泉と周辺地域に関する考古学の成果が急速に積み重ねられ、またそれにとまなう文献史料の考察の深まりの中で、この問題についてはすでに多くの議論が提出されており、周知のように長足の進展をとげてきた。

その包括的な最新の研究として、齊藤利男氏による北方史研究からみつめ直した平泉藤原氏論の成果があげられる。提示された論点は多岐にわたるが、ここでは平泉藤原氏の奥羽両国掌握過程に関する概要に絞って紹介したい⁽¹⁾。

すなわち、古代日本の北部地域は、安倍氏・清原氏の勢力範囲であった奥六郡ならびに山北三郡・秋田郡・河辺郡（Ⅰ地域）と、北緯40度以北から津軽海峡をはさみ道南におよぶ地域（Ⅱ地域）の二つに分けることができる。安倍氏・清原氏は、Ⅰ地域を本領にしながらいⅡ地域を管轄し、さらにⅡ地域を介してその北に広がる北海道の文化とも接触・交流していた⁽²⁾。また、その政治的な自立性の高さから、Ⅰ・Ⅱ地域における荘園の成立はみられなかった。平泉藤原氏は、この安倍氏・清原氏の北方支配権を継承・発展した政治権力としてとらえることができる。またその一方で、平泉に本拠を置いた初代・藤原清衡以降、陸奥・出羽両国の押領使という地位にもとづき、南奥羽地域においても勢力を拡大していった。これにより、平泉藤原氏は「奥羽」と「蝦夷」の二つの世界を掌握し、「統一奥羽」世界を形成したとみなせるのであり、その政治権力は、朝廷に対して恭順の姿勢をとりながら、事実上独立した辺境自治政府・辺境地方政権としてまとめることができる。それゆえに、文治5年（1189）奥州合戦を遂行した鎌倉幕府は、この平泉藤原氏の支配体系＝〈「統一奥羽」世界〉を徹底的に解体し、「奥羽の地の完全な日本国への統合の完成」を達成した政治権力として位置づけられるのである。

この齊藤氏の見解をふまえた場合、そうした頼朝の得意は、たとえば『十訓抄』第十・55話にみえる、つぎのエピソードの中にかがえることができるかもしれない。

右大将（源頼朝）、都へ上り給ひけるに、吉水大僧正（慈円）、「なにごとも、思ふばかりはえこそ」など、聞えられたりける返事に、

陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬ／書きつくしてよ壺の石ぶみ（※ /は改行）

とよまれたる、おもしろく、たくみにこそ聞ゆれ、

頼朝が京上を果たした際、慈円が「何事につけても、心に思っているほどは、お伝えすることができず…」と言っていることを聞き、歌をもちいて返信した。その歌の解釈は、「陸奥の岩手、信夫に蝦夷が鳥、言わずに忍ぶもわかりません。壺の石碑にあやかって、すべてを文に、書き尽されよ」というものであった⁽³⁾。北緯40度以北の地域（蝦夷島／齊藤氏が示すⅡ地域）・奥六郡（岩手郡／齊藤氏が示すⅠ地域）・南奥（信夫郡）を網羅し、征夷大將軍坂上田村麻呂ゆかりの「壺の碑」でしめくくる構成には、建長4年（1252）に成立し、鎌倉幕府との関係も取り沙汰されている『十訓抄』編者の周辺の認識も含めて興味深いものがある。

2 武士団研究と平泉藤原氏

以上のように奥羽両国の掌握を進めたとされる平泉藤原氏であるが、それでは当該期における武士としての属性は、どのように理解されるのであろうか。

この点に関する研究については、野口実氏の武士論がある。その議論の中における平泉藤原氏の位置づけは、(1) 秀郷流藤原氏（軍事貴族系）につらなる氏族として自立した地域的軍事権力ではあるが、「武家の棟梁」（「公達へ到る可能性を有する諸大夫上層」）である源平両氏には身分的におよばない、(2) その属性は、陸奥国摂関家領荘園において源義家が保持していた権限を継承した準「京武者系豪族的武士」として位置づけられ、「京武者系豪族的武士」に近い在地性の強い武士ならびに「在地系豪族的武士」らを主従制的支配のもとに組織していた、(3) ただし最終的には、京都王権につながる権威（「京武者」源義経や摂関家と強固な関係をもつ藤原基成）に依存することなしには、その繁栄を保持することはできなかつた、とまとめられている⁽⁴⁾。

また白根靖大氏は、この野口氏の議論をふまえた上で、奥羽両国の地域性・支配構造に配慮する必要（「主従関係の濃淡」）はあるものの、平泉藤原氏は「御館」として奥羽武士団との間に主従関係を構築し（「奥羽武士団にとっての棟梁」）、その「御館一郎従」関係は「鎌倉殿一御家人」関係に対比され得ること、また王朝社会の中における身分については、三代・秀衡が得た官位により「受領コース昇進の諸大夫層」に達したものの、その地位を完全に継承できなかった四代・泰衡にとって、諸大夫層身分である源義経は「意義のある存在になり得た」こと、などを論じた⁽⁵⁾。

この「御館一郎従」関係については、入間田宣夫氏がよりふみこんだ見解を發表している。その概要は、治承・寿永内乱期、平泉藤原氏は奥羽両国の「管領」（武家による軍事的かつ超法規的な統治の意味合いが込められたキーワード）を実現し、「真の意味における政権に相応しい実質」を獲得した、したがってこの段階にいたり、出羽国側の有力武士団からも「御館」と仰がれる存在になった、というものである⁽⁶⁾。白根氏が言及した「主従関係の濃淡」をきわだたせ、内乱期における武家政権成立の達成、という論点を強くうち出したところに注目したい。

ところで、こうした「主従関係の濃淡」については、奥羽両国の地域性・支配構造を念頭におきながら、平泉藤原氏の一族・郎従を網羅的に分析した成果として、はやく岡田清一氏の業績が存在する。それによれば、平泉藤原氏の地域支配・主従関係は、(A) 一族、(B) 平泉在住官人、(C) 北奥の地域領主、(D) 南奥の地域領主に区分される。そして、(C) は藤原氏にとって譜代の家臣である「家人」型、(D) は藤原氏に対して去就向背の権利をもつ「家礼」型であり、この内容から藤原氏の権力は南奥に対して極めて脆弱であった、という結論を提示した⁽⁷⁾。奥羽両国に展開した武士団は、その拠点とした地域のあり方を背景に平泉藤原氏とは個別・局所的に主従関係を取り結んだのであり、その内実は一律・横並びのものとしてみなせるわけではない、という論点には、多いに学ぶべきものがある。

また関連する議論として、奥羽の地域領主の拠点は、水陸交通の要衝に位置する傾向が多分にみられ、平泉藤原氏は、この居館・交通網に依存し、軸とすることによって領域支配を進めていった、と述べる岡陽一郎氏の見解も、参照しなければならないだろう⁽⁸⁾。

3 課題の設定

以上、平泉藤原氏の奥羽両国掌握のあり方について、斉藤利男氏の最新の包括的な理解を紹介し、その内実に関して、おもに武士論・主従関係の面からどのような議論がなされているのかを簡単に提示した。

こうした研究成果を摂取することにより、本稿ではあらためて、平安時代末期における奥羽両国の武

士団の動向を検討し、それが平泉藤原氏の権力基盤としてどのようにはたらいたのか、また鎌倉幕府による奥羽両国の掌握過程において、それはどのように位置づけることができるのか、という課題を設定したい。この課題にとりくむことにより、平泉藤原氏の奥羽両国掌握の様相の一端を明示し、それが鎌倉幕府によってどのように切り崩されていくのかという問題に、いくばくかでも迫ることができればと思う。要は、武士団・在地領主研究の視点から、齊藤氏が提示する〈「統一奥羽」世界〉のなかみについて、調べてみたいということである。

第一章 平泉藤原氏の一族・姻戚・主従編制一個別事例の検出

まず基礎作業として、平泉藤原氏の政治権力の基盤となり得た人間関係について、これまでに確認されている事例を整理し、岡田清一氏にならって、その内容を分類してみたい。以下、①平泉藤原氏一族の動向、②初代・清衡とその子息の世代に認められる、おもに南奥・北関東武士団との姻戚関係、③『吾妻鏡』の文治5年奥州合戦・大河兼任の乱関係記事や出土文字史料などに登場する平泉藤原氏の郎従、を検索し紹介する。

1 一族の配置から

(1) 比爪(樋爪)氏

平泉藤原氏の一族配置について、本稿では三つの事例に着目する。一つめは、比爪館跡(岩手県紫波郡紫波町)の考古学的知見が蓄積され、研究が進んでいる比爪氏である。『吾妻鏡』・『尊卑分脈』(新訂増補国史大系)によれば、平泉藤原氏初代・清衡の子息の一人である清綱の子息・俊衡が、「樋(火)爪」を名のっている。また『尊卑分脈』では、俊衡に「秀衡弟」の注記も付しており、俊衡が二代・基衡の猶子となったことを示唆させる(もしくは、基衡子息が清綱の子息となったか)。

考古学の成果によると、比爪館跡の遺物・遺構ともに柳之御所跡と類似し、また鎌倉時代以降の遺物も多く確認されるところに特徴があるという⁽⁹⁾。その上で、遺物の中にみられる「口縁部3段などで手づくねかわらけ」に着目した羽柴直人氏は、同じような特徴・類似点をもつかかわらけが北奥の矢立廃寺と浪岡城内館において検出されることから、奥大道によって結ばれた比内・津軽地域の「実質支配」は比爪氏によって担われた可能性を指摘し、その前提として平泉に拠点を据えた惣領家の戦略として、奥六郡の北部(岩手郡・紫波郡)の管掌は比爪氏に委ねられたことを推測した。また、そうした状況をもって、比爪氏を「平泉勢力圏内でも平泉と並立する求心力と独自性を有した地域権力」と評価している⁽¹⁰⁾。

この比爪氏の評価については、さらに議論を重ねる必要があるだろうが⁽¹¹⁾、三代・秀衡段階における平泉藤原氏の有力庶家は比爪氏のみであり、しかも同家は奥州合戦において惣領家とは別行動をとり、結果的に俊衡は老齡かつ法華經の持經者であったことを理由に、頼朝から「本所」の安堵を獲得したことは注目されるだろう(『吾妻鏡』文治5年9月15日・18日・28日条)。

このように、平泉藤原氏一族の構成・関係・役割については、より具体的に検討すべき段階に入ってきたといえ、河内源氏・伊勢平氏一族の展開のあり方などと対比しながら、平泉藤原氏の政治権力の中における一族各々の位置づけをさらに探っていく必要がある⁽¹²⁾。

(2) 本吉冠者隆衡

二つめは、秀衡の子息の一人・本吉冠者隆(高)衡である。その名のりに注目すれば、保元の乱(1156年)を機に摂関家領から後院領へ編入された本吉庄に拠点があったことは間違いない。また、源頼朝に鎌部戸立の駿馬を贈与するなど、鎌倉幕府に対する平泉藤原氏の渉外的な役割を担っていたことも知られている(この関係からか、奥州合戦後、隆衡は降人として相模国配流の処遇をうけている)。こうし

た馬の供給については、気仙・磐井地域に拠点をもつ金氏（後述）の物流ルートへの関与・海上権益と組み合わせることによって実現するものであったと考えられる⁽¹³⁾。

（3）藤原清綱

すでに紹介した『尊卑分脈』に比爪俊衡らの父としてみえる、清衡の子息の一人である。この人物については、同じく『尊卑分脈』に「亘十郎」の注記があることに注目したい。

すなわちこれは、藤原経清が拠点とした「亘理郡」を名字の地とするものであり、平泉藤原氏の時代にあっても、同郡はその直轄的な拠点として機能したことを連想させる。その背景については、阿武隈川河口部付近に逢隈湊を擁した交通の要衝という、古来より亘理郡がもつ地の利を指摘することができるだろう。奥州合戦における鎌倉幕府「東海道大將軍」の一方・千葉常胤が、戦後の勲功賞として、同郡から行方郡にいたる地頭職（ならびに好嶋庄預所職）に補任されたと考えられる理由についても、この点が焦点になったためと考えられる。常胤は、平泉藤原氏の南奥沿岸部の最大拠点一帯を制圧し、これを頼朝に所望したとみなすことができるだろう⁽¹⁴⁾。

さらに『尊卑分脈』には、清綱女子が信夫佐藤元治に嫁し、継信・忠信兄弟の母になったことを記す。信夫庄（郡）もまた阿武隈川中流域にあつて、奥大道と結節する要衝の地である。したがって、この婚姻関係は、平泉藤原氏勢力による阿武隈川水系の掌握を象徴しているようにもみえて興味深い⁽¹⁵⁾。

2 姻戚関係から

（4）常陸大掾氏・（5）佐竹氏

藤原清衡後期の嫡妻「北方平氏」について、川島茂裕氏は「御曹司」基衡の母であり、その出身を常陸大掾（吉田）清幹の女子にもとめている。その上で、この女性は清衡没後に京上し佐竹義業に嫁し、昌義をもうけた可能性があるという。また系図史料の分析から、義業の子息昌義の妻もまた清衡の女子であり、隆義をもうけたことを指摘している⁽¹⁶⁾。

このように、平泉藤原氏と佐竹氏との間には、はやくから姻戚関係が形成されていたらしい。それが治承・寿永内乱期における佐竹氏一族の動向にも反映されたとおぼしく、常陸金砂合戦（1180年）の後、鎌倉幕府軍との決戦におよぶも敗北した隆義は、陸奥国へと逃れている。治承・寿永内乱期、姻戚関係を背景とする平泉藤原氏の支援を受け、佐竹氏は常陸国内で軍事活動を展開したのである⁽¹⁷⁾。

（6）石川氏

『尊卑分脈』によれば、摂津国柳津庄を本拠とした大和源氏の一族源有光が、南奥石川郡（庄）へ下向し石川氏が成立する。「北酒出伝四郎家蔵源氏系図」（秋田県公文書館佐竹文庫、『石川町史』第3巻）は、有光と藤原清衡女子との間に元（基）光が生まれたこと、元光と上記（3）藤原清綱女子との間に光義が生まれたことを記す。これについて入間田宣夫氏は、先の佐竹氏などとあわせて、南奥・北関東の豪族的武士団と藤原清衡との間には、同盟の関係が形成されていたと評価している⁽¹⁸⁾。

その上で、石川氏の場合については、この姻戚関係を契機としながら、一族の中に平泉藤原氏の近習的な存在となる者があらわれてくると考えられる。大石直正氏は、奥州合戦で滅亡したとみられる元光子息石川河尻秀康の存在を指摘し、彼を秀衡・泰衡側についた人物とみなした。その背景には、所領の開発と一族の分出をめぐる、石川氏一族自体の間に矛盾・対立関係が生じていたことを推測している⁽¹⁹⁾。また、柳之御所跡から検出された折敷墨書「人々給絹日記」に記載された「石川三郎殿」・「石川太郎殿」も、この南奥石川氏の一族に比定されている⁽²⁰⁾。

(7) 岩城氏

平泉藤原氏の出身とされる女性「徳尼」が、白水阿弥陀堂を建てたという伝承にもとづき、岩城氏と平泉藤原氏との間には姻戚関係があったと考えられている⁽²¹⁾。これもまた、入間田氏が指摘する同盟的な関係としてとらえることができるだろう。

(8) 佐々木秀義

藤原秀衡の妻は、源為義・義朝の家人であった佐々木秀義の「姨母」であった。この関係から秀義は秀衡を訪問し、為義・義朝の許へ鷲羽・金・馬を送進する役割を担っていたことが指摘されている⁽²²⁾。

3 郎従・被官の検出・その1—奥州合戦・大河兼任の乱関係史料から—**(9) 信夫佐藤氏**

信夫郡(庄)を拠点とした信夫佐藤氏は、平泉藤原氏と同じ秀郷流藤原氏の流れをくむ氏族であり、初代・清衡以来の郎従の家、平泉藤原氏とは「特別に親密な関係」として理解されている⁽²³⁾。信夫郡を管掌する佐藤季春は、基衡にとって「代々伝はれる後見なるうへ乳母子」であり、陸奥守藤原師綱との衝突に際して、季春と基衡との強固な結びつきを描くエピソードは、よく知られているとおりである(『十訓抄』第十・74話、『古事談』第四・25話〈新日本古典文学大系〉)。また、平泉藤原氏惣領の筆頭従者である「後見」という立場や乳母を提供するだけでなく、さきにもたように庶子家との間に婚姻関係も結んでいたことは注目されるだろう。

奥州合戦に際しては、「泰衡郎従」信夫佐藤庄司(湯庄司)元治が、叔父河辺高経・伊賀良目高重などを率い、地元である石那坂に布陣してよく戦った。その結果、囚人となるものの、頼朝より赦免されて本所である信夫庄に帰還するにいたる(『吾妻鏡』文治5年8月8日、10月2日条)。さらに信夫佐藤氏は、陸奥国御家人にも列せられることになった⁽²⁴⁾。

また、伊達郡阿津賀志山の陣地においては、四代・泰衡の庶兄(異母兄)・国衡の「近臣郎等」である「佐藤三秀員父子」が所見する(『吾妻鏡』文治5年8月9日条)。この点について川島茂裕氏は、信夫庄に隣接する阿津賀志山陣地の「大將軍」が国衡であることから、「佐藤三秀員父子」もその一族とみなすことができる信夫佐藤氏が国衡の後見的存在であったとし、その背景にはさらに国衡の母が信夫佐藤氏の出身であった可能性を指摘している⁽²⁵⁾。

(10) 金剛別当秀綱・子息下須房太郎秀方

この父子は、上記阿津賀志山陣地において、藤原国衡軍の筆頭として登場する。激戦の末に討死するが、戦後、その郎等たちは恩赦によって私宅を安堵された(『吾妻鏡』建久元年1月24日条、ただし大河兼任の乱の発生にともない、その安堵の方針は変更され、あらためて追放処分となった)。なお、秀綱・秀方の名前に注目すれば、上記国衡近臣郎等「佐藤三秀員父子」との一族関係を想定できるかもしれない(または、秀衡の偏諱という共通項で括れるか)。

(11) 伴藤八

泰衡の郎従にして、「六郡第一強力者」として登場する。阿津賀志山合戦において討死した(『吾妻鏡』文治5年8月9日条)。

(12) 金十郎・(13) 勾当八・(14) 赤田次郎

この三名の泰衡郎従は、刈田郡の平泉方陣地に拠った「大將軍」として登場する。刈田郡を拠点とする三沢安藤四郎の兵略により敗北し、金十郎は逃亡、勾当八・赤田次郎は捕虜となった(『吾妻鏡』文治5年8月10日条)。

金氏は気仙郡司の系譜をひき、安倍氏の時代から気仙・磐井地域を拠点とした陸奥国在来の武士団で

ある。前九年合戦期、安倍氏との間に姻戚関係を結んだ磐井金氏は安倍氏方に、気仙金氏は国司・鎮守府將軍方に分かれて対立するにいたったという⁽²⁶⁾。平泉藤原氏との関係についても、はやく清衡の時代から、その家政を担当する者の存在が指摘されている⁽²⁷⁾。基衡時代に関しては、上記陸奥守藤原師綱と基衡との衝突のエピソードの中で、国司方の人物として佐藤季春を処刑した「ケセンノ弥太郎」が登場し、彼が使用した刀の所有者とも解釈できる「昆次郎大夫」という名も所見する（『古事談』巻第四）。したがって金氏一族は、平泉・多賀国府双方に出仕していたといえるだろう。また、気仙郡におけるその動向は戦国時代までたどることができ、奥州合戦後も気仙郡地頭葛西氏の「案内者」のような存在として、在地社会の活力を支え続けたと想定される⁽²⁸⁾。

(15) 熊野別当・(16) 名取郡司

奥大道沿いに北上するルートで、つぎにあらわれる平泉藤原氏の関係者は、『吾妻鏡』に「泰衡一方後見」として登場する熊野別当である。この人物については、平泉の熊野別当とする考えもあるが、奥州合戦後、頼朝から名取郡司とセットで赦免されていることにより（同時に上記信夫佐藤元治も赦免されている）、名取郡北方・南方の境界点に位置する名取熊野別当に比定したいと思う⁽²⁹⁾。

鎌倉幕府軍の進撃に対して、平泉勢は名取川・広瀬川に大縄を引き、柵を敷設して迎撃体制を整えているが（『吾妻鏡』文治5年8月7日条）、その陣地に拠ったのが、この熊野別当と名取郡司だったのでないだろうか。なお、この布陣と泰衡の国分原陣地（宮城県仙台市宮城野原）との配置関係については、信夫佐藤氏惣領の石那坂陣地と国衡の阿津賀志山陣地との配置関係にも対比できそうであり、注目したい。

(17) 若九郎大夫・同次郎・(18) 余平六

「泰衡郎従」若九郎大夫と余兵六は、「大將軍」として栗原郡三迫の要害に拠った。「若」の名字については、その音通により、和賀郡を名字の地とする領主に比定されている⁽³⁰⁾。若九郎大夫と同次郎との具体的な関係は不明だが、『吾妻鏡』によれば若次郎もまた、栗原郡に拠った平泉勢の「為宗之者」の一人であった（『吾妻鏡』文治5年7月29日・8月21日条）。

なお、栗原市花山寺跡に関する考古学的知見より、栗原郡は平泉藤原氏の直轄支配地の南端と指摘されている⁽³¹⁾。『吾妻鏡』における幕府軍の行軍記事を見ると、栗原郡津久毛橋において、和歌を詠む梶原景高の姿が描かれているが、これは白河の関を通過する際に同じく和歌を詠んだ梶原景季との対比を演出するものであろう。したがって、ここからも、荘園制施行の地の南限にあたる津久毛橋の近辺が、陸奥国内部における境界地点として認識されていたことがうかがわれる⁽³²⁾。

また、この点に関連して平泉勢の「大將軍」の布陣に着目すると、阿津賀志山の国衡、それに隣接する刈田郡の金氏ら、そして栗原郡三迫の若氏らと、陸奥国内のいわゆる境界的な地点に配置されていることがわかる。おそらくこれは、平泉藤原氏の陸奥国掌握に際しての領域認識に対応するものであり、いわゆる「統一奥羽」の内実を探る際の、有効な手懸かりになるのではないだろうか。

(19) 田河行文・(20) 秋田致文

つづいて、出羽国側の領主をみる。田河氏は出羽国南端田川郡を、秋田氏は秋田郡をそれぞれ名字の地とする「泰衡郎従」である。ともに幕府北陸道軍と対峙し、梟首された（『吾妻鏡』文治5年8月13日条）。

(21) 由利惟平

出羽国由利郡を名字の地とする「泰衡郎従」である。幕府「北陸道大將軍」の一方・宇佐美実政に捕らえられた後、頼朝と対面におよび、平治の乱時の義朝滅亡との対比をもって泰衡滅亡のことを弁護した。これにより畠山重忠に預けられ、頼朝の「芳情」によって出羽国御家人に列せられる⁽³³⁾。

(22) あかうそ三郎

出羽国赤宇曾郷（秋田県由利本庄市）を名字の地とする領主か。多賀国府の東北方に位置する黒川郡・大谷保境の物見岡に布陣した、平泉方の指揮官と考えられる⁽³⁴⁾。

(23) 大河兼任・(24) 新田三郎入道・(25) 二藤次忠季

奥州合戦後、反乱を起こした「泰衡郎従」大河兼任と、その兄弟である新田三郎入道・二藤次忠季も、出羽国に本拠地があったと考えられる。白根靖大氏は、兼任の本拠地について八郎潟東岸部を候補にあげている⁽³⁵⁾。二藤次忠季は、兼任の反乱時点で国御家人に登録されているから（『吾妻鏡』建久元年1月7日条）、陸奥国住人の御家人登録業務を担った葛西清重に属し、帰順したものと考えられる。

(26) 河田次郎

ふたたび陸奥国の側に転じ北奥方面をのぞむと、比内郡において泰衡を滅ぼした人物として、平泉藤原氏の「数代郎従」河田次郎がいる（『吾妻鏡』文治5年9月3日条）。なお、泰衡の逃亡ルートについて『吾妻鏡』は、蝦夷島を目指し「糟部郡」（糠部）へ向ったと記述する。この内容を活かすならば、北海道勇払郡厚真町の宇隆1遺跡から出土したといわれる常滑産陶器（1959年発見、常滑産第2期〈1151～1174年〉）とみなすことができるという）との繋がりが視野に入ってくるだろう。外浜だけでなく、下北半島や八戸方面から北海道南部太平洋側にいたる交通ルートについても、平泉藤原氏の勢力により開かれていた様相が推測できるようになるのではないかと期待される。

(27) 豊前介清原実俊・(28) 橘藤五実昌・(29) 中原基兼・(30) 散位道俊・(31) 小槻良俊

最後に、平泉で活動していた官人を提示する。(27)(28)の兄弟は、上記「人々給絹日記」において、それぞれ「橘藤四郎」・「橘□（藤カ）五」として登場する人物であり、名字の地は和賀郡橘郷に比定される。二人は、戦火により焼失した「奥州羽州両国省帳田文已下文書」の内容を復元してみせ、頼朝から幕府への出仕を命じられた。実際、実俊は幕府公事奉行人として所見する（『吾妻鏡』文治5年9月14日・建久2年1月15日条など）。そのほか秀衡の許には(29)もいた。後白河上皇の近臣であったが、安元三年（1173）の政変（「鹿ヶ谷事件」）に際して平清盛によって解官され、陸奥国へ配流されていた人物である（『玉葉』文治3年9月29日条）。また、はやく清衡の時代にも、(27)(28)の平泉在住が確認される（『三外往生記』〈青森県史』資料編古代1〉、『中右記』天永2年1月21日条）。

平泉藤原氏の政治権力は、こうした京下りの官人を抱えることによって機動し得たのであった。そしてこの点もまた、鎌倉幕府と類似するところとして指摘されているとおりで⁽³⁶⁾。

4 郎従・被官の検出・その2—出土文字史料から—**(32) 瀬川次郎**

上記「人々給絹日記」に所見する。この折敷墨書に列記された人名の中で、「殿」が付されていないグループに属することから、この「日記」を書きつけた執筆者と傍輩（上記(27)～(31)のような文筆に携わる者＝「文士」か）の関係にある人物と推定される。名字の地については、稗貫郡瀬川があげられる⁽³⁷⁾。

(33) 海道四郎

上記「人々給絹日記」に所見する。清原真衡養子海道成衡の子孫一族の可能性が指摘されている⁽³⁸⁾。

(34) 石埼次郎

上記「人々給絹日記」に所見する。名字の地について先行研究は、福島県南部太平洋沿岸の岩崎郡と、胆沢郡石埼（「中尊寺光堂文書」建武3年11月3日、実幸讓状に「中尊寺金色堂御讀經田五段、伊澤郡石埼村内在之」とみえる）とに分かれる。今のところ、私は後者の説をとりたいと考えている。上記(27)(28)(32)とは異なり、人名に「殿」が付されていることから、この「日記」の執筆者とは異なるグルー

プに属した人物とみなしたい。

(35) 大夫小大夫・大夫四郎

上記「人々給絹日記」に所見する。折敷墨書中の人名配置をみると、この二名については、順番に人名を書き加えていった結果書ききれなくなった、もしくは所定の人名を一端書き終えた後、さらに追加の人名を書き加えなければならない事態が生じたため、余白部分に無理に書きこまれたものであることがわかる。しかも最後に書きつけられた「大夫四郎殿」は、ふたたび墨で塗抹されている。このような記載状況から、この二名の素性については、様々な見解が提示されてきた。

現時点では、『九条家旧蔵平治物語』下巻の「秀衡が郎等信夫小太夫といふ者」に着目した川島茂裕氏の指摘を受けて信夫佐藤氏一族と理解する入間田宣夫説⁽³⁹⁾と、「祢宜大夫すなわち神官で、柳之御所内で大夫殿といえば誰であるかすぐにわかるような神社の祢宜」であり、平泉の鎮守のうちの「中央惣社の祢宜などがその候補だろう」とする大石直正説⁽⁴⁰⁾が並立している状況といえるだろう。

これに対して本稿は、第三の説にこだわるものではないが、入間田氏がかつて採用していた、大夫が五位官人の通称であり、かつ国衙在庁官人の上層に例があることから、「特別の儀式にさいして、多賀国府から招かれた客人であったか」と提起した点について⁽⁴¹⁾、今一度ふり返ってみたい。11～12世紀代の多賀城政庁周辺城内範囲については、五万崎地区に最重要の国衙中枢施設が置かれ、また大畑地区には在庁官人の居館とみられる建物群が並び、「丘陵上に政庁を中核に国衙機能を集約した官庁街（＝新たな都市的空間）」が形成されたと指摘されている⁽⁴²⁾。

この理解をふまえた上で、『今昔物語集』巻第二十六「陸奥の国の府官大夫の介の子の語第五」（岩波文庫）の一節「家は館より百町許去てぞ有ける」をみるならば、一それほど大きく距離は離れていないけれども一、陸奥介の本拠地八幡庄の範囲内に所在する仙台市宮城野区中野高柳遺跡から、八重樫忠郎氏が指摘するいわゆる「平泉セット」と、平泉町志羅山遺跡から出土したものと類似し、平泉藤原氏が管轄する工房で製作された可能性が高い鉄地銅象嵌轡が出土していることが注目される（『宮城県文化財調査報告書第201集 中野高柳遺跡Ⅲ』）。

ここから12世紀の在庁官人陸奥介は、平泉藤原氏と親密な関係を築くにいたり、客人というよりは、その一族の中に藤原氏の近習・家子のような存在となるものがいた、と解釈し直す余地もでてくるのではないだろうか。一つの可能性として記しておきたい。

(36) 「タラウタユ」（太郎大夫か）

柳之御所遺跡堀内部地区の南端、外堀（21SD2）に堀り込まれた土壙（69SX3）から、橋脚と共伴するような形で、「タラウタユ二丈」と記載された木札木簡片が出土している（第69次調査）。これについて岡陽一郎氏は、鎌倉の若宮大路側溝から出土した木簡（本資料墨書銘と類似の銘文を記す。御家人の作事負担担当区を指し示す木札と考えられている）に着目し、本資料もまた普請・作事に関する担当区域を示す木札ではないかと推測している⁽⁴³⁾。

仮名+大夫の人名について、本稿ではすでに「昆次郎大夫」・(17)「若九郎大夫」の事例を紹介した。これらの例にならうならば、この「太郎大夫」もまた平泉藤原氏の郎従であり、郡名を名字の地とするクラスの領主一族として想定できるかもしれない。

5 郎従・被官の検出・その3—考古学の成果から—

(37) 陸奥介

上記中野高柳遺跡が含まれる八幡庄の領主である。今回、(35)と関連させる試案を出してみたが、それが成り立たない場合でも、前述した考古学の成果によって平泉藤原氏に従っていたことを推測させ

る。

なお、この陸奥介についてもまた、奥州合戦に際して平泉勢から離れた一族がいたとみられ、鎌倉幕府御家人としての存続が認められる⁽⁴⁴⁾。

(38) 宮城県伊具郡丸森町大古町遺跡の経営主体

阿武隈川に近接するこの遺跡からは、柳之御所遺跡から出土した遺物・遺構と類似する手づくねかわらけ・白磁四耳壺・青磁椀・常滑甕や木組み井戸枠（縦板組隅柱横棧どめ）などが発見されており（ただし、手づくねかわらけは非常に退化した在地系のものだという）、この遺跡の経営主体が、上記（37）と同様、平泉藤原氏と親密な関係にあったことをうかがわせる⁽⁴⁵⁾。また羽柴直人氏は、こうした発掘成果や地理的な立地環境の類似性をもって、「[阿武隈の柳之御所遺跡]といった景観を呈していたと想像される」と評価した⁽⁴⁶⁾。

同じ伊具郡内には、秀衡の妻によって建立されたという伝承をもつ宮城県角田市の高蔵寺阿弥陀堂も存在する⁽⁴⁷⁾。さきに亙理郡と信夫郡を例に阿武隈川沿いのルートを強調したが、大古町遺跡の存在もまた、このルートの重要性を裏付けるものとして位置づけることができるだろう。

なお、この遺跡については、比爪館と同じように、平泉藤原氏の滅亡後も存続していることが注目される。この点についても様々な考え方があるだろうが、この遺跡の経営主体は、先に触れた名取熊野別当・名取郡司や金氏のように、奥州合戦後も新たに補任された伊具郡地頭の「案内者」のような立場につき、一定の活動を継続することができたのではないだろうか。また、陸奥留守職伊沢家景の執事となった国府津塩竈の領主・佐藤氏や、柴田郡の領主・芝田氏なども（『奥州余目記録』『仙台市史』資料編1）、『吾妻鏡』正治2年8月21日・10月13日条）、類例として参考になるだろう。

以上、平泉藤原氏の政治権力を支えた人間関係を抽出し、その紹介をこころみた。陸奥国内部の地域性に関する論点や、出羽国在来の平泉藤原氏郎従が、やはり奥州合戦・大河兼任の乱の局面でしかみられないこと、そして平泉藤原氏の滅亡後も、国御家人や「案内者」のような立場で一定の勢力が存続し得たこと、などについて提示できたかと思う。

ただし、考古学の成果については勉強不足であり、いわゆる「平泉セット」などが検出される遺跡の経営主体については、先行研究に学びながらさらに考察を進めていく必要がある。

【注】

- (1) 齊藤利男「都市衣川・平泉と北方世界」（入間田宣夫編『平泉・衣川と京・福原』高志書院、2007年所収）、同「安倍・清原・奥州藤原氏と北の辺境」（東北学院大学東北文化研究所編『古代中世の蝦夷世界』高志書院、2011年所収）、同『奥州藤原三代』（山川出版社、2011年）。
- (2) これに対し樋口知志氏は、安倍氏について「奥六郡の北・東方に接する地に住むエゾと個別に接触することはあっても、基本的に自らの管郡より北の地に対して直接的な支配力を行使することはなかったとみられる」と述べ、意見を異にする（同「安倍氏の時代」〈同『前九年・後三年合戦と奥州藤原氏』高志書院、2011年所収、初出1997年））。
- (3) 浅見和彦校注・訳『十訓抄』（新日本古典文学大系51）（小学館、1997年）445頁。慈円の歌集『拾玉集』におさめられ、『新古今和歌集』巻第十八雑歌にも入集。
- (4) 野口実「豪族的武士団の成立」（元木泰雄編『院政の展開と内乱』〈日本の時代史7〉吉川弘文館、2002年所収）。
- (5) 白根靖大「本吉冠者・藤原隆衡と大河兼任の乱」（羽下徳彦編『中世の地域と宗教』吉川弘文館、2005年所収）。
- (6) 入間田宣夫「御館は秀郷將軍嫡流の正統なり」（同『平泉の政治と仏教』高志書院、2013年所収、初出2009年）。
- (7) 岡田清一「奥州藤原氏の奥羽支配」（同『鎌倉幕府と東国』続群書類従完成会、2006年所収、初出1995・2004年）。
- (8) 岡陽一郎「平泉藤原氏と交通」（入間田宣夫編『兵たちの生活文化』〈兵たちの時代Ⅱ〉高志書院、2010年所収）。この岡氏の考えは、越後国城氏の地域支配のあり方を論じた高橋一樹氏の研究成果（同「城氏の権力構造と越後・南

奥羽」〈柳原敏昭・飯村均編『御館の時代』高志書院、2007年所収）を参照し提示された。

- (9) 八重樫忠郎「平泉藤原氏の支配領域」（入間田宣夫・本澤慎輔編『平泉の世界』高志書院、2002年所収）。
- (10) 羽柴直人「東日本初期武家政権の考古学的研究」（博士（文学）総合研究大学院大学・学位論文、2011年）289～295頁。
- (11) 第14回平泉文化フォーラムにおいて本稿の内容を報告した際（2014年2月2日、一関文化センター）、八木光則氏から、比爪館跡における四面廂建物は柳之御所遺跡堀内部地区のそれと比較した場合、小規模であることは歴然であり、したがって比爪氏を平泉藤原氏惣領と並立し得る独自の勢力とみなすことはできない、というご指摘をうけた（同「兵」安倍・清原氏）〈池上悟先生還暦記念会編『芙蓉峰の考古学』六一書房、2010年所収）参照。この論文の所在については、八木氏ご自身から教えていただいた。考古学の成果の摂取については、不十分さを痛感している。これまでの研究成果の蓄積について、あらためて学んでいきたい。
- (12) 柳之御所遺跡の井戸跡から検出された折敷墨書「人々給絹日記」には、藤原国衡に比定される「信寿太郎殿」、泰衡に比定される「小次郎殿」のつぎに、「四郎太郎殿」という人物が記載されている。「四郎の太郎」であるから、「次郎」の仮名をもつ秀衡にとっては甥にあたる人物であろうか。もしくは従兄弟にあたるか。国衡・泰衡とならぶ平泉藤原氏の一族として注目される。なお前掲注(7)岡田論文は、この人物を比爪俊衡の子息の一人とするが、俊衡の仮名は「太郎」であるから、再考の余地があるように思われる。
- (13) 前掲注（5）白根論文、菅野文夫「藤原隆衡と本吉荘」（『平泉文化研究年報』11、2011年）。
- (14) 七海雅人「平泉藤原氏・奥羽の武士団と中世武家政権論」（入間田宣夫編『兵たちの登場』〈兵たちの時代I〉高志書院、2010年所収）。
- (15) JR常磐線移設工事ともなう宮城県亘理郡山元町坂元地区の「熊の作遺跡」発掘調査によって、「信夫郡安岐里」の四人の名前を記した701年から717年の間に比定できる木簡が出土した（宮城県教育庁文化財保護課作成パンフレット「熊の作遺跡出土「木簡」について」2013年、山元町歴史民俗資料館において入手）。亘理郡の製鉄関連の作業に信夫郡の人間が動員されたことを示す史料として解釈されるとのことだが、8世紀代における阿武隈川ルート沿いの人間の移動・交流が認められたことは興味深い。平泉藤原氏は、こうした移動・交流の伝統を基盤にとりこむことにより、南奥方面への足がかりを築くことができたのではないかと考えてみたい。
- (16) 川島茂裕「藤原清衡の妻たち」（前掲注（9）入間田・本澤編著書所収）。この川島氏の見解に対し、樋口知志氏は「北方平氏」は「小館」惟常の母であり、海道平氏出身の女性とする説を提示している（同「藤原清衡論」〈前掲注（2）同著書所収、初出2008年）。
- (17) 高橋修「内海世界をめぐる武士勢力の連携と競合」（茨城県立歴史館編『中世東国の内海世界』高志書院、2007年所収）、宮内教男「金砂合戦と常陸佐竹氏」（高橋修編『実像の中世武士団』高志書院、2010年所収）。
- (18) 入間田宣夫『平泉藤原氏と南奥武士団の成立』歴史春秋出版、2007年。なお『尊卑分脈』によれば、石川有光は佐竹義業女子とも婚姻関係を持ち、光家をもうけている。平泉藤原氏・常陸佐竹氏双方との間に姻戚関係を形成する点に、南奥・北関東境目の領主としての属性がうかがえる（前掲注（14）七海論文）。
- (19) 大石直正「治承・寿永内乱期南奥の政治的情勢」（同『奥州藤原氏の時代』吉川弘文館、2001年所収、初出1980年）。
- (20) 前掲注（7）岡田論文、小豆畑毅「奥州藤原氏と石川氏」（『石川史談』12、1999年）、大石直正「人々給絹日記」を読み直す」（前掲注（8）入間田編著書所収）、入間田宣夫「人々給絹日記」を読み解く」（前掲注（6）同著書所収）、前掲注(14)七海論文など。この折敷の底板（杉のへぎ板）の出土状況については、三浦謙一「柳之御所跡出土の墨書折敷」（平泉文化研究会編『奥州藤原氏と柳之御所跡』吉川弘文館、1992年所収、初出1991年）参照。
- (21) 前掲注（16）樋口論文。
- (22) 『吾妻鏡』治承4年8月9日条。西岡虎之助「佐々木荘と宇多源氏との関係」（同『荘園史の研究』下巻一、岩波書店、1956年所収、初出1931年）、野口実『中世東国武士団の研究』（高科書店、1994年）。なお、前掲注(11)第14回平泉文化フォーラムにおける報告終了後、前川佳代氏より、この秀義の「姨母」＝秀衡妻とする『吾妻鏡』の記事では人物関係の年代に齟齬が生じる、よって秀衡妻ではなく基衡妻（『吾妻鏡』が記す安倍宗任女子）の錯誤の可能性がある、というご教示を受けた。また川島茂裕「藤原基衡と秀衡の妻たち」（『歴史』101、2003年）も、佐々木秀義の母を安倍宗任の女子に比定している。平泉藤原氏と河内源氏との媒介、畿内方面との連絡ルートを示唆する重要な論点である。考察を深めていきたい。
- (23) 入間田宣夫「信夫佐藤氏論」（前掲注（6）同著書所収、初出2007年）。
- (24) 七海雅人「鎌倉幕府と奥州」（柳原敏昭・飯村均編『鎌倉・室町時代の奥州』高志書院、2002年所収）、同「鎌倉御家人の入部と在地住人」（安達宏昭・河西晃祐編『講座東北の歴史』第1巻、清文堂、2012年所収）。
- (25) 前掲注（22）川島論文。ただし入間田宣夫氏は、この川島氏の見解に対しては疑問があるとする（前掲注（23）論文）。

- (26) 遠藤祐太郎「金氏との姻戚関係からみた奥六郡安倍氏の擡頭過程の研究」(『法政史学』71、2009年)。
- (27) 菅野文夫「気仙郡金氏小論」(『岩手大学教育学部研究年報』54-3、1995年)。菅野氏が着目した「中尊寺文書」天治3年(1126)3月25日、中尊寺経蔵別当職補任状案(※なお、天治3年は1月29日に大治元年に改元)には、「金清廉」の他に「坂上季隆」・「俊慶」の二名も署名をおこなっている。なお、陸奥国在住の坂上氏については、秀郷流藤原千清・正頼父子の養子となった坂上頼遠の子息が平泉藤原氏の祖・経清であったという系譜復元が提示されている(湖原智幸「平安中後期の陸奥北部支配と安倍氏」〈同『平安期東北支配の研究』塙書房、2013年所収)。
- (28) 七海雅人「陸前高田市の中世史」(『陸前高田市文化財等保存活用計画策定調査委員会報告書(調査部会部門)』2014年掲載予定)。また菅野成寛氏から、菅江真澄『月の出羽路』の記載内容や、明治時代の出土例より、仁安3年(1168)・元久3年(1206)の紀年銘と「金氏」の銘文をもつ2点の銅製経筒(秋田県仙北郡美郷町:『青森県史』資料編古代2、577頁)が認められる、というご教示をうけた。12世紀後半以降、奥羽山脈を越えて、山本郡方面にも金氏の足跡が残されている点は注目される。
- (29) 前掲注(14)七海論文。
- (30) 遠藤巖「あかうそ三郎」(『六軒丁中世史研究』8、2001年)、川島茂裕「奥羽合戦における藤原泰衡の布陣と藤原基成の娘」(『宮城歴史科学研究』54・55、2003年)、大石直正「「柳之御所における宴会の風景」の舞台裏」(『宮城歴史科学研究』60、2006年)。
- (31) 前掲注(9)八重樫論文。
- (32) 大石直正「津久毛橋」(『一関市博物館研究報告』14、2011年)。なお、『沙石集(米沢本)』巻第五(新編日本古典文学全集)は、名取川渡河の際、頼朝が上の句を詠み、「梶原(景季・景高の父である景時のことだろう)付けよ」と命じて下の句を継がせたエピソードを載せる。
- (33) 前掲注(24)七海論文。
- (34) 前掲注(30)遠藤論文。
- (35) 前掲注(5)白根論文。
- (36) 入間田宣夫「平泉藤原氏の自己認識」(同『中世武士団の自己認識』三弥井書店、1998年所収、初出1997年)ほか。
- (37) 前掲注(20)大石論文。
- (38) 前掲注(20)入間田論文。
- (39) 前掲注(20)入間田論文。
- (40) 前掲注(20)大石論文。大石説に関しては、安大夫・新大夫(『鹽竈神社文書』)、住吉小大夫昌長(筑前国住吉社神官佐伯昌助弟)・諏訪大夫盛隆(信濃国諏訪社か)(『吾妻鏡』治承4年7月23日条、同嘉禎3年7月19日条)などの事例が参考になる。「人々給絹日記」の「大夫」名を神職に特定するためには、平泉における神社研究の一層の深化が必要であろう。
- (41) 入間田宣夫「折敷墨書を読む」(前掲注(20)平泉文化研究会編著書所収)。
- (42) 古川一明「十一～十二世紀の陸奥国府と府中」(中世都市研究会編『中世都市研究』16、山川出版社、2011年)。
- (43) 岡陽一郎・阿部勝則・小岩弘明・時田里志・七海雅人・平田光彦「平泉出土文字資料の再検討 その1」(『平泉文化研究年報』12、2012年)。
- (44) 前掲注(24)七海論文。
- (45) 前掲注(9)八重樫論文、斎藤良治「丸森町大古町遺跡の考察」(『宮城史学』28、2009年)、同「丸森町大古町遺跡」(東北学院大学アジア流域文化研究所編『アジア流域文化研究』Ⅶ、2011年)。
- (46) 前掲注(10)羽柴論文176～177頁。
- (47) 大石直正「藤原経清考」(前掲注(19)同著書所収)。

(未完、次号につづく)

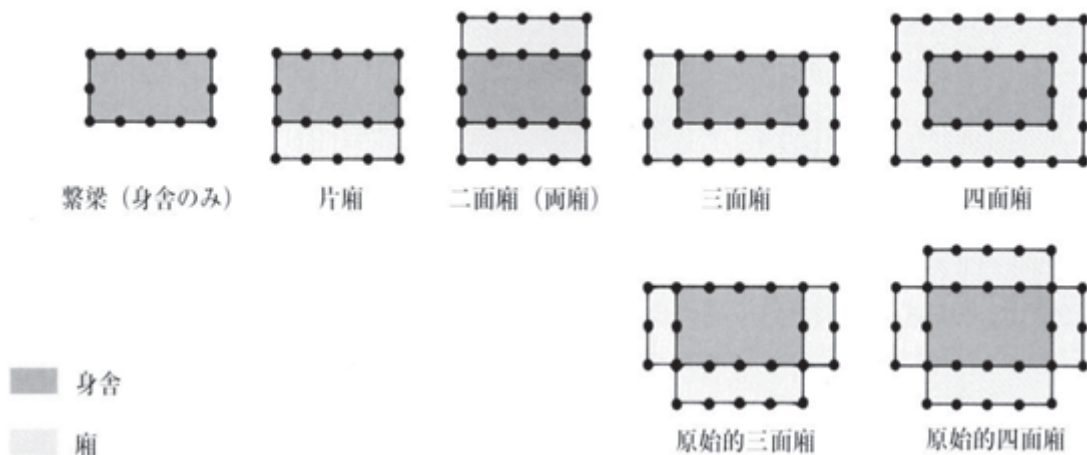
四面廂建物からみた平泉の都市景観

山形大学 荒木志伸

1、はじめに

四面廂（しめんびさし）建物は、奈良・平安時代（律令期）を通じて、格式の高い形式の建物に採用された建築法とされる。この用語は、主に考古学分野で使用されてきたものである。従来から、宮殿・役所では中枢となる建物に、寺院では金堂等に、都城では貴族の邸宅の主要殿舎に採用されることが多いと指摘されている。

近年、この四面廂建物について、考古学のみならず、文献史学、さらには建築学的視点もまじえて、様々な方面から検討する機会があった。2011年、奈良文化財研究所にて開催された第15回古代官衙・集落研究会では、全国から検出された四面廂建物を集成し、様々な視点から検討および討議をおこなった。主なテーマとしては、都城とその周辺地域の四面廂建物、東日本と西日本の四面廂建物の規模・構造の比較、建物機能の検討などである。



【図1】 廂のつく建物と分類（奈良文化財研究所 2003 より）

しかし、このときの検討対象となったのは主に10世紀までの資料であり、11世紀以降の資料については、俎上に載らなかった。

東北地方の四面廂建物は、2011年の段階で67棟が確認され、そのうち51棟が平泉に集中するという（八重樫 2011）。こうした平泉周辺への集中状況は、異様ともいえる。その内訳をみると、柳之御所跡 24 棟、志羅山遺跡 14 棟、泉屋遺跡 7 棟、国衡館跡 2 棟、祇園 I 遺跡 3 棟、細田遺跡 1 棟、岩崎台地遺跡 5 棟である。四面廂建物が、平泉の都市景観を形成する上で重要な要素であったことがわかる。しかし、その機能や役割については、詳細な検討はなく、未解明の状況にある。

特定の空間にこれだけ四面廂建物が集中する様相は、平泉という都市固有の構成要素として位置付けるべきであろう。

本研究では、これらの四面廂建物を考古学的手法により検討し、その構造と性格を明らかにすることで、都市としての平泉の特徴を明らかにすることを目的とする。初年度の作業として、現段階における東北の四面廂建物の集成と研究史を整理し、共同研究者の分析視点の共通理解を得る機会とした。以下、その概要について述べておきたい。

2、研究の背景

先述した 2011 年の奈良文化財研究所での集会での成果について、本研究と密接に関わる内容についてみておきたい。

まず、東日本のなかでの位置付けであるが、東北地方の四面廂建物は、奈良・平安時代の城柵官衙（役所）遺跡、あるいは寺院関連遺跡に集中的に確認できる。東日本における村落内寺院仏堂と考えられる事例については、集落におけるランドマーク的な意味があったとの指摘がなされた（江口 2011）。

一方で、必ずしも遺構の分析は十分とはいえない状況にある（青木 2011）。四面廂建物の柱掘方の形状は一樣ではなく、その分類作業や特性を見極めることによって、造営に関わる問題に踏み込める可能性が提示された。

なお、建築史学の立場からは、建物規模は外観上同じにみえても、身舎建物を四面に廂を付けることで、その面積は 2 倍近くになり、かつ内的な空間活用が可能になるなどのメリットがあるとの指摘がある（箱崎 2011）。

3、検討方法

こうした研究成果をふまえ、これまでひと括りにしてきた四面廂建物について、改めて詳細な考古学的分析をおこなう。現在、遺跡群の発掘調査も進み、それぞれの年代観を把握できるようになり、遺跡の性格を考慮した上での解釈も可能となった。平泉という限定された都市空間のなかで、多数ある掘立柱建物のなかで四面廂建物の特性を分析できるという点も大きい。

まず、検討課題として、遺構の分析をおこなう。その上で、遺跡内における建物の位置及び建物群の空間構成等について合わせて検討する。

遺構面の検討について、以下のポイントを基準とする。

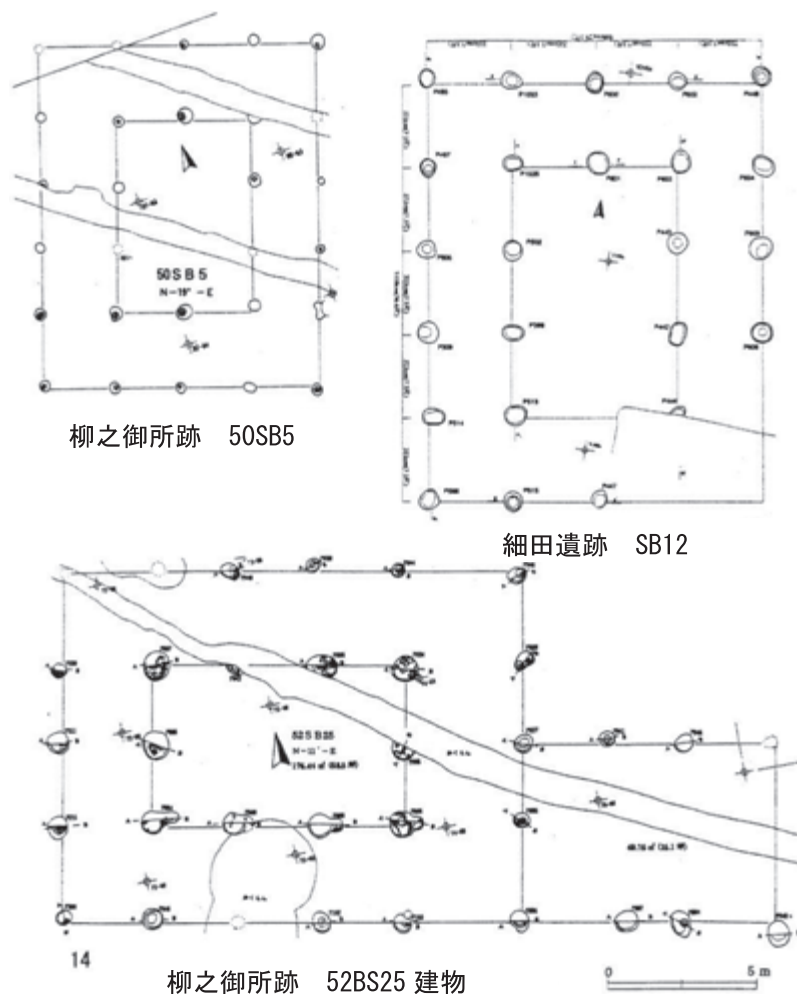
(1) 柱間寸法 (2) 身舎の規模 (3) 廂 (4) 床束 (5) 間仕切り

(1) に関しては、律令期の城柵政庁の正殿が 2×5 間の身舎に廂がつく構造を基本としており、柱の掘り方が古代を通じて隅丸方形から円形へ、また小さくなるなどの傾向が指摘されている（高橋 2010）。これらについて、鳥海柵や大鳥井山遺跡といった 11 世紀代の遺跡との比較や、平泉遺跡群の中でも年代的な差異により遺構上に何らかの違いが確認できるのか、分析する必要がある。

(2) については、建物の機能とも関わる問題である。したがって、(4) や (5) と

合わせた解釈をおこなう。(3)については、廂の幅が短いものについて、年代差や系譜が異なるなどの可能性もあると指摘されており(八重樫 2011)、出土遺物の検討もからめた更なる詳細な分析が必要になる。

なお、八重樫氏が指摘するように、平泉の四面廂建物遺構は柱筋が揃わない傾向が強く、古代東北における城柵官衙遺跡におけるそれとは異なる側面も見受けられる。また、その系譜がどこにあるのかも、現段階では不明である。柱筋がそろった例も少ないながら存在することは、機能や建物の性格にもかかわる可能性を含んでおり、見逃すことのできない特徴としてとらえていきたい。



【図2】身舎同様の廂の出建物(八重樫 2011 に加筆)

出土遺物の検討も必要になる。渥美産の陶磁器の様相や輸入陶磁器の様相の把握をはじめ、遺構の検討と合わせておこないたい。平泉には、その出土遺物について平泉セットと称される独自のスタイルがあることが判明している。遺構分析のみならず、出土遺物の検

討は、それぞれの四面廂建物の解釈において重要な視点であることはいままでもない。

なお、筆者は出土文字資料にも、筆者は古代的な要素と中世的な特徴が混在する様相があると考えている。遺跡や遺構の性格を探るうえで、大きな手掛かりとなる資料でもあり、遺跡の中での位置付けや解釈について、検討の可能性を多分に含んでいる。これらについても、研究の一つの視角としたい。

4、おわりに - 現段階の状況 -

2013度は、平泉の四面廂建物について、2011年以降に新たに検出された四面廂建物についての集成作業をおこなった。また、共同研究者である青木氏、江口氏、八重樫氏と、平泉とその周辺の遺跡の環境について現地踏査をおこなうとともに、視点や分析方法に関する討議を蓄積し、今後の研究における共有認識を図る機会とした。

2014年度以降は、こうした基礎作業をふまえ、他地域の四面廂建物との比較検討などを進め、平泉遺跡群の四面廂建物の特徴について考察していきたい。

【主な参考文献】

- 奈良文化財研究所『古代の官衙 遺構編』2003
高橋学「古代陸奥国と出羽国の方形と円形」『第7回 安倍氏の柵シンポジウム』2010
八重樫忠郎「東北地方の四面廂建物」『前九年・後三年合戦-11世紀の城と館-』2011
青木敬「検出遺構における四面廂建物」『四面廂建物を考える』2012
江口桂「東日本における古代四面廂建物の構造と特質」『四面廂建物を考える』2012
箱崎和久「身舎外周柱列の解釈と上部構造」『四面廂建物を考える』2012

第14回平泉文化フォーラム 実施報告

岩手県教育委員会は第14回平泉文化フォーラムを、平成26年2月1日(土)と2日(日)に一関市を会場として開催した。今回のフォーラムは、いわて高等教育コンソーシアム（構成大学：岩手大学、岩手県立大学、岩手医科大学、富士大学、盛岡大学、放送大学いわて学習センター、一関工業高等専門学校）、岩手大学平泉文化研究センターとの共同開催とした。

第14回 平泉文化フォーラム

1. 日 時 平成26年2月1日(土)、2日(日)
2. 場 所 一関市文化センター
3. 主 催 岩手県教育委員会、いわて高等教育コンソーシアム（構成大学：岩手大学、岩手県立大学、岩手医科大学、富士大学、盛岡大学、放送大学岩手学習センター、一関工業高等専門学校）、岩手大学平泉文化研究センター
- 共 催 一関市教育委員会、奥州市教育委員会、平泉町教育委員会

4. 日 程

【1日目】

- 13:10 基調講演「仏教建築にみる平泉文化の特質」
清水 擴（東京工芸大学名誉教授）
- 14:55 遺跡報告① 無量光院跡の調査成果 平泉町教育委員会
- 15:15 遺跡報告② 骨寺村荘園遺跡の調査成果 一関市教育委員会
- 15:35 遺跡報告③ 白鳥館遺跡の調査成果 奥州市世界遺産登録推進室
- 15:55 研究報告① 四面廂建物からみた平泉の都市景観
荒木 志伸（山形大学）
- 16:25 研究報告② 藤原清衡と「平泉」思想
伊藤 博幸（岩手大学）

【2日目】

- 9:15 遺跡報告④ 柳之御所遺跡の調査成果 平泉遺跡群調査事務所
- 9:30 遺跡報告⑤ 伽羅御所跡ほかの調査成果
(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 9:45 研究報告③ 奥州藤原氏の権力基盤に関する基礎的研究
七海 雅人（東北学院大学）
- 10:25 研究報告④ 平泉仏教の歴史的 성격に関する文献資料学的考察
誉田 慶信（岩手県立大学）
- 10:55 研究報告⑤ 平泉の食文化
前川 佳代（奈良女子大学）
- 11:25 研究報告⑥ 12世紀前後における奥州藤原氏文化と北海道の関連について
—鍋と玉—
越田賢一郎（札幌国際大学）

5. 入場者数 のべ450名

平泉文化研究年報 第14号

平成26年3月28日

発行 岩手県教育委員会

〒020-8570 岩手県盛岡市内丸10-1

編集 岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課

印刷 トーバン印刷株式会社